
I S -AVERAGE or HALF-

瑠璃心月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S - A V E R A G E o r H A L F -

【Zコード】

N 7 7 4 5 T

【作者名】

瑠璃心月夜

【あらすじ】

I S - A V E R A G E o r H A L F -

通う一人の学生がI Sが使える・・・という感じで

”男でI Sが使える奴が一人出たのだから他にも居るはずだ!!”
という理由で行われた検査によつて発見された二番田の男の話です

プロローグ（前書き）

ええ～

あまり自信はありません

が

友と考えて、この作品にしてこうと思つておつまむ

では、どうぞ

プロローグ

物語は始まる、いや……始まっている

俺……俺の立ち位置はオリムラ イチカといつ一つ年下の男のキッカケによって無くなった。

立ち位置……それは平均と半分という名の制約に基づいていた立ち位置……その位置に不満はなかつた。

むしろその位置にいたからこそ友人の役に立つていたこともあり好きな位置だった。

しかしその立ち位置はもう無い、そして今思えばそんな位置よりも今の立ち位置が好きな自分がいる。

これもオリムラ イチカと天才のおかげかもしれないな……

制約を打ち破れなかつた俺に勇気ともう一度立ち向かうためのチャンスをくれたのだから。

「I.S学園 1年1組 2番 安部 零時！」

これが今の俺の立ち位置だ！

そして今は黒い所属不明機と戦闘中

「俺は！俺は！平均なんて認めない！――！」

プロローグ（後書き）

み、短い……もっと長くできるならうつ頑張ります

0-1-()

「うう……自信が……

でも、とにかく楽しんでいたりやるよ!」

では、どうぞ

Average

想像以上にキツイ、これはキツイ この一言が一番今の状況に似合う。

隣にいる彼を見ると顔が青ざめていた……きっと自分もこんな感じになっているだろう。

そんな彼は俺の目線に気付いたのかこちらを見て

「なあ……零時」

「ああ……言いたいことはわかるぞ一夏」

彼の名前は一夏、織斑 一夏だ

世界で一番最初に I.S を動かした男だ

そして俺が2番目、正直今は口元に居るのを一夏のせいにして殴りたい

そしてここは I.S 学園、入学してから初めての教室入りだ

まさかこんなにキツイとは思わなかつた…

え？きついって？そりや好奇心と物珍しさにこんなに見られたら自分が動物にでもなつたようであまりいい気分ではないのだ

それが積もり積もって精神的ダメージへと変わつていったのだ

今までこんなに注目されたことがなかつただけに今の状況はキツイ

でも！俺は逃げない！

俺は今回を機に”もう一度変わるように努力します”と一方的にとある天才ウサギに約束したのだから逃げるわけにはいかない。

「わかるよな…でもやつぱりこれは」

一夏は苦笑いをしながら言いつ
一夏は基本考へてることが簡単にわかるようなタイプなのだが今回
はそんなこと関係ない

「ああ・・・これは」

「「あついな...」」

そんな俺たち一人を救うように教室の扉が開き
一人の女性が入ってくる、その女性は教卓の所に来ると

「みなさん入学おめでとうございます、私はこのクラスの副担任の
山田真耶です、これから一年間よろしくお願ひしますね」

につっこりと微笑みながら挨拶をした山田先生
しかし教室は俺と一夏に注目されていて反応がない

「.....」

ついに微笑みながら汗をかき始めた山田先生
ついでに顔も青ざめてきているではないか

「そ、それでは自己紹介でもしましょつか」

何とか復活?をして話を進めていく

そして一番の相川さんの自己紹介が終わり

「次は安部君ですね」

ちなみに一番ならば相川さんの後ろ
廊下側の前から一番目にふつう席なるはずだが
俺と一夏は出席番号順になると離れるので唯一の同性なので隣にしてほしいと言った教卓の前にしてもらつた

席を立ち後ろを向き

「安部 零時です みんなとは歳が一つ違うが基本どんな話題でも構わないから気軽に話しかけてくれ 一年間よろしく」

うまくはないだらうが下手でもない自己紹介はできたと思つ
まあ最初はこのへりごくぐらいだろ

「織斑くんつー織斑一夏くんつー」

「は、はい！」

おっと いつの間にかお行まで進んでたか……
あとでしっかり顔と名前を憶えないとだな

それにもしても一夏……お前自分の番が終わつてないのにまーつじ
てたのかよ

ああ……いやたぶんこの独特的な緊張感で頭真っ白になつてたんだな

裏声なんか出すからクスクスと笑われてまでいる

「あっ、あの」「めんね大きな声出しちゃって。怒りますか?」「めんね、でもあ行から初めて今お行で織斑くんの順番なの、だから自己紹介してくれないかな?」

ふむ、この先生はどうも腰が低いといふかなんといふか…………まあ、きっとそれがこの先生のいいところなんだろうな

「す、すみません。緊張して……皿口紹介ですよね?わかりました」

そこで立ち上がり俺と同じく後ろを向いてクラスメイトと皿口が合つようになる感覚になる

一夏が「うっ……」と怯んだ気がしたが……気にしない

「えっと……織斑 一夏です、よろしくお願ひします」

ああ……一夏俺より少ない自己紹介はまずいぞ……ほれ、クラスメイトたちのあの皿「もう少し何か教えてくれないかな?」皿線だまあこれを避けるには直ちに座ることか要望に応えることだな……

「すう～はあ～」

おつー深呼吸したってことはなんか言つつもりなのか?! いやないな、うん 少しの付き合いだがそれくらいはわかる
おつー一千冬なんだ、一夏気づいてないってことは

「以上です!」

スパーーン！

うむ、いい音ですね まあ弟のあんな自己紹介見たらああなるよな

「イツツ！」

頭に手を当てながら後ろを振り返る一夏

「ち、千冬姉！？」

スパーーン！

「織斑先生と呼べ馬鹿者、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな山田君」

「いえいえ、副担任ですからこれくらいにはしない」と……」

ふむ、織斑家に滞在したときは千冬さんを見ていたときは「この人職場で大丈夫かよ……」と思つてた

スパーーン！

「イツテ！なんで一夏じゃなくて俺が叩かれなきゃいけないんだよ

千冬……先生」

先生って言つたんだこれで叩かれないとつ

「……し、失礼なことを考えた罰だ」

ふむ、どうやら千冬先生というのは大丈夫みたいだと、いうか人の心を読まないでほしいし
これで赤面してたらかわいいのに……

スパーーン！

「ふん！」

だから人の心読まないでほしい……
いやこれはもしさ俺は……一夏同じでわかりやすいタイプなのか?!
これは気を付けないとだな、うん

「諸君！私が織斑 千冬だ。君たち新入生を使い物に育てるのが私も仕事だ。」

「「きや」」

ん？

「「「キャア————!!!!」」

うをい！

なんだなんだ！変質者でも出たのか？！

「千冬様よ！本物の千冬様よ……」

ああ……なるほど

つか本物じゃないのがいるみたいな言い方だな、おい

まあそれからは千冬さんを褒め称える？内容が続き

「静かにしろお前たち……まったく…何故私のクラスにはいつも馬鹿どもが集まるのだ…まあいい、お前たち！私の話はよく聞け、わかつたら返事をしろわからなくても返事をしろ」

「「はーーー！」

「うやつて千冬さんのしもち……ゲフンゲフン！あぶない、また呑かれるといひだつた

それからは1時限目が始まるまではぎりぎりまで自己紹介が続き1時限目が終わった

そして今は1限と2限の間の休み時間なのだが……

今このクラスに一夏はいなー……先ほどボニー・テールの女子に連れて行かれた……
と、いうことはだ……このクラスには俺しか男がない
誰でも良いから……助けて

「うふうふーじゃ私が助けてあげようかレイちゃん？」

ああ……しまつた……いつも人の心が読めちゃうやつだった

わて……ソニーに至るまでの事でも考えて時間つぶすかな

0-1 (後書き)

やっと進んだって感じです……

02 (前書き)

オリジナルです

男がI.Sを動かしたことにより世界規模で行われたI.S適性の検査、
男だけに用意された検査
3月に行われ始めた検査

それは小学生から大学生までの年齢限定でI.S学園で行われた
これは平日に行われた義務付けられたものだった

今日の午後から藍越高校1年生の番だった

今は俺のクラスの番

検査方法は単純、S u i c aのようにタッチして通るだけ

うん、単純だ

そしてこの検査は小学生から中学生までの終わっており成果はない

「なあ零時……授業がつぶれたのはいいがつまんないよな~」

午後からと言つてもほかの学校もいるから時間がかかるつている
そして俺の前に並んでいる相沢巧^{あいざわ}彼^{たくみ}と俺は幼稚園からの幼馴染だ
しかもこの幼馴染、何でもできるイケメンだ……くそう……平均的
な俺とは大違^{たが}いだ

「だよな、周りの学校の連中もやる気がないのが見て取れるな、それ
にI.Sが使えても得をするとも思えないしな……実際織斑一夏がモ
ルモットになつたつて噂だつてあるんだぞ?」

俺がそんなことを言つたら

「なに？！得がないだと？！嘘だ！！ しかし、ザー平均のお前が
言つてことはそれが世の中の意見だといふのか！ だがしかし俺
はそれを乗り越えてこその意味があると進言する！ 男子ならば女
の子いっぱいの中で過ごしたいと思わないのか！？ その夢を叶え
てくれるのはエス学園だ！だからエスを動かして俺はエス学園
に入つて見せる…！」

そんなことを大声で言う巧
おいおいモルモットになるのを乗り越えるつてバカだろ なんて
思つていたら

オオ～～～！～～～ パチパチパチ！～～～

拍手喝采

その通りだ！とか、俺たちが間違つていた！などせつときのやる氣の
なさから一転目に炎が見えそうなテンションになつてこる もはや
検査会場（第三アリーナだけな）にいる男たちの心は一つとなつ
ていた

「ヒラヒラ…モード喋つてもいいがつるむくはするな…！」

怒られた？

なんか今のは微妙な怒り方だつたな

まあそれよりも

「男つて単純だな……おい」

「何を言うアベレージこと安部零時くん……」この会場はもはやロマンを求める者しかいない。すなわち今となつては今の状況こそ平均になつたのだよ……ふふふふ！ふあつはつはつはつは……」

高笑いを始める友人、この友人は世間で言うオタクの部類だと思う。携帯のストラップは今は確か「まよチキ！」だ！男装執事つて素晴らしいな零時！」と言つていたはずだ。他のものをつけていたときも「みんなも読むがいいぞ！」とか宣伝していた。

まあここまで別に人の趣味だし自分が面白いものを面白いと書いてはいけないなんてこともない

実際俺もこの相沢こと奴に毒されオタクの部類に入つていった

そして奴が面白いと言えば面白かったとクラス中が言つ、まあこれも情報共有の範囲内だ、だから別に何も言わん

しかしだ！奴があればアニメ化する、でも2期はやらないとか宣言……予言めいたことを言い出すときは凄いなにが言いたいかといふと奴の発言は、言つたことが絶対ではないが大体当たる

これはうちのクラスの共通認識だ

この

そんな相沢こと奴がこんなことを言い出した

「そして！平均と半分をステータスにしている零時は必ずEISを動かす！ 本当ならば俺が動かしたいがああ俺は無理だろうな……俺と変われ！」

は？何を馬鹿なことを。

「おいおい、いくらなんでもそれはない、お前の言い方だと男が工Sを平均か半分使ってないとダメな計算だぞ。今回ばかりはお前の予言の外れたな」

「ふつーならば賭けでもしようじやないか零時」

「鼻で笑いやがって……良いぜ！その賭け乗った！ それで賭けは何にするんだ？」

「なあに簡単だ、俺が勝ったときお前は I.S 学園あいざわ ゆうにいる……そしてあそこには我が妹がいる！つまり！我が妹、相沢悠あいざわ ゆうとデートせよ！」

相沢悠……巧の双子の妹で、美人…かわいい系ではなく美人だ、伊達にイケメンの妹じゃないとと思う
それにスタイルだつて申し分ない

しかし今の俺は冷や汗をかいしている……俺は悠に好かれている、なぜかは知らん

本人に直接聞いたら「人を好きになるのに理由が必要なのかな？」と質問を質問で返してきた

俺は悠が苦手だ、何でもできるからだ

今の時代女尊男卑……男ができる奴なのは構わないが……女子ができる奴だと抵抗ができる

きっと俺が考へている=世の中の男のもそう思つているのだろう
別に悠の事が嫌いなのではない……むしろ自分に不釣り合いで悠に悪くて俺から壁を作つてしまつてている

前に巧から「我が愛しの悠を避けるとは！」と説教をくらつたとき
「お前…なんで悠に壁を作るんだ？好きな奴でもいるのか？」と聞かれたとき俺は「好きな奴はいない。壁は…気まずいんだ…好きじ

やない事に申し訳なくてな……それに好きじゃないとはっきり答えて悠があきらめるか？」と答えた
奴は「むしろ好きになるまで愛してあげる、と言つた」と答えた、いや予言しやがった

その後曰「お前の気持ちは嬉しいが……」と俺はハツキリしないへた
れ根性で悠に言つてみたら「好きな人がいるわけじゃないんだよね？じゃあ大丈夫！むしろ好きになるまで愛してあげるよ」と、とびつきりの笑顔で答えた

ちなみにこの笑顔にドキッとしたのは内緒だ

この後の悠は凄かった……今まで人目や場所を選んでの行動をして
いたがその日を境に無くなつた
正確には人目のある場所では何もなかつた、が！
俺以外には気づかないようにしながらスキンシップをしてきたりするようになった

え？具体的なスキンシップの内容を教える？』想像にお任せしますw

「おい、戻つてこい零時！」

体を揺さぶられ意識がはつきりする
そつやらいひいと考え込んでしまつた

「お、おい待て！悠関係は今関係ないだろこのシスコン…やめてく
れ！た、頼む！な！」

「はつはつは！将来の義兄をシスコンと呼ぶか義弟よ

くそーこのシスコンが！

「さて零時。お前は俺に何を賭けさせたいんだ？内容が内容だからな、なんだつていいぞ」

こいつ…目が本気だ。このシステムが！
そっちがその気なら俺は！

俺が勝つたらオタケやめろ

「ういえは」「いつほ」んな賭けやめるだらう

いきなり胸倉をつかまれガクガクされたが、「なんだなあ！」の後に電池の切れたように止まつた

「良いだろ？！我が妹のためだ！それで良かろ？！」

「なに？！そんな馬鹿な！お前がオタク精神を賭けるような馬鹿なことをするなんて！」

「これこそが我が妹への兄妹愛なのだよ！悠が工学園に行き……この一年間…お前の行動を伝え続けてきた…」「なに…なんてことをしてくれたんだ貴様…！」

「俺も、もう疲れちまつたのさ…」「ちょ…そんな事良いから悠に一体なにをいつ？」

「うひー…早く検査して……」

話していくうちにいつの間にか自分たちの番になっていた
くそー今は検査よりもこっちが大切だつてのな！

「ふつー先に言つてるぞ零時」

そういうながらHS（確か打鉄とか言つたかな）に向かっていく、
手をHSに触れる巧

「ふむ、俺には動かせないようだ。まあ零時…お前に出番だ…お前
なら必ず動かす！」

そんなことを大声で言つ巧

そのせいか周りは俺に注目していく

「無理に決まつてゐるのな…」

俺はそういうながらHSへと手を触れた

何も起きない

「俺の勝ちだな巧」

IISから手を離し、すでにIISから離れていた巧の方へ向かおうとする

周りの期待していた連中からの注目もなくなつた

「まあちよつとまて、もう一回触れてみる。検査官ももひひひひひひひひだけ待つてください、次は動かしますから」

ヒ、強引に俺をIISに触れられる巧

「あ、おこ巧、向すんだよ」

「零時...」

いきなりまた大声を出す巧
これでまた注目の的だ

「な、なんだよ」

「地球上の男女比は?」

は?何を言こ出すんだこいつは?

「わかるわけないっての」

「単純に考えてでいい」

「そんなの半分半分じゃないか？」

「そうだ零時！難しく考えなれば普通半分半分だと考える…じゃあ次は地球上にいる女性はISを動かせるよな？」

「まあ織斑一夏を含めなきやな」

「じゃあ地球上にいる人類の半分の人！はISを動かせるよな？」

「ああ人類つて考えるなら半分の人はISを動かせ……！」

俺の頭に何か入ってきた

本来ならば今「動かせるな」と言おうとしてたんだ

でも言う前に手を触っていたモノ、ISから何か……いやISについてISからISを教えてもらつた、というのが正しいだろうな

今ならわかっている俺はこれを動かせる

さつきは動かせなかつたのに今は動かせることまでわかつている

クソ！嵌められた！

クソ忌々しい友人を見てみると

「はつはつはつはつ！！！！友よ！賭けは俺の勝ちだな！人類の半分は動かせると思った時点で俺の勝ちなのだ！わつはつはつ！」

クソ野郎！俺よりも俺を理解してる奴なんて嫌いだ！

「おつと、今自分よりも自分を理解してる奴なんてと思つたな？残念だが俺はお前が本当に動かせると思つてなかつたさ」

「はあ？…お前だつてさつさまであんなに自慢げに言つてたくせにか？！」

「ああ、お前が動かせると言つたのは悠だ」「きつとレイちゃんの平均と半分はレイちゃんがそれでいいと諦めてるからそうなんであつて、きつとその考え方さえ変えてしまえばレイちゃんは何でもできるはずだもん」「だ、そうだ」

「意味が分からんな……それとエリとは関係ないぞ」

俺の平均と半分

それは安部零時の特殊能力と言つて良いほどのものだ

実際にそんな能力とかがこの世界にあるわけじゃないが、俺のすることなすことが平均と半分なのである

例えば百点満点テストの平均点が60・5点なら俺は61か60点だ

例えば百点満点テストの平均点が20点ならば俺の点数は平均点の20点または半分の50点になつてこる、1の場合はどちらにな

るかわからない

「お前の平均と半分はお前の気持ち次第で変わつてくるつて事だ、まあそれは後で聞かせてやる。それよりも早く負けを認めて動かして見たらどうなんだ?ん?」

クソむかつく態度だ

でも負けを認めないのも男として気分がよくない

そう思い俺はEISを動かしたのだった

まつたく……どうしてこうなったんだか……

02（後書き）

オ、オリジナルって難しい・・・・・

03 (前書き)

瑠璃のHPが1になつた……

PV&ユニークを見た

HPマイアアアツクス！！！！

IHSを動かした……ああ動かした
今、会場は静か、いや…ざわついてはいるがどう反応していいかわ
からないでいる。これは検査官も同じだ
あたりを見回す、とこりより前を向いていても360°。周りが見渡
せている

しかし、今の俺にとっては田の前にいる相沢巧さえ見れればいい

「そんなに睨むな零時、わるかつたわ」

言葉・表情・態度から謝っている普通ならとわかる
しかし今俺はIHSを装着しているんだ
表情・声からしてこいつは本当に謝っていないと素人さえわかつ
てしまつ

「なるほど…こりや最強にして最悪の平氣だな、IHS装着者に嘘は
つけないようだぞ巧」

「別に嘘だとはれて構わないさ、賭けさえ守ってくれるならな」

「こいつ楽しんでやがるー」

「わかつてゐるか……わかつてゐつての」

「へへへへへへミでは終に教えてやるつ

携帯を耳に当てて

「頼む……お願いだ～やめてくれ……俺の理性をぶち壊す氣か
！！！」

「ふむ……まだそんなものがあったのか……もつと過激に攻めた方が
良いようだと悠に伝えておいた。おお、悠か？」

俺のお願い何て無視で電話を始める巧

「アツ~~~~~！……」

大声を出して邪魔をしようとする

「お前が言つた通りになつたぞ。…………ああ、あと零時が、データー
してくれるそつだ。…………うむ、義弟ができるのを兄は楽しみにして
いるぞ悠。…………ああ、ではまた」

携帯を閉じて「ひらき」一矢りとみてくる

そんな……そのまま話が終わつてしまつなんて

「さあ諸君ー検査を続けるといー！検査官は零時の対応を学園に訪
ねてくるといふと思われる！」

パン！と手を叩くと再び周りが騒がしくなつてきた
お前どこの政治家だ！むしろお前がなつてしまえ！……

「さて零時、もうH-Uから降りていいくんぢゃないか？」

「ん？ああそだな」

動かすときH-Uに教えてもらつた？方法で降りる

「はあ……俺……どうなるんだろ……」

そんなことを誰に言つたわけでもなくつぶやくと

「まあモルモットじやないか?」

「チキシヨ～～～！！！泣いてやる！～～その前にお前を殺してやる
～～～～～～～～！」

「まあそういうな、俺はお前は上を田指せるはずだと思つていい。
なぜかはハツキリしてないが……お前は本当ならば平均と半分に縛
られてるとは俺は思えないんだ、長年一緒にいたがわからなかつた、
すまない零時」

突然真剣な顔をして謝りだす巧

「お、おこおい、いきなりビーツしたんだよ」

「真剣な話だ。俺はお前が好きだ。もちろん俺は友人としてだ、ま
あ悠は違うだろうがな。どちらにしても俺の……俺たち相沢兄妹の
初めての友だからな。…………だから俺たちはお前に恩返しをする
んだ」

「なんだなんだ、最後の方聞こえなかつたぞ？つか一番最初がたま
たま俺だつただけだぞ」

「まあ気にするな」

何やうあきれた顔をして見てきているが何故だかわからんな

「君が安部 零時か？」

突然後ろから名前を呼ばれ後ろを見る

「ほつ、引退した後のここにいると悠が言っていたが、まさかあなたが来るとはな……」

そこにはスーツの似合の女性が立っていた

ああ、俺もこの人がここにいるのは悠からメールで聞いていた……
悠はISにあこがれているからな

ISが好きでIS学園に入れるよう頑張って勉強してたし
ま、そのおかげで俺は受験勉強中は悠を気にせず過ごせたのだがな

「お前が相沢兄か…まったく私の授業中に電話するとはな… そのおかげでココに早くこれたのだがな」

「いつも妹がお騒がせしています」

ペコりと頭を下げる巧

「いや相沢妹が問題…というか騒ぎを起こしたのは今回が初めてだ。
むしろほかの生徒と違い私が気兼ねなく話せる相手だから助かって
いる」

「それは良かった。それで…織斑 千冬さん…いや先生、零時の事
できたのですか？」

このスーツ姿の女性は織斑 千冬
おそらく織斑 一夏の姉であろう

「それ以外に何があるというんだ、君が安部零時だな？」

睨まれている

いや、きっと睨んでいないのだろうがこの人に見られないと自然と背筋が良くなる

「はい、俺が安部零時です」

「そうか……ISを動かしたんだな」

頭を縦に振り肯定する

「君はこれからこのIS学園に通うことになるんだろう……こや通りしかないだろ?」「

ああ……学園行き決定なのか

「そして君は来年二年生だ。そして織斑一夏は来年入学……つまり一年生だ。正直ISについて何も知らない人間がいきなり一年から初めても何もわからぬまま終わるだろうな」

「ええ、ISも起動方法とかを感じ的に教えてくれただけで理論とか教えてくれたわけではありませんから」

「そこ」でだ、私は一年からIS学園に通うこと進める

一年から……つまり留年していることと変わらない

「親と……親と話したいですね。もしかしたらIS学園に行くことを

反対されるかもしませんし」

「やうか、だが親御さんにはもつ連絡はして本人の意思に任せると
言われてこる」

おおおうー仕事が早いな

「なら俺は一年からやらしてもらいます。一年からなら織斑一夏も
いるだらひしきは過ぎやすいんだから」

「やうか、そいつもりあるトライシの姉として安心ですか。」

姉…やはり姉弟だったのか

「ああそれとお前は何でもできるやうだな」

なんでも……ねえ…

「やうだな、零時は何でも平均的にできるな」

「なんでもまだきなこいつの、平均的にできるだナだよ」

「それより先生、零時はもう帰つていこのでしようか?」

俺は無視?! ねえちよつと巧さん?!

知つてた、無視つて辛いんだよ?..俺はこじられキャラじやないん
だからな!..

「ああその」とか、安部お前たちに来ないか?..」

「うちに来ないか……まるで友達を誘つよつた軽口で言いますね

「えっと、なぜそななるかわからないんですが……」

「お前はこれからＴＶで大々的に発表されるだらう、そななるヒマスコミなどが家まで押し寄せるだらう。」

まあそなだらうな、でもしかしそれって

「それは先生の所も同じなのでは？」

これは巧が言つた

「それにまだ俺学校ありますし……」

これは俺

それと学校帰りに他人の家に行くのはあまり好きではないのだ
せめて着替えてから行きたいものだ

「幸い私は顔が広くてな、私の家にはマスクミは少ないだらう。
学校については何かしか学校側から発表があるだらう

少ない いないが一番の理想だが仕方ない
学校は…面倒だ、としか言えない

「まあ俺は構わなかな、むしろ織斑一夏と先に交友関係を築いて
おけるのはありがたいし

もしクラスが違った時でも先に知り合いなら困らないしな

「なら決定だな、私はこの後職員室に戻つて荷物を取つてくれる。お前は校門で待つてくれ」

「え？！今からですか？！授業は？！つか今日からなんですか？！」

「今日からの方がいいだろうな。仕事は副担任のものに任せてある大丈夫だ」

うえい w お仕事がお早い人だな w

「荷物は相沢兄に届けてもらひのがいいだろう

「と、言ひことは俺もついていくんですね

なにか巧を巻き込んでしまつたようだ

「なんかすまんな巧」

「良いつての、友達だろ」

そう言いながら悪友が笑う

まったく、最高のともをもつたものだ

03（後書き）

HPが半分減った

レベルが1上がった……特に意味がなかつたw

今回bugでした……ええ自分でよくわかりました……

負けてたまるかあ～～～！！！

吠えたことによりHPが減った……ぐはっ！

あの後はモノレールとか電車で織斑家へとたどり着いて意外と家が近いことに驚いたんだ

まあ藍越高校に通うために受験会場行つたはずだつたつて一夏から聞いたしな、そりや案外近いし

聞けば中学は実は一緒だつたらしい

まあそんなこんなで「レイちゃんつてば」家についてからも大変だ……？ん？俺はそんな家には言つてないぞ？

「えへ？私を無視するレイちゃんにはキ、キスをしてあげます」

ああそうだつた……俺は現実から逃げてゐるといつた……

それよりも今は

「ほひ悠、何をしようとしているんだ」

「何つてキスだよ、そのあとは行けるといつままで行つて思つてしまつた」

元気よく手をあげながら宣言する

まあ悠は巧と違つて宣言したつて大丈夫だがな

しかしこいつレベルアップしたな……1年会わないでこんなにも

「成長するなんて？」

腕を組んで胸を強調させてくる

「ゴクリッ！た、確かにデカくつて何をやつてるんだ俺は！」

「人の心を読むな悠」

「大丈夫だよ、レイちゃんにしか使いたくないし」

「俺にだって使うなっての……」

「だつて女の子しかいないから大丈夫かなつて心配になつて確かめてたら私の胸の成長を確かめてるし、まあ他の子の見てたら切っちやうんだけどね」

手をチヨキにしてハサミのように動かしている
何！何を！ナニを切っちゃうんですか？！

慌てて息子を手で押さえる

「冗談だつて」

「じじゃね～し～マジでビビッたわ！」

「まったく、ある意味疲れた……でも助かつたぞ悠、お前と話したおかげで大分楽にはなつたしわざわざ学年が違うのに来ててくれたんだろ？ありがとうな、それと久しぶり

「えへ、久しぶりだねレイちゃん。もうひとつ話したいといふなんだけど次の授業始まるから行くね」

「ああ、またな悠」

そつ言つて教室から出て行ひながら振り返り

「私はEISの授業で放課後までこれないんだ、だから放課後はこの教室で待つてね」

「さうだけ言って返事を返す前に教室から出て行った悠

「またく…毎回来るつもりだったのか」

キーンゴーンカーンゴーン

おっと、2時間目の鐘がなったな

隣の席を見るとまだ一夏は帰つて来ていない

と、一夏と一夏に声をかけた女の子が帰つて來た

俺は席に着く一夏に対して

「あの子お前の彼女か?」

「違ひつて幼馴染だよ」

ギロリ!

おおお~睨んでる~あの子めっちゃ一夏睨んでる~これは楽しくなり
そうだ~

「ぐすくす、一夏あの子めっちゃ睨んでるぞ」

後ろを向く一夏

「ええーちよ、なんでだよ雛」

立ち上がり女の子に抗議する一夏
ふむ、彼女は算つて言うのか
ちなみに一夏……今立つとだな

パンツ！

「席に着け織斑」

「…………わかりました」

くわくうくわたのしきなあ

ハンツ!

たかになんて叫ぐんですか？！俺なんもしてねえ！」

いや、女の匂しかけてた。ああ氣にするな。

理不尽た!!!!!!

「山田春穂をめぐる」で探査を始めよう

無視——無視なの——無視】ハシニ

静かに「N」

一
二
三
四

であるかにして、IISの基本運用は・・・・・」

眠い、内容がわかるだけに眠い……もう、寝てもいいよね？

「あ、あの阿部君、織斑君、私の授業つまんないでしようか？」

俺の意見に同意するよつじつながら、夏一

ゴン！ゴン！

「『アサヒ』」

ゲンコツがきた？！出席簿じゃなかつた？！

「誰が正直に言えといつた」

「ええ、だつてあの天才ウサギに徹底的に教え込まれたんですよ

L

「俺は零時から復讐を込められて、いやいや教えられたし

当たり前の復讐だ、一夏が動かさなきやこんな難しい」と見えずには
すんだんだからな

「それでも授業はちゃんと受けろ、それともお前たちが授業をして
くれるのか?」

「「「いえ、滅相もござこません」「

「なじむちゃんと聞いていろ」

「解

一夏

「ヤー」

俺

「やついやなんで零時ってヤーッて言つんだ?」

「ゲームで染まつてそのまま気に入つたから使つてる、結構ニコタ
リーアクションあつておもしろいぞ。他にも面白いの知つてゐるぞ」

「へー、なんてゲームなんだ?」

「BALDR シリーズだ、まつ18禁だがな

「没収だ」

「没収だ」

「男の子を殺す気?ー!」

「没収だ」

「ひさぎにもう没収されてる」

「初めて友人を褒めたい……」

うは、そんなことで初めて褒めるんかい

「まあいい、とりあえず話は聞け、お前たちは玩具ではなく兵器を扱うことになるんだからな」

そうだ、IS兵器だ

協定とか条約とかで結局競技をするため、とか言っているが軍事ISがあるって噂もある

そして俺たちはそのISを扱っていくのだ

「ええ、わかりました」

気持ち切り替えて聞かないとな

「……それでいい」

そして一時間目の昼休み時間

「へ？」

おつと、金髪少女だ
ふむ、悪くない

一夏が知り合い？みたいな顔をしてくるから首を振つて否定した

「なんだ、何か用事か？」

「まあ！なんですのそのお返事、わたくしに声をかけられるだけでも光栄ですよ」

訂正が必要だ、全然よくない
ゲーム内以外ではあまり関わりたくないタイプだ

「光栄ねえ……お前より千冬先生に声をかけてもいらっしゃが光栄だね」

「せうか？」

「お前にどつては姉だからそここの感覚は薄いかもな」

「そつかも、それと悪いけど俺たち君の事誰か知らないんだ」

知らない奴に声かけられて「光栄です！」ってなる方が頭おかしい
だろ普通

「まあ！わたくしを知らないんですね？！イギリス代表候補生にして入試主席のこのセシリ亞・オルコットを？！」

ほへ、候補生か

つてことは専用機持ちかな？

「お前候補生つてことは専用機持つてんのか？」

お、一夏ナイス

「ええ、もちろんです。国家代表IS操縦者の候補生の選出されたエリートなのですから、本来ならば私とクラスを共にするだけで幸運ですよ」

腰に手を当て胸を張つて答えるセシリ亞だけ？

「せうかそうかよかつたよかつたー」

よし適当に流そうw

たく…今になつて一年に行けばよかつたと想うぜなんか悠のありがたみがよくわかる瞬間だぜ

「馬鹿にしますの」

しまつた、流れないタイプだつたか

アイコンタクトで「おー、一夏何とかしら」と一夏に伝える

返事は「無理無理」だつた

くそへ、なんでこんな時来ないんだよ悠！…つて授業で来ないつて

言つてたな

「大体ちよつとE-Sの事を知つてるだけでよくこの学園に入れましたね。男でE-Sを使えると聞いていましたから期待していましたのに期待外れですわ」

「俺たちに期待されてもなあ零時」

こつちに話し振るなバカチン

「まあ～な～」

「まあ私は唯一教官を倒したぐらい優秀ですからわからない」とが
あれば聞いてください」

唯一ねえ…

「おい一夏、お前も教官倒したんだろ?」

「いや倒したっていつか勝手に負けてくれたって言つが……」

「は?」

おおお　美人のアホずら
まあさつさまで馬鹿にしてたやつが自分と同じつて言つんだから驚
きだよな

「あなたも教官を倒したっていつの?ー私だけと聞きましたが?」

「女子ではなくことじやないかな？」

「あなたもですのーー？」

今度は俺か…だが俺は

「俺はそもそも入試試験をやつてない」

そんな俺には興味がなくなつたのかまた一夏の方を向く

「あなたも教官を倒したっていつのですね！」

「お、落ち着けよ

「これが落ち着いて」キーンコーンカーンコーン

ジャストタイミング！助かつた

「またあとできますわー！」

おいおいまたくんのかよ…悠に助けてとでもメールしようか……いやそのあとが大変そうだ

04（後書き）

「 ばつかになってしまった・・・・・・」

ちなみにHJにはいろいろなものから武器類とかを引っ張ってきて皆さんにわかりやすいようにするかもしません

内容はネタはだしてもクロスは多分しません

05 (前書き)

遅くなりました（泣
しかも短いです（汗
グダリました（困
ではどうぞ（w

「それではこの三時間田は各種装備の説明をする、が、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス対抗戦？代表？

理解した、めんどくさいんだな
よし、俺は絶対にやりたくない

「クラス代表とはそのままの意味で、対抗戦だけじゃなくて生徒会の開く会議や委員会への出席もしてもらつ。ちなみに決まると一年間変更はないからそのつもりで」

よし、さういふ面倒なのはわかつた

「自薦他薦は問わない、他薦された者に拒否権はない」

拒否権がないだと？！
ならば先手必勝！

「はい、先生…セシリ亞・オルコットを推薦しますー」

そしてクラスメイトに向けて殺氣……田で威圧する
これできっと！大丈夫だ！

「はい、俺は零時を推薦「ああああああ…………」「おひーな、
なんだよ零時」

ああ……やつてくれた……

まさかこんなところに裏切り者が……
なぜ、俺は……一夏どうしてこいつも……

「なんてことしゃがる一夏！貴様！貴様あーー！」

「くそーなら俺は一夏を推薦します」

「えええ、お前こそなんだよ零時

「うつせーお前が悪い」

バーン！

「待つてください、納得がいきませんわー！」

先ほどの音は机を叩いて立った時の音のようだ

「つるさいセシリ亞・オルゴットー！うせ俺たちがクラス代表が氣に食わなくて……違うか……男が代表になると自分が屈辱とかどうせ思つてんだろ、んで実力の高い自分がなるべきとも思つてんだろ」

まったく……今どきの女子だ

俺は高校はいるまで会ったことがなかつたが今の女子は、E.S.が使えるのは女子＝女の子って偉い……って思考だ

「ええそうですわ、わたくしはこのような島国までE.S.技術の修練に来たのであつてサークスをしてきたのではありません、だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければならないこと自体苦痛であると」

「イギリス、だつて大してお国柄ないだろ、世界一まあい料理で何年
覇者だよ」

「お、一夏も参戦してきたか
口が滑つたみたいな顔してるし

「あ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの？！」

「お前バカだら、先にそつちが馬鹿にしてきたから一夏も怒つたんだろ。それともつこわつと言つた自分の言葉さえも忘れたのか？」

「バーン！」

そのいちこひ机呂ぐのやめてほしいわ～

「決闘ですか！」

「おうー四の五の三つよつわかりやすい」

一夏も勝手に決めるなっての……

ふむ、これはもしや負けたらプライドが…勝つと代表になつてしまふつてところか……わざと負けるか？いやいや、仮にも年上……負けるわけには……とこつかこのまま奴隸になればきっと俺は戦わないですみそうだな

「言つておきますけどわざと負けたりしたら奴隸にしてあげますわ
！」

それは前に一文字つく奴隸ですか？

「そんな事わかつてゐる」

「さあ、そろそろ良いだろ？、勝負は一週間後に第三アリーナで行う。織斑・安部・オルコットの三人はそれぞれ用意しておくように」「えつ？！俺もですか？！一夏たちが勝手に決めた事じゃないですか」

「束との約束を果たすチャンスじゃないか、それにお前の腕についているそれは飾りか？」

「そう言つて千冬さん……千冬先生は俺の両腕についているリストバンドを見てくる

「ん~、でも使つなつて千冬先生が言つたから使つたことないし……でもずっと着けてるつて言つて、つか隠しつけとも言つてしまませんでした？」

このリストバンドは貰いものだ、くれた本人は「はいこれあげる、レイちゃんが本当に変わりたいと思うなら使つといつよ。」こっちの青の方は君のPCの中身にあつたゲームを参考にしてるから特に説明はいらないね、こっちの紫の方は……まあレイちゃんが私に約束したことを守れていたらきっとこの子が教えてくれるよ」と言つていた

「HUV学園は特記事項があるから国・団体が関われないからな、ここでなら多少なら構わない。それにそれは現行あるコアではなくお前のためにあるコアだからな、467のコアが469になつた報告もしなければならんのだ」

ふむ、外でそんなことあつたら「アを持つていかれそうだしな
俺の憧れ、俺を応援をしてあげると言ってくれた人からもうつたも
のだ

渡すわけにはいかなかつたから助かつた

「腕試しと思つてやつてみる」

「わかりました」

ん？今気付いたが教室がざわついてるな

「聞きたいことがあるかもしれないが後で聞け、では授業を始める」

なるほど、「アが増えた～みたいな話ししたから当然の反応か

授業が終わつた休み時間はセシリア・オルコットからの質問攻めが
すゞかつた

「あなたも専用機持ちだといふのですか？！」とか「なぜ二つも？
！」とか……おつと何故二つとかの説明しなかつたな

なんか俺の前でまだ質問を言つてゐる……俺が答える前に質問するなつての

さて……現実逃避するか w

ついでにこのリストバンドの形をした待機状態の I-U をもらつた時の話しひを思い出すか…

そつそあれば、俺が一夏の家に泊まりが決定して親に「平均のお金が……頑張つてこいと」微妙なことを言わねながら応援された次の日だ

朝起きて飯食つてゆつたりしてた時だ ちなみに俺は学校を休んで一夏は自由登校だったから家に居た、千冬さんも今日は休みを取つてくれて家にいた

ピンポーン！

織斑家のインターホンがなり一夏が玄関向かつた時玄関から

「やつほーーちーちゃん、いつくん久しぶりー

かなり注目を浴びるような服装をした女性が無断侵入してきたのだそのあとは一夏と千冬さんの昔からの知り合いで、とか紹介をしてもらい

その女性の名前を聞いて驚いた

「挨拶をしろ束」

「えええ、しょうがないなあ…私が天才の篠ノ之束さんだよ~」

簡単な挨拶だつた

しかしこの人がISを作った人だとわかつたのは驚いた

「君がいつくん意外にISを動かせる子かな？」

「え？ あ、はい、安部零時って言います」

「ふうん、どうして君はエラが使えるんだろうね？だから君の事を少し調べさせてもらたよ」

何がだからなのかさっぱりだ

しかも千冬さんと一夏は俺と篠ノズさんを見比べて驚いている

「君は面白い体质みたいだね、ここまで平均的だなんてすごいね。でも君は小学生の低学年は普通…むしろ成績が良かつた方なのに年齢が上がる」と平均的になつていつたね。なにか理由があるのかい？」

「小学低学年……」

はて…何かあつたかな…

ピンポーン！

む？またお客さんか？この家には良くお客さんが来るようだ
一夏が玄関に向かつて行つた

「今日は多い方だ、おそらく相沢兄ではないのか？」

また読まれただと？！千冬さんは人間なのか？！

すると玄関から

「お～い零時～、荷物持つてきただ～」

よく知る友人の声だ

「せっかくだ、用事がないならば上がるでこ～」

千冬さんがリビングから声をかける

「んじや、おじやましま～す」

やはり来たのは巧でまた自己紹介をした後

「本当に何か心当たりはないの？」

と、先ほどの質問をまたされた

「ん～……ない…ですかねえ」

むしろ覚えてるならこんなことにはなっていないだろう
でもなぜかこう頭に…モヤがかかってハツキリしないが何かあつた
ような気はするが…覚えてないといふことは大したことではない
のだろう

「ん? どうこいつになんだ零時?」

「なんか、巧はいなかつたんだ
そこで聞かれたことを教えると

「…………篠ノ之博士、少し一人でお話ししませんか?」

「イヤだね」

なんと?! 即答だと? 「」のイケメンのタクミンが女性に断られる
とこを俺は初めてみた!

しかし同時に巧の「れほどまでに真剣な顔は初めて見た

「では零時への質問はやめていただきたい」

おこおい、ドスのきいた声出すなよ

「とこうか何故お前が決めるんだよ」

「黙つていろ零時」

「はい」

情けないぞ俺……、「」怖くかったわけじゃないんだから
ね!

「君は何か知つているの?」

「ええ、知つています。零時は覚えてないだけ……そう覚えてないん
だ……」

「じゃあ少し話さつか、外でいいかな?」

「その方が助かります」

そう言つて外へ出て行つてしまつた

「……ちょ！本人の俺に教えてくれたつていいじゃなイカ？！」

「それにしてもあの束がな……昨日話した時から興味はあつたみたいだがな…まさか今日来るとはな」

「だよなあ～あの束さんがなあ～」

「なんだ？その「あの束」って言つには何かの暗号なのか？」

「なんすかそのあの束がつて」

「あれは極端に人見知りでしかも興味を持つた人間にしか相手の事を知りたがつたりしないんだ」

「俺と千冬姉は昔束さんとこの道場に行つてそれで幼馴染なんだ、それで正直言つて俺と千冬姉と束さんの妹意外に束さんが興味を持つた人がいないから驚いてたんだ」

「興味ねえ…………俺のどこに興味を持つ要素があるんだか…」

平均と半分

要するに平凡の極みだ

ISを作れるような天才が興味を持つと思えない

「天才ゆえの興味だらう。それに平均と言うがある意味天才じゃないか、例えばISのコアを作れるのは束だけだ…ということは平均的に見ればISを作れるのは100%と言うことになる、だから束を作り方を教わればお前もコアが作れると私は思う、ゆえに天才と

「いづわけだ」

「それは良いい考えだねちーちゃん、ねえレイちゃん私の助手にならない?」

「レイちゃん……？」

「瞬悠かと思つたが博士が言つたのか……」

「興味を持つてこるのは確定したな」

「何を冷静に分析してるんですか千冬さん?...」

ちなみにこの千冬さんって呼び方は仮にも家で居候として過(?)じて
いくのだから先生と呼ぶのはやめよう的になったのだ
つてそんなことは今は良いんだ!

「じょ…助手?巧…博士に「束さんって呼んで」はか?「束」…
束さんに何を言つたんだ」

「俺は事実を言つただけだ」

「答えになつとらんわ！！」

「それよりもどひつくなつてみない？ ILS 学園は普通に通つてもらつて良いから卒業したら手伝つてよ」

「わからん…」Jの人は何を言つてるんだろうか… 手伝い？ 助手？ 僕にできるとは思えない

「俺にできるとは思えないのでお断りさせてもらいます」

「やうかな？ レイちゃんは一回田中先生に触れても起動しなかつたのに一回田は起動したんだよね？」

「そうだ、俺は巧にいろいろ言われてEVAを起動させたんだ

「人類の半分は動かせるって思つてたら起動したんだよね？」

「ええ、そここの友人に言われ意識したらいつの間にか」

「じゃあそれって一回田のときにも意識してたのかな？」

詳しく述べてないがそんな事考へながら触つてなかつただろうな

「いいえ」

「じゃあ一回田は意識したとたん起動したんだよね？」

「はい、そうですね。誘導尋問みたいにされてたらいつの間にかですね」

「といふことは君の考え方が変わつたら起動したつてことになるよね？」

「まあ……やうなりますかね？」

「じゃあ君が考え方を変えれば平均以上になんでもできるんじゃないかな？」

考え方？そんな簡単なことじやないだろ

第一考え方変えるだけなら

「人の考え方がそんな簡単に変わるなら俺だつて何とかしますよ……」

「そうだね、人の考えを… 意思を変えることは難しいね、でも君はISをたつた数分で考え方をえて動かしたよ」

「それは… きっと初めての事でまだ考えがはつきりしてなかつたら…」

ISを触つたの何てあれが初めてだし

動かそなんて考えたのはあの時ぐらいかもしれん

「ならISの事ならまだ平均じやなくなる可能性があるじやないか。それに君は平均的なを無意識で実行している気がする、それができるのは天才だからこそだと私は思うよ」

平均じゃない……それは長年思い続けてきたことだ
でも真剣に直そうとしたことはない……かもしれない
巧と悠に何度も「直そう」と言われて一度真剣に！真剣に…真剣に
！いろいろとやつたが悲しい結果……変わらなかつたのだ

天才？この俺が？笑える「冗談だ

でも……この人の真剣な顔で言われると嬉しくないわけがない

「もう一度聞くよ、私の助手にならない？」

どうすればいいかわからない……平均的で困つたことはない…
でもE-Sを動かした時点で世間的に見れば俺はもう平均的ではない
のだろう

「物は試しだぞ零時、せつかく天才の博士からの誘いなんだ。俺も
お前は天才だと思う。それにせつかくのチャンスだ、前は失敗した
からつてもう努力しないって理由にはならないだろ」

友人からの後押し

こいつは俺に嘘はつかない 悠関係になると平氣でつくが…

「やつて……見よつかな…、俺…頑張つてみるよ、もう一度頑張つ
てみるよ」

「うんうん…それがいいよ！」

がぱつと俺を抱きしめてくる束をさ

「「は桃源郷ですか？」」お

「悠には報告しここへやる」

すかせす束さんから離れる

……俺の人生はここで終わるようだ

「冗談だ」

もつと感じたかったのに……

「じゃあ私は今日はこれで帰るよ、また明日ね」

誰かが何か言つ前に出て行つてしまつた

「あなんだ安部……大変だと思つがアイツの相手は頼むぞ」

「はは」

もうなんか生返事しかできなかつた

05 (後書き)

テストやばいw

3点wwwww

次回はこのまま
現実逃避のお話の続きですw

朝日が覚めるといつには見知らぬといだつた

「つてわけでもないか」

「口は織斑家、EISを動かしてからお世話になつている家だ
でも一日日だがな

「今日はまたはか……束さんが来るんだつけな

ピンポーン！

「お？ 来たのか？」

現在俺はリビングで布団を借りて寝ている
すなわち俺がきっと一番に反応できるはず
だから玄関に向かおうとすると

「ん？ なんだ起きていたのか、私が出るから顔でも洗つてこい

スース姿の千冬さんに会い

俺は言われた通りに顔を洗いに行つた

そしてリビングに戻ると

「おお零時、お前のノーパソとゲーム類もつてきてやつたぞ

来たのは束さんではなく巧だつたようだ

渡されたボストンバックの中身をみるとアヒルのアヒルのままで
あつた

「お前昨日もそうだったが学校はビリしたんだ」

「やうだな、私も教師として聞きたいな」

「そういうや千冬さんは先生だつた

「昨日は休んだ、ちゃんと連絡もした、今日はちゃんといくぜ、でも
行く前に荷物持つて来たんだ、んじゃ渡したから行くな」

「待て貴様……今気づいたらびりやつて俺の私物を持って来れたんだ」

「んなのお前の母親に言つたからだよ」

「やうか……やましいことせしていないな」

「やうだな……ベットの下の本の内容を全部悠言つたぐらこだな、
意外にマニアックで悠もさすがに驚いていたな」

俺のプライベート返せー！Sを動かす前に戻りたいよー。
くそー！泣けてきちゃうぜー！

「さて、私は仕事に行く。お前もそれから急がないとではないのか
相沢兄」

「おつと、ではまたな零時」

まつたく去り際もイケメンでむかつく…………今度悪意を込めてハンサムと呼んでやうつかな

「私も行つてくわ」

今度は千尋さんの出勤だ

「今日は帰つて来ない、明日の夜には帰つてくる

「昨日も休んでもらつたし、何かすみません」

「お前が気に病むことではない、留守を頼むぞ。」

「わかりました、いつからしゃい千尋わざ」

ああ、と言つて仕事… ILS学園へと向かつて行つた
リビングへ戻つて飲み物を飲んでTVを見ていると

「やつほーレイちゃん…」「ブツー…たば…ねさん……だよ」

しまつたー驚いて飲み物吹き出しちまつた…束さんに向かつて…

「ふああーおはようたばね…わ…ん」

「やつと起きたか一夏

「ふえ～ん、いっく～ん、レイちゃんに穢されたよ～

「いや穢されたって…すみませんでした、でも束さんもいきなり入つてきて脅かすのが悪いんですよ」

「どうあえずシャワー行って来たひびですか束さん?」

「うーーー……そうするよ」

洗面所に向かつて行く束さんを見届けリビングに戻り
巧に届けてもらつた中身を確認する

「俺の趣味をわかつてんなアイツ」

持つて来たゲームは大体アクション
でもアクション＆ホラー系はない
例えばバイオとかバイオとかバイオとか
友達とかに怖くない怖くないって言われるが……怖いもんは怖いん
だよ……
だつて怖いのムリだし……

PCの方はBALDR系そろつてナイスだ
AGE作品もあるしなw

テスト前に佐渡島攻略してテンションあげのつて常識でしょ?
まあそんなのは俺だけかもしれないが……

PS3もちゃんとコントローラー一つあるし一夏と何かやるか

「なあ一夏、PS3あるんだがなんかやらないか?」

「おーーー・マジですか?ーーやりたいです」

「カセットそのバッグに入つてるから好きなの選んで。それとだー
夏、俺たちもう友達だろ?敬語なんてやめてくれよ、それに俺は居

候だし敬語だとなんか話づらくなつまつ」

「ナヒです……そつだな、じやあ好きなの選ばせてもいいな零時」

「おう、その中の大体俺は終わつてるし、一人プレイのでも良こで、見てるだけでも楽しいしな」

「ん~…零時のおすすめってなんだ?..?」

「ナヒだなあ~、俺はロボ系好きだからなあ……アマココアとかどうだ?」

「4でも良いがやつぱ俺はfaかな

オペロさんの声聞くためにわざわざ死んだりしてたし

「あの操作難しいつてやつ?」

「難しいのは最初だけだよ、それにPS2のアマココアの方が難しいつて、だからそのアマココアfaは難しくないつて」

「ならそれにするよ

「そうこうでアマココアを始めた一夏

「へへ、ほんなの考える人がいるんだね」

「束さん、出てきたんですか」

出てきた束さんの髪は濡れていてなんだかい匂いまでしてくる

「ゲームもなかなかなんですよ、試に今度やってみたりやりますか？」

「まあ考えておくよ」

そのあとは勉強だ、もちろんHSのだ
正直束さんは人が変わったように厳しく教えてきた
その反面顔はとてもうれしそうにしているのだからこりで頑張らな
きやいけないと思い必死に覚えていった

時刻は過ぎて夕方

「……俺の頭が……熱暴走する……」

休憩と言われリビングのソファーにダイブする

「お疲れ零時」

そつとつて労わってくれる一夏
しかし彼の目線はＴＶに向いている

「まだアマコアやつてたのか……人が頑張つてたのに……」

「いや～はまつちまつちさて、今ホワイト・グリントのとい

「水没してしまえーはあ～……ちゃんと覚えられてるのかな俺……理
解はできても束さん相手だと自分が平凡すぎて困る……」

「安心しろ、ここからでも聞こえたが意味が分からなかつたからき
つと理解できればできるって」

そんなもんかなあ…、おー水没した

「うわあ『俺一人とかマジかよ、勝てなくね?』

とか言つているがちゃんとミサイルもかわしている一夏

「おお~いレイちゃん始めるよ~」

まだ5分しかたつてないのに…

「が、頑張れ零時」

「……おう」

それからまた勉強

次はIRSの武器に関してだつた
量子変換とかウソちやらカンちやらだつた

夕飯の時間になると一夏が作ってくれたカレーを3人で食べた

「つまーお前料理うまいんだな一夏」

「まあ千冬姉えがいない時自分で作るしね。というか千冬姉えが料理できないから覚えたともいえるね」

「それちーりやんに報告しちゃおつと」

「そんなあ~」

とまあこんな感じで食べた後束さんは帰り

一夏はまたゲームを始め

俺は疲れたからとつと寝た

それからの日々は勉強の日々だった

そして一週間後

「束さんが教えてあげられるのないのへりいかな」

「あつがとうございました」

自分がどのくらい身につけられたかわからんが束さんに教えてもらえて良かったと思つ

「む、束さんが教えたんだから自分で自信を持つよ!」

つて言われても正直無理だわつ
束さん相手じや自信つかないつ

「どれ、私がテストしてやる!」

そう言つて学校から帰つて来た千尋さんが言つ

「うそうそ、それがいいね」

そんな感じで始まつたテスト

「そうだな。HSのコアネットについて説明してみる」

「HSのコアはそれぞれ相互情報交換の自己発達の糧として吸收もしている。これは束さんが情報交換を無制限にして自己発達一環とした……だから今現在も進化し続けているから全容は掴めていない。でしたっけ？」

「あああつている。むしろ優秀な方だ」

やつた！あつてた！しかも千冬さんが褒められた

「次は

といくつか質問された

「ふむ、正解だ。」

「スゲーな零時、俺でも理解できる内容で助かった。お前先生とか向いてるかもしねないな」

そう言って一夏が褒めてくれる

正直言えば嬉しい

「先生か…お前卒業したらHS学園の先生にならないか？」

「先生か…自信ないな…それに

「それって千冬さんが楽したいだけじゃないんですか？」

「ああそうだ、だが悪い話じゃない。EIS学園なら外的介入を原則として許されていない、つまり国家・企業・団体から実験体にならないか?」といふ誘いが来ないわけだ

「うつ……正直言えば実験体なんて御免だでも……俺は世間に出てよつとしても留年する身だ……あまりよくはない……

「今はわかんないです」

「まあ3年間考えることだ。」

「じゃあ次束さんが出しちゃいいかな?」

「はい、どうぞ」

「束さんからのか……どれだけむずかしいのだろう

「レイちゃんはどうなEISが一番強い」と思ひつつ

「はい?問題とこより質問なような・・・

「ん~、EISを乗つ取れるEISとか?あとは物量かなあ……ビットとかじやなくて……NPCみたいに個人んで動くEISとか?まあでもEISは人がいなきや動かないんでしたよね?」

「ふ~ん……ありがとう、束さんほもうこいいかな

「やうか、テストは終わりだ。どうだ自信の方は?」

「それは大丈夫です、自信つきました。むしろ平均じゃないことなんて久しぶりにできて感動しますよ」

「レイちゃんはやればできる子で、自分で自分を平均にしちゃつてるんだよ。前にも言つたけ、これからは考え方を変えて行けばいいんだよ。例えば”平均的にすべてできる”とか”平均以上にできる”って最初はこんな風にしていけばきっとできるわよ」

そうこうつて束さんは笑いながら言つてくれる
その笑顔に一瞬ドキッ！としました

「そう…ですね…俺約束します。きっと平均とか半分とかにどちらわれないようになるつて、束さんの助手として恥をかかないよう頑張つてみます」

「頑張つてね」

そう言つて今日は帰つていった束さん

翌日の朝5時

朝っぱらからパソコンで遊んでいた俺

「レインさんかっこいい……サポートってやつぱーいよなあ」

俺は戦闘ゲームなんかはサポート役が超大好きだ
いろんなゲームしてきたが、とりあえず俺には接近戦とか前線で戦
う系のキャラとかは全然使えなかつた
スナイパーとか壁役に回復役はまあまあとできる方だつた

今やつてゐる“BALDR SKY”的サポートは憧れる

こんなタイプのジョブキャラがあつたら一番に選択してゐる
このゲームのサポートは簡単に言つと敵の視覚やレーダをかく乱さ
せて自分を認識させないとこいろいろだ

「ハッキングとかもあつたよな……」「こんな機能あつたら良
いのに……」

「ふうん……レイちゃんが昨日書つてたエクセルのゲームが元なんだ
ね」

「そうですね、でもサポートはあくまでサポート。前衛が居てこそ
つて…東さん？…いつも間に？…つてか今日は早いですね」

二つの間にか後ろに立てる束ねる

「レイナちゃんはサポートが好きなの？」

「つむなりーの時へりこて来たとこのひの今日せやかにほや二せむで立せやかにほや

「え、えまあ好きですね」

「Jのゲーム貸して」

ヒコイヒと返事をする前のノートパソコンPCを取つ上げる束ねる

「あ、ちよ束ねる」

「う～う田じたう返しこ来るから、それまで勉強せよ休みね」

たたた～と玄関に向かい扉のあける音と閉まる音が聞こえた

「一体何しに来たんだか……いやしかし…これで束さんがあれをも
とにHISを作ってくれれば…キタコレ…」

なんてテンションが上がつてゐる

パン！

おひ～！突然頭に衝撃が来たから振り返ると

「朝からひぐわせこ…ゲフンゲフン

そじはせおこ…ゲフンゲフン

スーツを着た千冬さんが立っていた

「すみません、束さんがさつきこたものですか？」

「束が？ インターホンも鳴りひたす……」

「まあ、まあそれこそ近所迷惑になるから鳴らしなかった……とか？」

「それでもれつきとした不法侵入罪だ」

「ですよね～、むづお出かけになるんですか？」

「スーツ姿つて」とはそただらうが今は5時半前
ちゅうと早いよくな気がする

「仕事が溜まつていてな」

首に手を置いて

疲れている表情をする千冬さん

「…………その…………頑張つてください」

「ああ…………そうだ、お前今日は学校に行つてみたらどうだ？·そろそろマスクハサウエー大丈夫だろう、帰りに親御さんと会つてきてても良いしそのまま帰つて来なくても構わないぞ」

「学校……（やべ、すっかり忘れてた）……帰つて来なくてもいいん

ですか？」

「言ひ方が悪かつたな。家に帰つても良じぞといふ意味だ。もひらりんの家に帰つて来ても構わない」

「親には悪いけどたぶんこの織斑家に帰つてきます、ただ……一泊向ひつで泊まつてきます、束さんも二～三日勉強は無しつて言つてました」

「もう教える」とはない……と呴つていたような気がするが……まあ束には束の考えがあるんだらうな。泊まつてくるのは構わない、親御さんとゆつくり過ごすといい」

「了解しました」

そうして千冬さんが仕事に行き
巧が持つて来た制服に着替え
一夏に事情を話す

「ゲーム類とか置いていくから好きに使つて良じから」

「わかつた、零時が帰つてくる前にアマゾンの虐殺ルート終わらせ
とくよ」

「もひらりんハーデの……だよな?」

「も、もひらりんだ……たぶん」

「あはは、まあ頑張つてくれ、じゃ行つてくる」

「ああ行つていいじゃこー」

男に見送つやれるとこ……へつー。

IJIMA高校

藍越高校の俺のクラス

「よつ零時、今日は来たんだな」

何やり自分の名前が呼ばれたような気がする
が

「ココは無視

「悠に織斑先生と同棲してこると云えておいつ

い、いざればれることだ……」「それだけはやめろ!」となつたところで巧に良じよつと使われそうだ
だからここは

「好きにすれば、俺はやましいことはしていない」

「わかつた……残念だ……悠か?兄だ、今零時は織斑先生の家に同棲していくな……零時が卒業したそつだ……」

携帯で電話をしている相手は悠だらう
いつも気になるのだがいちいち妹に報告をする兄つて……まあ何も言わないでおいつ

しかし

イツタインナーランシギョウウシタノダロウカ?

「ちよー! 巧ー! 言いがかりはよせー!」

巧に掴みかかる! すると

「うわだ

やつて携帯の画面を見せてくる

「ま、待ち受け画面……だましたな!」

「田嶋の行いが悪いんじゃないのか?」

あははは、とクラスメイトから笑いが起きる

「まあこれでみんなも変に意識しないでいるのだろう」

巧はそういった

俺はわからなかつたがきっとクラスのみんなが俺に遠慮みたいなものを感じ取っていたのかもしれない……たぶん

そんなこんなでいつも……E-Sを動かす前の学校生活を過ぎした

そして二日後

「やあレイちゃん」

今日は日曜日です
そしていい天氣です
たぶん

「今何時だと思つてゐんですか束さん……」

まだ外が暗い……時計を見てみると

現時刻……4時！？

「ちよ……はや～」

「いや～ゲーム終わってこの感動のまま来ちゃって束さんトシシヨンあがりまくりだよ～」

その言葉を聞き

ガバッ！布団からつと立ち上がる

「終わったんですね……？」

「うん……終わったよ……」

「ちなみに感想は？」

サムズアップをしながら良い笑顔をしてくる束さん

「ですよねーちなみに束さんは誰押しですか？」

「ノインチロー、って言いたいけどあまりこいつ性格じゃないから

橋 聖良かな」

やつぱり技術者として思つことがあるのだらつか

「ちなみにこの中に入つてゐる物は大体見せてもらつたから

おおおう……中身を見られたつてことですね。Orz
女性に見られるのは抵抗が…

「興味深いものばかりだったよ、マブラウなんかもそうだったね。
レイジちゃんのおかげで世界への考え方たが少し変わったよ」

「そ……そりですか…」

「いつもならプレイしたきたものに対して意見を言ってやっていたりして
ゲームの良さをお互いに語り合いつのだが……どうやら中身を見られたことに
対してダメージがあつてテンションがあがらない…」

「そして東さんはゲームをもとにE-Hentaiを作つてみました」

07（後書き）

いろんなゲーム出でますが登場人物としては出でません

08 (前書き)

テスト期間・・・10単位ほど落としたかな・・・・・

「はー束さん質問ですー。」

「元気よく手をあげる

」
「重複ね

たぶん

「はーレイヤちゃんー。」

ビジッテヒ指を差された

「それせつまじ467円の1つアガ468円になつたところ
とでしあつか?。」

「ううん、違ひな

首を振りて否定する束さん

つてことは盗んだきた!?

つてそれはないか…自分で作れるのに何で盗む必要があるんだか
でもそれならどうして?

「468円じゃなくて469円になつたんだよ。」

「うかうか…一個じゃなくて一つ増えたからか……つて…1つの
事を学んだ今の俺にはわかるー」のたつた一つが国一つを滅ぼすこ
とができるほど忍りしいものだと…
それが一つもーーーいつも増えた?!

ダッシュをして千冬さんの部屋へと突撃する

昨日たまたま帰つて来ていたのはこのためかも知れない！

しかし部屋の主はまだ寝ていた

起きていで着替えていたつてラッシュキースケベがないが今は仕方ない！

「起きてください千冬さん！」

ゆるゆると体を揺らして起こす

「ん～……一体何の騒ぎだ……」

「や、それがですね！」

事情を話し

ガバッと起きてコビングに向かつて行く千冬さんについていく

「やあちーっ、痛い痛い！」

挨拶もろくにアイアンクローをおみまこする

「私はほどほどにして言つたが」

「痛いよちーちゃん！それにレイちゃんが正式に助手になつてくれ
たなら渡そうと思つてたよ～」

ぱっと手を離す千冬さん

「イタタ、もう……初めての助手かもしれないんだから少しくらい
大目に見てくれてもいいじゃないか」

「お前のハシモトになりき……それで、じつすゐんだ零時」

「 もうひと願いをせねば」

即答で返事を返す

「 ううう、じゃあこれあげる、レイちゃんが本当に変わつたいと思つなり使うとこことよ。うちの青の方は君のYUの中身にあつたゲームを参考にしているから特に説明はいらぬ、うちの紫の方は……まあレイちゃんが私に約束したことを持っていたらきっとこの子が教えてくれるよ」

そう言つて

青と紫のリストバンドを渡される

「 ああ後名前は決めてないからレイちゃんが決めてね、じゃあ束さんは忙しいからねで行くね」

「 えつ? ! 助手の事つてどうなつてるんですか? ?

「 私は今からでもやうしたいんだけど……」

セレヒヤ束さんが千冬さんを見る

「 もうYU学園行は決まつてこむ。それに高校は通つておけ」

「 だつて……でもYUで通話できるジビリに西山もレイちゃんは私の助手だよ」

「ひつひつと笑ひ束さん

やばい、かわいい

「じゃ、ぱいぱい」

いろいろ話したかったが行ってしまった… HISの事もっと聞きたかったのに

「束に惚れたか?」

突然聞いてくる千冬さん

「違いますね。憧れ……ですかね」

「やうか……そのHISだが今は使つながら身に着けてもいろ。そして隠してもおけ」

「無茶なこと言いますね?！」

バン!

突然耳に入ってきた音により
イスに座つたまま飛び上がつてしまつた

「驚かせた事には謝罪いたします」

ペコリと頭を下げるセシリア・オルコットが目に入る
妙なところで律儀だな

「ですが！先ほど…いえ、今朝から声をかけているのに無視するの
はどうなのでしょうか…！」

そうだ…俺は現実逃避していたんだ

「すまない、現実逃避していて気付かなかつた」

こっちが悪いのだから俺も頭を下げて謝る

「しかしだオルコット……君がもし逆の立場つたらこの状況でいつ
も通りに過ごせるか？」

何を言つてゐるんだこいつ？みたいな顔された

「考えてみる……ISは男しか使えない…そしてオルコットは女で
唯一ISを動かせた……そしていつの間にか始まる男に囮まれた状
態でいきなり始まる生活……どうだ？これだけでも現実逃避したく
ならないか？」

目を開じて考えていたセシリア・オルコットが目を開ける

「そうですね……まだ慣れていないこちらはつらいかもしません」

「こりゃ全然わかつてないな

「まあいい、とつあえず君をわざと無視していたわけじゃないんだ。
といひで今何時間田だ?」

「これから4時間田が始まるとこりですが……授業中も現実逃避してこらつしゃたのですか?」

「ちょっと驚き　　みたいな感じでいわれる

「まあな。それに俺は1年の授業は去年やつたしな、ISに關してはそこそこ……とか結構できる自信はあるから最初のは聞いてなくても大丈夫なんだよ」

キーンコーンカーンコーン

「また聞けずに終わつてしましましたわ!」

「これ終わつたら次は飯なんだろう?その時でも話してやるぞ」

「絶対ですわよー。」

「隨分仲がいいみたいだな零時

「隣の席から拗ねた感じで言つてへる一夏

「これから3年もあるのに敵を作るよつはましだろう。それにあい

つ悪い奴ってわけじゃなさそうだしな」

「ん~…………まあ そうかもしかれないけど……」

そこで先生が入ってきて授業が始まった

09 (前書き)

お久しぶりです
ではどうぞ

「お皿[皿]飯は鯖味噌[定食]で、お魚[魚]飯は鯖味噌[定食]です」

「鯖味噌[定食]って言つたら、はい、あ～ん、だよねレイちゃん」

「つかなんでお前にいるんだよ悠」

「レイちゃんの居るところ私はいるー。」

「ついに言いながらもなんだかんだでエリ学園に入学したよな」

「うう……それは……でもレイちゃんがエリ学園に来ててくれたから結果オーライだよ！」

「まあ、これたのは束さんのおかげだけだな」

「レイちゃんを誘惑する女は私が許さないー。」

「ほいほい、現在進行形でだが一番俺を誘惑してるのは悠だからね！？早く膝の上からじけー！俺の理性が決壊しそうだー。」

膝に乗ついていた悠を隣のイスにどかす

「ええ～、もう…ちよつとおそれつつあるくじらっこーのこ……」

「ダメダメ、お前どうせいいが女のおだりでいつも焦つてゐるだろ？」

「うん……だつてレイちゃんって小さい子とか年下系が好きだから…」

「いや最近は千冬さんとが束さんみてたら年上もくわなと思つたぞ
「千冬姉は渡さないぞ…」つていつか零時……そりやろ紹介してくれ
よ」

今まで空氣となつていた一夏がシスコン能力で会話に参戦してきた
ちなみに食堂に来たときは4人で来ていた
俺、一夏、篠ノ之さん、オルコットで来ていたのだが食堂の入り口
で悠に会いそのまま合流したのだった

「おおすまん

「いっぽは俺の幼馴染で

」

そこからは5人で改めての自己紹介
簡単にすればこんな感じで

篠ノ之との場合

「やつぱり篠ノ之は束さんの妹なのか？」

「そつ…です…でもあの人と私は関係ない…です」

声はさほど大きくはないがどこか寂しいような悲しいような声で言つ

「無理に敬語使わんでいいよ、一夏と同じように蝶つてくれて良いから

「ああよろしく頼む、それと私のことば篇で構わないよ
俺も悠たちが優秀でよく比べられたことあったよ
よろしくな篠ノ之」

そうこうして手を差し伸べる

「ああよろしく頼む、それと私のことば篇で構わないよ

篇も手を差し伸べて握手をする

オルコットとの場合

「あんな決闘宣言しといって挨拶ってなんか変だな
それに俺と一夏あんなにバカにされてたし」

「あれは少し血が頭に上っていたせいでも…いえなんでもありません
わ」

「やうだな今冷静になつておけっとおこ過ぎたと思つてくれれば
いいや」

「じゃないと一夏とオルコット嬢の試合が盛り上がりないからな」

「あり? あなたも私と試合をするのですよ、それとも逃げるつもり
なのですか?」

挑戦的な顔で言つてくるオルコット

「そんなまさか、この匕首を使こなすため足踏み回してやるつもりだ
オルコット嬢こそ逃げるなよ。」

そつこつて手を差し伸べる

「私は逃げも隠れもしませんわ

それと私のことはセシリアで構いませんわ」

手を握り握手をする

「結果がどうあれ仲良くしてくれると助かる」

「あなたとはそれでもいいのですが……」

一夏のことを見ひらく見て田があつたのかプライドをせざるセシリア

「まあようじく頼む」

俺はその反応に苦笑いしかできなかつた

一夏との場合

「とまじでよくね?..

「だな

セシリアの”私は”わたくしはで読んでもうつと助かります

見つけた！悠！あなたどこに行つてたのよ

自己紹介も終わつたころに悠の名前を呼ぶ上級生リボンの色からして2年生が俺たちが集まつているテーブルのところにやつてきた

「たーちゃんだあ」

名前読んでいたからそuddとは思つていたが悠の友人のようだ

「あら？男の子が2人も……噂の男の子ね……悠が好きな方はどちらかな？」

なかなか……いやかなり美人だなおい！

「レイちゃん？」

「田がこわいよ悠さん！」

その笑顔は微笑みなんだよね？！…そudなんだよね？！

「ヒツーおおおおお怒んなよ！つか心を読むな！」

「読んでないもん！読まなくつたつて顔がデレデレだからわかるもん！」

そんな顔した覚えはないのだが
そう思い顔を触つてみると頬が上がつているのがわかる

「こやけでるな……すまん」

「何にて謝つてるかわからぬけど、わかれよりじこ」

そんなやり取りを見て悠の友人がクスクスと笑つている

「話に聞いていた通り仲がいいね

じゃあ君が安部零時君かな?

わたしは生徒会長の 更識 楯無 悠とはクラスメイトでルームメイドもあるの」

「やうか…いつも悠が世話になつてゐるな、これからも悠と仲良くしてやつてくれ

「もちろん言われなくたつてそつするわ

なんせ生徒会長の私を唯一まともに相手できる相手なのだから」ひからお願いしたいぐらによ

生徒会長の相手つてそんなに大変なのか?

「うんうんー、そうだよー、なんせEHS学園の生徒会長は”生徒会長、即ち全ての生徒の長たる存在は最強であれ”って言葉があるぐらいいんだから

さすがは相沢は家系……最強が相手でもやつていけんのかよ
少しうらやましいなその才能……俺も少しは何かいいところがあればいいんだがな……

「レイちゃん……」

「うと…今は忘れる…それにお前たちが優秀なのは俺もうれしいんだから気にするな
嫉妬はするがな」

精一杯の笑顔でそう答えると

「うん！」

“キツー

正直今の笑顔は反則だ…笑顔なんて何回も見てきたがこの一年会つていなかつたせいかものすゞくこの笑顔にくらつときた

この笑顔ならずつと見ていたいぐらいだ…むしろオレだけの

「あの…えつと…レイちゃん…恥ずかしいな…」

「……当分覗くのは禁止だ」

「うん…やつある…私が持たなそつ…」

俺が考えたことにこんなにも反応するのは…まあ今でなくていいかきつと黒いウサギが来たときにでも話すことにしてよう

「うと、もうそろそろ授業よ終
挨拶はまた今度ゆっくりね

行くわよ終、あなたしか私の相手ができないのだからじつかりして
頂戴」

「うん、じゃあまた放課後にねみんな」

「また会こましょうね零時君と一夏君」

手を振つてそのまま食堂から去つていく悠と更識

「ああ～なんかすまんなうるさくて、食事中だつたし俺と悠がうるさかつたおかげでみんなあんまり喋れなかつたし、歳が違うからつて遠慮しないでくれよな、じゃなきや俺3年間やつてげそうにないし」

「俺は家で一緒に暮らしたから遠慮なんてしてないぞ、むしろ兄貴ができたみたいで嬉しいし
いやでも面白い人だな悠さんって、巧の妹なんだっけ？」

一夏の家で俺たちは遊びまくつたせいかみんな下の名前で呼び合つほどに仲になつていた

ちなみに一夏の親友の五反田 弾とも友達になり同じく名前で呼び合つほどに仲良くなつた
ただ俺だけはなぜか「零兄」^{れいにい}って呼ばれている

「せうだな、あの2人は双子の兄妹だな」

「確か幼馴染もあるんだっけ？」

「そうだな、いつ初めて会つたのか忘れるくらい前にあつたな今は黒髪だが実はあの2人初めて会つたときは銀髪だったんだぜ」

3人の驚く顔をちょい見たとき

キーンコーンカーンコーン

「おつと、悠達が授業に向かった時点で俺たちも戻ればよかつたな
俺たちも戻ろう」

放課後

「悪いなー 夏付き合わせて」

今教室にいるのは俺と一夏だけ
まあ廊下には俺らを見ようつときた人がいるのだが…え? 人数? 聞か
ないでくれ

「気にすんなよ、それにすぐに話が終わるなら一緒に帰れるだろ?」

俺たちはまだ寮ではなく家から通学

実家もそんなに離れているわけではないしせつかくの男2人だし一緒に帰ろうとしているんだろ?

「EISのことも零時に教えてもらいつただけあって授業もしないでくないしよかつたぜ」

「EISは復習がてら俺が教えてやるからこことして、EISのこと以外は自分で何とかしろよな」

「マジかよ」

そんな雑談をしながら放課後に来るといつてまだ来ていらない悠のことを待つていると

「よかつた、2人ともまだ残ってくれてたんですね」

教室に残っている2人とは俺たちのこと
そして俺たちのことを呼んだのは

「あれ? 山田先生? ビリしたんですか?」

「やまだまや、逆から読んでもやまだまや先生ではないですか」

と俺が冗談をまじへると

バーン!

「馬鹿者、田上の者には敬意を払え」

出席簿アタックをしてきたのはもちろん千冬先生

「ちよっとしたコノヨニケーションなの?」 ボソ

バーン!

「何かいつたか?」

「いえなにも

それで何の用事で俺たちに?」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そういうて山田先生が2つのカギと部屋番号が書かれた紙を寄越す

「1026室ですか、でも寮使えるなんて聞いてないよ!」

「自分たちの状況を考えてみろ一夏、また千冬さん助けてもらいたいのかお前は」

難しい顔をしながら考えてから

「ううか…男でどう動かせるんだもんな
でも荷物とか何にもないような…」

「私が手配しておいた

着替えと携帯電話の充電器さえあれば問題ないだろ？

「うわ、潤いの字もないぜ

「俺のはどうなったんですか？」

「お前のは相沢兄に頼んでおいた」

巧つて千冬さんの呪使いみたいだな……後でお礼言つておいつ

「夕食は6時から7時です、大浴場がありますが織斑君と阿部君各
部屋のシャワーを使ってもらいますね」

「えつ……なんで大浴場使えないんですか！？」

「お前堂々と女子の裸みたいのか？」

ガラガラ

「あれ？山田先生と千冬先生もいる。ああ寮の」と話してゐるんだね」「めんねレイちゃん実は、お兄から連絡あつてレイちゃんの荷物持つてきたから校門まで取りに来てくれって言われて取りに行つて遅くなつたの」

危なかつた・・・・・やつとやつときの「えつ！－！なんで大浴場使えないんですか！？」の一夏の言葉に「そうだそだ！なんでだ」「みたいに答へてたら

バーン！

「ちょ！－なんで俺だけ呪くんですか千冬先生－」

「お前はねわざとやつてこるからだ、それと今の発言は相沢妹に伝えておく」

「許してください、『めんなさい』もつ2度と言こません」

土下座までして謝る俺

悲しいな俺

「もう聞こひやつたから意味はないけどね」

教室の扉の前で立っている悠

「…？ よ、よう終、お、遅かったな」

「お兄から連絡あつてレイちゃんの荷物持つてきたから校門まで取りに来てくれって言われて遅くなつたの」

「や、そつかありがとうな」

「それよりレイちゃん……レイちゃんは大浴場に入りたいのかな？ それとも……女の子の裸がみたいのかな？」

つてきつとなつていたに違いない

「レイちゃん？ 私そこまでレイちゃんの行動を縛んないよ～ どうしても見たいなら私なりいつでも見せてあげるよ～

体をクネクネさせながら言つ
はたから見るとかなりの変人だな

話がいきなり変わつてこるせいか一夏と山田先生は頭にまではなマーケを浮かべている

「山田君、会議の時間だ」

「わっそんな時間ですか？！先生たちはもう行きますね
ちゃんと寮に帰るんですよ、道草くつちやだめですよ」

やつこつて千冬先生と山田先生は教室から去つて行った

「道草もなにも校舎からうのぼりこなのひづ道草くえぱーいの
や」

苦笑いをしながらひづ近づいてくる

「はーいレイちゃん手だして」

そつ言われて言われた通りに手を出すると
いきなり俺の前に黒いバックが現れる

「うをー！」

「それ荷物ね」

「な、なんだ今の？！俺の目がおかしくなったのか零時？！いきなり荷物が出てきたぞ？！」

「安心しろ一夏俺もだ」

慌ててるのが近くにいると冷静でいられるな

「ふふ、驚いた？私専用機持ちだから量子変換して拡張領域に入れ
ておいたの」

12 (前書き)

話が進まない…

説明不足とか話飛んだりしててでも無理やりシャルとリカが出す
といじめでは少し早めにいづかなる…………

夜

1026室

「災難だつたな一夏」

俺のベットは入つて手前の方

そして奥にあるベットには灰になつてゐる一夏がいる

「あがあ～」

そしてこの灰になつたのはお隣の1025室の住人にやられて帰つてきた

「災難つていうより自業自得じやない？あとで篠ちゃんに謝つときなよ」

「まあ引っ越しじやないんだから隣に挨拶に行く必要もなかつたし返事がなかつたからつて中に入つた一夏も悪いな

そして悠よ……荷物の整理を手伝つてくれたのは嬉しいがいつまでここにいる気なんだ？」

荷物を取つてきてくれただけではなく整理まで手伝つてくれたのはうれしい

俺は家事全般は母さんと悠に頼つてばかりだつたから全然できないので助かるのだが……お前は俺の母親か！？と言いたく

はなる

ちなみに巧からぬ秘蔵品は鞄を開けて真っ先に見つけられ一発処分であった

「レイちゃんって体小さい子の多いよね……口コ?」と言われたが
断じて違つ

「ヒツキツ専用機について聞きたいのかなって思つたからいたのに。
・
・
・
・

とつあえず噂のことについて今後どうするか聞いたり今日は帰るよ

今日もってこと強調して言わんでもこいつての

「噂? ってなんだ?」

「なんかイギリス代表候補生と決闘するらしくってホントなの?」

もつ2年まで噂が……と言うか唯一2人の男のことなのだから当たり前と言えば当たり前なのか?

「まあ事実だ、脣にいた金髪だ。それで今後のことをなんだ?」

「それ本気で言つてるの?」

ほりーー夏も聞きなさいーー」

まだだらつーんとしてこるがベットから起き上がる

「HSの起動時間なんて200時間越えしているであらう相手なん
だよ?」

よほど勝ちにこだわってないか油断してるかじゃないと絶対勝てない相手なんだよ？

それなのにレイちゃんと一夏は10時間も起動していない素人もいいとこの人間、私ならそんな状態で私に挑んでくるならISに乗りたくないくらい容赦なしで相手するね」

相手が悠然とよかつたと心底思つた

「でも対戦する前に努力してきたとわかるくらいのことをしてきたなら私なら相手に失礼の内容に本気で相手をするね」

さつきの容赦なしと本気がどう違うのが理解できない

「前者は相手にするのためめんどくさいから早く終わるようになしで相手をする

後者は勝つても負けても相手と試合できたことを誇りに持てるような試合をできるように本気を出すつてこと」

「わかつたよ……まあ話を続けてくれ」

真剣だ顔で訴えてくる

「そんなの最初からそのつもりだ、なあ一夏」

「おう、あんだけバカにされたんだ
負けてたまるかよ」

やの気満々の一夏

「と、いつもだ

それで相沢先輩……そんなことを聞いて出したんだ
何か提案があるんだろう？」

「やめてよ先輩だなんて

あるけど……とりあえず私に任せてくれる？

「俺は構わない、一夏はひつする？」

「俺も構わないよ」

「じゃあ明日の放課後また教室で待っててよ」

12 (後書き)

進まね
／＼＼＼
W W W W

翌日の放課後

今ここに集合しているのは4人
俺、一夏、筈、悠

「へへ一夏には専用機がくるんだ」

「実験体って言われていい気分はしないけどね
そういうや悠は専用機あるんだよな?つてこいつひとせどこの代表候
補生とか企業に所属してるのか?」

「せうだよ~、お姉さんは企業様所属ですよ~、倉持技研つてどこ
なんだけど知つてる?」

「ああ、なんか俺もその倉持技研つてとこだつて言つてたよつな

「えつ?...それホント?...」

そつこつて俺と筈にも田線で本当にへつたえてくれ

「ああホントだぞ」

「私も聞いた」

それを聞いて腕を組み何やら考えている様子

「何か問題があるのか?」

「ん？ 実はたーちゃんの妹が倉持で専用機作つてもうつていいのはずなんだけど……確かまだ完成してなかつたよつな……」

「なるほど……世界的に見て男が乗るEISの“データの方が重要だからな……だから一夏のEISの方が先にできるかもな。むしろ更識の妹には悪いが一夏がいる限り完成しない可能性もあるな」

「マジか……罪悪感出てきたんだが……」

ガッククシとつなだれ始める一夏
まあ更識妹の心境がわからんでもない
俺も一夏がEISに乗ることがなかつたならば検査なんかなかつたはずだからな

「試合が終わつた後にでも会いに行つてみれば？」

「そうあるよ」

「とつあえず今は気にしないこと、だつて練習機よりも専用機の方が絶対性能がいいはずだもの
さて……今日は2人の現在の実力を測ります
そこで籌ちゃん、一夏のことを頼めるかな？」

「わ、私が？ しかし何をすればいいのだ？」

「ん~籌ちゃん剣道できるんだ、じゃあその剣道で一夏を鍛えてあげなよ」

「それならば私でもできる」

腕を組みながら

私できちやいますーみたいな顔で囁ひつ箒

どや顔だなw

「剣道つてE-Sに関係あるのか？」

対して一夏は？マーク

この2人面白いな

見てて飽きない

「だつて一夏専用機ないんだもん

せっかく専用機来るのに訓練機で変な癖つけたくないでしょ？」

「まあ確かに……」

「じゃあ篠ちやん、一夏連れて行つちやつてこいや

「わかつた、行くぞ一夏ー！」

「え？ あ、おい篠？！ 零時ははどうするんだよ？！

「レイちゃんは整備課の方へ行くんだ
だから今日は別行動だよ」

「早くしろ一夏、おいていくぞ」

「待てよ篠いー」

先に行つてしまつた篠を慌てて追いかける一夏

やる気満々でビビビん先に行ってしまった

「やっぱあの2人おもろこな」というかおもこ一夏が

「そうだね、お兄とは違ったタイプだからね
じゃあ整備課に行こうか」

「何するんだ………」とこれは行けばわかるか

「ではレッスン」

整備室

「自分のところの」とまつたくわかつてないのはどうかと迷ひよ
じやあひ出しへれるかな、動かすのはどんなのか調べてからだ
からね」

素直に手を悠に差し出す

「ホントに2つなんだ……」

「ん? 巧から聞いてたのか?」

前にも思つたがいちいち妹に報告する兄つて……いや専門のせや
めておいつ

「まあね……まあいいや

ちやつちやと調べあひつか、まづは蒼にこつの方からね

何か思つとこがあったのか一瞬難しい顔をした

蒼い方を「コードにつなぐところつかのディスプレイが出てく

「お前」の機械の使い方わかるのか?」

蒼い方につなげたコードの先にある大きな機械のことを指さして囁く

「私専用機持ちだよ? できるこ決まつてないじゃん……ほこつとな

いくつもあつたディスプレイが一つになり
その一つのディスプレイには

ZONAME 搭載武器なし シールドエネルギー 450

スペックは的には一世代

ぱっと見た感じでこんな感じ

ふむふむ

「つーおーー武器なしつて何ぞそれ?! スペックなんて三世代でも
ないし?... つづき三世代のぐれたかと思つたよ俺?! なんでだよ
束さん!」

頭抱えてノーーー! ってなつてもいいんだよな?!

ノーーー!

「うよつと落ち着いてよレイちゃん!」

落ち着くまで少々お待ちください

「落ち着いた?」

「落ち着きました」

「よろしく。別にこれでも問題ないんだよレイちゃん、せっかくの自分の相棒なんだからそういうこと言つたやかわいそつだよ。名前さえあげてないのはどうかと思つけどね」「なべど」

ジト田で見てくる

そんな田で見るなつての

「ちやんといひの蒼この名前は考えてあるの」

「じゃあ今設定しちゃおつか
ちやんと紫の方も考えてあげなよ、もうひとつから一か円半もたつて
るんだからね」

「わかつてゐる……

とりあえず蒼い方の名前は”アイギスガード”」

「レイちやんホントにレインさん好きだね……」

ジト田が引いてる田にレベルアップした

そんな田で見ないで！新しい世界が見えちやう！」

「ほじつとな」

あつところ間に設定が終わりまたこいつもの「タイププレイ」が出でへる

「なあやつを言つてたコレで問題ないってどういふことなんだ？」

「」の子異常に拡張領域があるみたいだから武器なくても量子変換すれば後付武装が使えるから現時点で武装がなくても問題ないってこと

「要はプレステのメモリーカードの容量はいっぱい余ってるけど今は何にも入ってないってことか？」

「そりなんだかど……そりなんだかどもつとなんか例えあつたでしょ」「ない」即答……レイちゃんをこんな風にしたお兄とは少し戸惑が必要だね

しーひないっと

「やつぱりここ先に来ておいてよかつたね
とりあえず何入れてみるって言つても訓練機に使つのしか今はないんだけどね」

そうこうして一番手前に武器一覧のディスプレイを見せてくる

「とりあえず剣、銃、盾が無難じゃないか？」

「解つと」

カタカタとキー ボードを叩く
結構速いな
なんてことを思つてみると

ERROR!

ニアの存在を確認できません

「「はい?」」

2人して首をかしげてしまった

「今何したんだ?」

「何つて、普通に武器を入れようとしただけだよ」

もつ一度チャレンジしようとしているのかさつき見た一覧からまた武器を入れようとしている

ビー！

ERROR!

ニアの存在を確認できません

「・・・・・・」

ブチッ！

あつ、今なんか切れた

「大丈「ちょっと黙つてて……」：ハイ」

しばらくお待ちください

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタ

「何よこのじゃじゃ馬！こんなわけわかんないのにレイちゃん乗せ
ないんだからね！」

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタ

キー ボード 壊れちゃう！

お待ち

よつやくガタガタとなり続けていた音が止まった
何分たつたのだろうか……20分か……長く長く感じたぜ

「なあ、どうなつたんだよ悠」

「私は今ものす」驚いています」

「いやそつは見えないからな」

至つていつもと変わらない顔だ

「私だけではどうにもできそうもないから千冬先生を呼んできます」

ガタツーと座っていたイスから立ち上がると

「レイちゃんは待つていいからね」

シユタツーと手をあげて扉に向かって

全力疾走

「ちよつとくらい俺に説明していつたつていいじゃなイカ?...」

チート回

悠が千冬先生を読んでからはあ～だ～だ推測しながら話していくが

「結局は東さんに聞いた方がよくな?」

(ちなみに俺は、まぶかれてた
俺のところに…)

とまあ自分ではじめしゃべり発言したと想つていて頭をはたかれた
悠まで呴いてきた

ぐれてやる

そんなこんなで今日は誰も使わないといつアリーナへと移動してきた

「 もう、博士に連絡できるなら最初からやつした方が早いに決まつてゐじやん」

「 悪かつたつて」

「 あまり時間がない、HISを展開しろ」

「 うひや」

目を閉じて頭の中でアイギスガードのことを考へる

「 来いー！アイギスガードー！」

ふむ、何とか展開できたみたいだな
つか変身！－みたいでかつこよ w

首から下はもう本物のアイギスガードだな w

「 やつちょっと早く展開できるようになるといいんだがどな～」

「 熟練した者なら一秒で展開できるんだが」

俺の余韻がパーだな

つか今俺5～6秒かかつてたな・・・・・・道のりは長いみたいだな・・・

「あれ？ そりいえばなんでアリーナ来てＩＳ展開しなきゃいけなかつたんだ？」

「「はあ」

美人2人からの溜息！ 目覚めました！ 新しい世界ですね！

「そのＩＳをもらった際束が「ＩＳで通話できるしどこに居ても」みたいなことを言っていたのを覚えてないのか？」

「そんなことを言つていたよ／＼ないよな……とりあえず通話すればいいんですね？」

ＩＳに入っていた束と「アイコンを選択して通信をつなげる

『やつと起動してくれたんだね。きっと私に聞きたいことがあると思つてたから待つてたんだよ』

突然ハイテンションの束さんの声が聞こえる

「どうも束さん、お久しぶりですね。それでこのＩＳについて教え

てくれるんですか?」

『「うんうん、もちろんんだよ~』

「おい安部、通信をオープンにして私たちにも聞こえるようにしろ
オープンですねオープン…………コレか?
これでどうだ?

オープンにするボタンかと思ったが俺の目の前にディスプレイが出てきてその画像に東さんが映る

『およ? ちーちゃんだ! ヤッホー』

『テレビ電話みたいなのか

ISの知識麵は教えてもらつたが使い方は教わらなかつたからなあ~

『そつちの子が相沢巧の妹だね』

「初めてまして篠ノ之博士。兄から話は聞いてます」

『やう』

なぜやら千冬さんがびっくりしている
まあそうだよな東さんって身内以外に興味ないってことなのに悠と
初対面なのに話してんだもんな

『アイギスガードかあ、レイちゃんならそいつが付けてくれると思つたよ

アイギスともう一つのヒヒにつけられて知りたかったんだよね?』

「やうだ、このヒヒはなんだ

武装がないのではなく使えないのではないか

千冬先生が厳しめの口調と態度で言った
つか武装使えないの? ! 拡張領域はあるんだから使えるんじゃないの? !

『アイギスはね

ISを取り込んでISを駆除するんだよ』

「なーなんだつてーーー!」

「「「つるわこ黙つてて(ひ)」」

ハイ すみません

「続け」

『あんまりレイちゃんをいじめないでね』

「束ー」

『わかつたよ~』

千冬さんに怒られてショコとなつた束さん激萌え!

ギロツ

悠に睨まれた

零時は動けなくなつた

『あとね～アイギスはスペックこそ一世代じゃないけど能力的に必要なからそのスペックであつて世代的には四世代なんだよ』

今各国で三世代を作つてんのにもう四世代のHSを作つてんのか？
…俺この人の助手なんかできんのか？

「必要がない……とはどうこいつ」とだ

『アイギスは取り込んで召喚できても動かすことはできないんだよ、
…できないんじゃなくて
手におえないから…かなやつぱり人1人に1つのHSが精一杯なん
だよ、たとえちーちゃんでもね
でもHSに動かすシステムを入れれば本当は動かすことはできたん
だけど、動かすことじやなくて唯一仕様の特殊才能を入れるために
そうしなかつたの』

「ワンオフ・アビリティー…………でもそれじゃあ取り込んだ
意味がないんじゃないですか？」

『別に動かす役割はアイギスじゃなくたつていいんだよ
アイギスはHSを武器として認識しているから所有者が使用許可を
すれば違う人が使える用にすれば違うHSにだつて使えるんだよ』

「そうか…それで2つのHSをくれたんだ……

アイギスにはIISを取り込む力があつて紫はその取り込んだIISを動かすことができるってことですね?」

『『ピンポンピンポン!』正解だよレイちゃん
紫の子はAIがあつて人間と違つていくつものIISを動かせるよう^に作つてあるの、だから搭乗者がいないIISも動かせるようにできてるってわけなのですよ』

要するに

アイギスで召喚したのはアイギスで動かせないが紫の子にあるAIならば動かせるってわけか

「しかし」の力は公にしていいものではないな

え? だつてこの2つのIISがあれば一騎当十みたいなどだつてできるのに?

「どうやって取り込むかわからないけど、これつてある意味IISが盗み放題つてことだよ

もし戦闘中に取り込めたら最強……最凶だね」

『取り込み方はコアそのものに触れれば取りめるよ

で、唯一仕様の特殊才能は電子戦特化能力だよ

アイギスはこっちの特化能力の方がメインかな、だからスペックは二世代になつたんだけどね……能力は名前の通りでジャミングとかハッキングとかできちゃつよ、もちろんIISでもじやなくて也能るよ』

「化物IISだな……」

確かに十々さんの言つとおりこれは……ちょっと危険だ
つかスペックは必要ないって言つつかそのぐらいにしかできなかつた
んじやないのかな・・・・・

『ちなんに紫の子にもヒリの機体と唯一仕様の特殊才能があるから
ね。

それとそれと初回起動はいつになるか束さんにもわからぬいから
じやあ束さん忙しいからそろそろ切るね、ちゃんと紫の子にも名前
つけてあげてね～バイバイ～イ』

ヒリで束さんとの通信は切れた

「零時……そのヒリの取り込む能力はよほどのことがない限り使つ
な……言つてる意味はわかるな?」

まるで家にいるときの一夏に対する態度で忠告していく十々さん

「わかつてます、それとアイギスの唯一仕様の特殊才能も必要なと
き以外使わないようになります」

「せうじてくれ

15（後書き）

スーパー・ウルトラチートきた
wwwww

昨日あのあとはすぐに解散

部屋に帰るとボロボロになつていた一夏がベットにいた
俺も精神的に疲れていたせいか夕飯も喰わずに寝てしまった

放課後 アリーナ

「結局一夏は篠ちゃんに一週間扱かれそうだね」

「更識妹のところに行つてからだそうだがな
それに一夏はまだ専用機来てないしそうなるんじゃないか?
それよりもだ悠・・・・・なんでここに更識姉までいるんだ?」

俺の田線の先には水色の髪をした工芸学園の最強の称号を持つている更識 樋無がいた

「そんなどじっと見られちゃるとお姉さん恥ずかしいな
それと樋無って呼んでくれるとうれしいな^」

手に持つていた扇子を広げるとそこには 羞恥 と書いてあった
そういう樋無って女の子っぽくないよな

「了解、楯無つて呼ばせてもう一つ
それで悠、どうしてだ？」

別にいて困るわけじゃないが昨日の話からして最初の方はなれるまで話しやすい悠と2人がよかつたんだがな

「2人きりがいいだなんて……いつたい何する気だつたんだか……
……じゃなくて昨日実は部屋に帰つた後レイちゃんと特訓する
んだつて話したらたーちゃんも一緒に混ざりたつて言つたから
いじょつて言つたの」

「学園最強に教えてもらひえるなら俺は構わないぞ」

「1位と2位に教えてもらひえるんだから贅沢言えないのでしょ」

1位は更識 2位は？

「私だよレイちゃん」

笑顔で言つてくる幼馴染

「俺の幼馴染はついに世界を相手にできそつなくらい強くなつてい
ました」

「そんなに強くないつてば～
もう、時間ないから始めるよ」

そういうつて悠の体が光つたと思つたら一秒も経たずに工Sを開いていた

「ちきしょー！」

自分と更識が工Sを開いた後

「悠の工Sって打鉄なのか？なんか微妙に違うが…」

見た感じそんな感じなのだが違つよつな…

「もとは打鉄なんだけど」の子は打鉄・改つてこうの、企業のだから好きに名前変更できなーのがくやしこなー」

「私は好きだよ打鉄・改」

「私だつて嫌いなわけじゃないもん、ただこの子は一年前とはだいぶ形も仕様も変わつたから今にふさわしい名前があるだろひになつて思つただけだよ」

さすがはルームメイト同士なだけあつて仲がよきやつだ

「一年でそんなんにエリツつて変わるもんなのか?..」

「悠は特別だね、最初は打鉄のスペックをあげた改修機だつたのだけど悠の能力についていけなくて一回壊れてるのよ、その時に悠専用にさらに改造して悠好みになつたつてわけ」

「今では武器だけをえるんじやなくて装甲も量子変換して後付武装として臨機応変にえれるようにしたつてわけなんだ試しに見ててよ」

悠の手元が光り刀のようなものが出てくる
それを両手で持ちかまえている

「よく見てた方がいいわよ」

櫛無にそつ言われもつと注意深く見る

動きだした！

最初は剣道の胴のような動きをしたかと思うと手にあるのは刀ではなくバズーカ、そして悠のI.Sが装甲でもっと大きくなっていたバズーカを撃つたと思ったら今度はほとんどの装甲がなくなり代わりにスラスターのようなものが出てきたかと思うと撃つたバズーカの弾を追いかけ正面に立った

今度はまた重装甲になり盾を構える、盾に弾が当たり悠の周りに煙が立ち込める

「お、おいあれ大丈夫なのか？！」

心配になつて楯無に聞いてみる

「本人に聞いてみればいいんじゃないかな？」

本人つて……あの煙の中だろ？

…………確かめに行こう

「大丈夫だよレイちゃん」

「うわっ！」

突然後ろから声が聞こえるから後ろを向くとそこには煙の中にいるはずであろう悠がいた

「実はあれ盾で受けたんじゃなくてレイちゃんの死角になってる盾の影から当たる寸前でサブマシンガンで撃ち落として煙ができたときにこれまた死角になつてるとこから瞬間加速つていう技で煙から出てレイちゃんの後ろに回ってきたってわけだよ」

驚いた……今の一瞬でいろんなことが起きすぎていて驚いたとしか今は思えない……

きっとこれがEVAに慣れてきたころに悠の今の行動がすごいことがわかるんだろうな……

「ふふ、だから私よく見てた方がいいわよって言つたのに」

心底楽しそうな顔で言つてくる楯無
2位の悠より強いという楯無……この2人に教われるつてだけでも実はすごいのでは？

1026室IとIII室

そこにはボロボロになつた一夏と俺がいた

一 夏は簫によつてボロボロだが俺は……

「まじまじ避けて避けて～」

空中からとあととあらゆる弾を撃つてくる敵

「ダメダメ～、避けるときは三次元躍動旋回しながら撃つてきてる人を正面に捉えながらだよ～」

地べたを這うように避けているではなく逃げている
その俺にランスを持った樋無が追い打ちをしてくる

「これは避ける訓練で逃げる訓練じゃないんだよ

「できるかつてのー」

ちなみにもう一つは決闘までずっと行われた

そして決闘当日

「どうまい一夏、まだHS来てないとかウケるな」

「おかげで剣道づくしだったよ……そしてHSのHSとはばふつつけ本番だよ」

不満げに言つ一夏

「仕方ないだらう、知識については零時から教わっていたのだから」

「よつとすねで、いつよつと申し訳なさやつて言ひて算

「HISがあつてもそこそこしか上達しなかつた子もいるけどね」

明らかに俺を見ていつ楯無
なぜお前までいる
まあ美人だから許す

「レイちゃんだって頑張つてきたんだから良こんだよ

最後にやさしく慰めてくれる悠
しかしだな……

「結局武器なしでどう戦えと？」

俺の質問に悠と楯無が田をそらす

そんな時

「織斑くん、織斑くん、織斑くん！」

と胸を大きくゆく

ギュッ！

「鼻の下伸びてるよ」

と腕を絡ましてくる悠
こちらも中の弾力で・・・・・

「来ましたー織斑くんの専用IS」

「織斑はすぐにフォーマットとファイティングをしろ

阿部は出撃準備だ」

千冬さんの命令に従い準備をする

ちなみに俺は特訓の時にフォーマットとファイティングは終わらせ

てある
準備が終わりビット・ゲートに立ち、ビットに残るメンバーを見て
「負けてくるー。」

「「「「えつー」「」「」

後ろから何か聞こえて無視して発進する

まあ結論は

負けたよ

武器なしで戦えと?

例の電子戦しようと思つたら動きながらじゅりまくこかず止まると
相手が待つてくれるはずもなく撃墜

傍から見たら自分が止まって弾をへりつたよつて見えただらつ

そして一夏はバリアー無効化攻撃というもろ刃の剣で勝てる寸前で自滅して負けた

俺ら男2人そろって負けて終わったのであった

17(後書き)

今回端折りに端折つた

クラス代表は結局セシリアが辞退し
セシリアを追い詰めた方は一夏だつたためクラス代表は一夏に決ま
つた

授業中

「これよりEISの基本飛行操縦を実践してもらひ。織斑、安部、オ
ルコットは試しに飛んでみせう」

いち早く飛んで行つたのはセシリア

次に俺、一夏の順でセシリアを追いかけるように飛び立つ

「遅いぞ織斑！スペック上は白哉が一番上だぞー！」

俺よりも遅い一夏が千冬さんに怒られている

「ふ、一夏怒られてやんの」

「ひむせーー零時だつてセシリアに追いつけないじゃないかー！」

「俺のはこれが限界なんだよ…なめんな第1世代スペック…」

無駄にあーだこーだしながらセシリアのもとにつくづく

「ふふつ、お2人とも仲がよろしいのですね」

そうそう。あの決闘以降セシリアが一夏に惚れだした
一夏は恋愛原子核の力絶対持つてるな、うん

「まあここに来てから仲じやないからな」

「2人だけの男だし、女子にはわからない話もあるのだよオルコッ
ト嬢
特に一夏の性癖とかな」

「何言つてんだよ！そんな話しましたことないだろ…」

「”まだ”な！弾とは良くしたがお前とはまだだもんな、今日部屋
戻つたらするか」

なんて話してると

『一夏つ…つまでそんなどこにいる…』

山田先生から奪つたインカムで篠が叫んでいる

山田先生かわいそうだな……

「次は急降下と完全停止をやつてみる、目標は地表10センチだ」

今度は急降下か…………

「では、お2人ともお先に失礼しますね」

セシリアが先行して手本代わりに急降下と目標を成功させた

「んじゃ俺先に行くぞ、ではお先に失礼お姉ちゃん大好きな一夏君」

からかつてから急降下を始めると

「なんだとー零時は悠の好意を受け止めないへタレじゃないか！」

「あんだとー！」

聞き捨てならないと、振り返ると

「ちよーお前なんで「うわー上まるなよ零時ーぐへつー」ぐはつ！」

！』

振り返ったところに急降下した一夏にぶつかり、アイギスとでっぱりで引っかかるて落ちていく、もとい墜落していく
しかも何とかしようとする2人でエスで抗うものだから離れるどころか
加速して墜落していく

「「「うわー」仕方ない！アイギス解除！」

展開を解除してアイギスが消えたことにより引っかかっていたのが
外れ、一夏を足蹴りして離れる

「アイギス展開！」

一夏はそのまま地面に激突したみたいだ、ISと人間じゃ速度が違うせいか俺はまだ結構上空にいるのだが

ふむ・・・・俺まだ落下してゐるぞ

異常なのがわかつたのか下にいるクラスメイトが慌てるのがわかる

大丈夫、やつとあなたの力になれる。私の名
前を呼んで零時。

でもなぜだろ？……きっと今のが電波ではないと俺にはわかる、なんせ一ヶ月半ずっと身に着けていたのだから。まあ最近になつて名前を付けてしまつたのだが・・・・・

「来い！武御雷！」
たけみかづち

ん？武御雷にもヨリはあるつて束さん言つてたよな？じゃ あなぜ展開しないんだ！？

『大丈夫、私はアイギスを展開しても使えるようにできているから人が乗れないようになつてるの』

スカイダイビングのように落ちていたら後ろからやせこいつがまれ徐々に落ちていくスピードが落ちていく
ゆつくりと地面へと降下していく

『そのISもAIで動かしてゐることか……自分に展開されないから焦つたぞ』

『すみません、しかしスリルがあつて樂しくはなかつたですか？』

「怖かったわ！たく……」

そしてゆつくりと地面へと降りていき、みんなが近づいてくる
特に先生2人が早足で近寄つてくる

バチーン！

千冬さんの射程内に入ったのか予告なしにバチーン！と引つ叩かれた

「IJの馬鹿者が！」

バチーン！

「イツで！」

もう一度引つ叩かれた
IJに同じと同じにだ

「ひよつこが空中でIJSを解除するんじゃない！！あのまま2人で落ちてきた方が安全だつたんだぞ！IJSのは絶対防護があるだぞ！お前の行動の方が危なかつたんだ！わかつてるのか！」

千冬さんの剣幕に近寄つてIJよつとしていたクラスメイトも近くには来ようとせず、山田先生まで離れている

「わかりました……」

あのときは高度があつたから助かつた……もし低かつたのにやつていたら俺は死んでたんだな

「つぎ同じようなことをしたらIJは没収する、いいな！」

「はい、わかりました

「よしーでは本日はこれで終わる！」

織斑は穴を埋めるのを忘れるな！ 安部、お前はそのままひついて話してから解散とする。以上、ただちに解散しろ！」

パン！ と手を叩いて合図すると一斉に動き出すみんな、あののほほんちゃんとさく走って移動している

「 もう話を聞く」つか

18 (後書き)

オリエンの如前はどいかの作品からつけさせていただいております
そしてその作品の者と外見は大体同じものと思つていただいて構い
ません

「HISのIJSをすぐに聞きたいといひなのだが、山田くん、申し訳ないがこのバカのために氷を取つてくれないか？」

「あ、はい。わかりました、すぐこいつてきますね」

そうこつて校舎に走つていく山田先生

まあバカは俺のことだよな……うん。でも氷つて……もしかして呪いたことに対してものかな？

違うか……単に人払い？という意味でだな

「さて……そのHIS」

武御雷を指さして言つ千冬ちゃん
様になるなあ～

「取り込んだIJSなのか？」

「ん？ 違いますよ？ こんなHIS見たことないでしょ？」「

武御雷の装甲をペチペチと叩きながら言つ

「私は取り込んだIJSを改造したといわれても驚かないぞ。もう一度聞く本当に取り込んだIJSではないのだな？」

「違います」

まっすぐに千冬さんの目を見る

愛と情熱をこめて…………

「おー赤くなつ（パン……）わざわー。」

今の発言は失敗だったな

『あの零時？私のことを説明すれば何も問題なかつたのでは？』

おおーせつだよな、事情を知つてゐるんだから素直にせつぱよかつた

そう思ふ千冬さんを見ると

「んなー。」

ふむ、驚いているな

改造できるのは想像できてもしゃべるとは思わなかつたのだらつ

「俺もわつとき初めて喋つたんですけど、まさか△△とはいえしゃべるとは思わなかつたですよね～

□が動かないからちょっと不気味だけど

『私は△△でもありますから△△ネットワークを使えば言葉を覚える』など簡単です』

「…………もうこれ以上のことがあつても驚かないぞ
とりあえず、何も害はないのだな?」

俺ではなく武御雷に聞く
ちょ、なんかそれ違つよつた

ちょ、なんかそれ違うような

『大丈夫です、零時の危機であるならば話は違いますがそれに私はあくまでIS、規格外なのは自分でも理解できますが平均に愛された零時が操縦者なのですから害はありません』

「その言葉忘れるなよ」

だから俺に言ってくださいよーっと思つが口に出して言えるわけが

だつて叩かれそなんだもん

つかA.Iの癖に俺をバカにしたよな？！平均なめんな！！！！！

「阿部く～ん！氷もつてきましたよ～」

ある少女が一夏のクラスを聞き、そして自分のクラスのクラス代表を代わつてもらおうとしている頃、

俺と一夏は部屋を訪れたのはほんさんたち一組のメンバーに誘われて食堂へ来ると

パン！パン！

クラッカーを乱射され「織斑くん！クラス代表オメデトー」と一組全員に祝われていた、本人が喜んでいるかは別としてだが

クラスメイト達はわいわいと楽しんでいる
そして篝とセシリ亞に挟まれて座っているあまりうれしそうにしていない一夏の顔を見て笑っている俺

「くくく、よかつたな一夏、クラス代表おめでとう」

「やうだねー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「ほんとほんと、同じクラスになれてよかつたよー」

と、俺の言葉に賛成するようにクラスのみんなが賛成していく

そのあと篠 薫子といつ2年の新聞部がやつてきて専用機もひこインタビューをした後写真を撮つて終わった

そして翌日

「ねえねえ、2人とも転校生のこと聞いたー？」

朝学校に来て座った途端に一夏と俺は話かけられた
転校生？

『凰 鈴音、中国代表候補生。2組へと転校してきたようです』

ああそういう、実は武御雷ことタケミ（悠がつけた、理由は武御雷が女性をモデルにしたA.Iだからだそうだ）が出現以来、個人間秘匿通信で俺に話してくれる

俺だけ聞こえるようになつていてるせいかな最初は驚いて声に出して驚いたり、授業中声に出してみんなからちょっと心配されたこともあつた

事情は一夏、篠、セシリ亞、悠、楯無に教えてあつた。このメンバーはいつも放課後訓練しているメンバーで俺らの中ではすでにいつものメンバーとなつていた

たまーに一夏が更識妹の簪？つて子のところに行つていることもある、その日は篠とセシリ亞が暴れるので、あまり展開（出てこない）しないタケミも展開しての訓練となる。

ちなみに授業でアイギスが展開しなかつたのはタケミができないうにしたらしい

タケミ曰く『私の武器を使用許諾いたしますのでご自分で戦うのがよろしいかと』と言つてカーボンブレードと突撃銃を渡して展開は

しない、一度アイギスではなくタケミを展開しようとしたが『私は乗ることを主にしていいないので展開できませんよ、それに展開するのは自分の意志です』ともいい、『私が守ったとしても零時が強くなければ守った意味もありませんしね』とも言ってやがった。

『「いつも思うのだがいつたいどこからそういう情報もつてくるんだ?』』

『秘密です、それよりも一夏たちの話が進んでいますよ』

おっと、こつまでもタケミと話してらんないな

「 その情報、古じよ

聞き覚えのない声が聞こえる方をみると

『あの少女が転校生のようですね』

ほう、天使きた!よし!今の俺にストッパーはない!
転校生に声をかけるべく近寄ろうと席を立つと

「ストッパーねえ……クスクス」

背中がゾクッとしたのでおとなしく席に座り直した
ちなみに俺は口と口とソソンではない、ただちょっと背が低い子が好きなんだだけだ

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないんだから!」

おお、元気がいい子だな
なかなかの好感触じやないか？

「鈴……お前鈴なのか？」

ん？一夏の知り合いか？

これはあれだな、一夏を追いかけて来たの！的なやつか？
この恋愛原子核め！

「そうよ。中国代表候補生、凰 鈴音。今日は戦線布告に来たつて
わけ」

決めた決めた、つか転校したばっかでこんなことできるとかかって
よ良いな

「何格好つけてるだ？すげえ似合わないぞ」

うわ！
ブレイク！みたいな？

「んなーなんてこと書つてのよアンター！」

まあそういうよな

「おい」

「なによー？」

「アシンー

おー！ 大さんだ

「 もうSHRの時間だ、 教室に戻れ」

「 ハハー またあとで来るからね 一夏ー 逃げないでよ」

どうすれば逃げたことになるのだらうか？

そのあとの授業はウケた、さうきの風のことどが気になるのか授業中
何回も千冬先生叩かれていた
それを見て笑った俺も叩かれた・・・・・・

昼 食堂

「 待つてたわよ、一夏ー」

転校生か、『』苦勞だな

「 あの子、一夏のこと好きだね」

「 お願いだ悠…… いつの間にか近寄つて腕に抱きつかないでくれ……」

いつもの事になつていて男としても、柔らかいものが当たつて
嬉しいのだが…… 悠は勘違いしてるから手を出すわけにはいかない、

まあ悠じやなくともそつなのだが

「はあ……」これからはレイナちゃんを一夏予備軍つて呼ぼうかな…」

「ん?なんか言つたか?それより櫛無はどうしたんだ?」

「…………知りないーもつ一夏たち行つちやつたよー。」

今の話題は失敗か?まあ……そつだよな

「ちよー一悠まで置いて行くなつてば、

今日の放課後の訓練が終わつて更衣室に行くと

「はー、一夏。飲み物はスポーツドリンクでいいわよね?」

そつこつて一夏にタオルとスポーツドリンクでいいわよね?

「おひ、サンキュー。零時も飲むか?」

「いや、凰に悪いからやめておく

頭に?マークを浮かべている一夏

「俺は安部 零時、よろしくな

「凰 鈴音よ、よひしぐ。一夏と同じで鈴でいいわ」

挨拶をした後

「んじゃ俺も零時つて呼んでくれて構わない。それでさよっと耳を

貸せ鈴」

チヨイチヨイと指で呼び寄せる

「俺一夏と同室なんだ。今日は部屋にて一時間半後ぐらいに帰るから一夏と話したらどうだ？」

「ほ、ほんとに？一零時つていいやつねー！」

「なんだよ、俺の前で内緒話かよ」

拗ねたように抗議してくる一夏

「まあ悪口じやないんだ気にするな、んじゃ俺もつチヨイ訓練するから

「それなら俺も付き合つぞ？」

「いや大丈夫だ、タケミ相手にやりたいからお前は先に戻れ」

「ああ……わかった」

そうこうして俺はアリーナへと戻った

アイギスを展開するのと同時にタケミも展開した

『私相手にとはい一度胸ですね零時』

「うひせ」

『今日は行動しながら私にハツキングしてください』

「ああ、わかつた」

『では、開始!』

開始を合図に三次元躍動旋回をしながらタケミの突撃銃の弾を回避しつつ、アイギスへも意識する
電子攻撃はアイギスに意識をすることとアイギスのコアネットワークから攻撃をするものらしい
この感覚をつかむのは大変だ、相手のコアへ侵入するような感じでやると攻撃できる感じだ

最初はコアネットから攻撃したいところ目標へ攻撃することすらできなかつたし時間かかるし止まっていないと発動すらできなかつた
今では時間はかかるが移動しながらできるようにはなった

『その侵入速度では先にアイギスのシールドがなくなりますよ、アイギスはもともとスペックも低いしシールドエネルギーは450と少ないのでですからシールドエネルギーには気を付けないといけないのですよ』

「くつせーんなことわかってるー」

『おしゃべりする暇があるとは思いませんでした』

今まで突撃銃での攻撃が突撃銃 + カーボンブレードでの接近戦まで
加わった

そこからは圧倒的な力の差でボロボロに負けた

『強くなつてください零時』

アイギスが解除され大の字になつて寝ている俺に声をかけてくる

「ああ……」

『あなたは強くなれます、実際侵入率も日に日に上がっています、
私の主なのだからそうなつてくれなければ困のですがね
さて時間もいい具合ですし部屋に戻りましょう』

「了解つと」

着替えて部屋に戻ろうとして部屋近くまで行くと
自分の部屋から鈴が飛びってきた

俺が見えていないのかすぐそばを通つて走つて行つてしまつた

「泣いてた……よな」

『一夏のせいだといふことだけはわかりますね』

「それは俺にもわかる」

お昼 食堂

「ケンカした相手と対戦とかやるな一夏」

「別に俺のせいじゃないぞ」

「鈴が怒つてるのはお前のせいだろー
つと、そういうや今日はクラス対抗前の最後のアリー・ナ使える日だつ
たな。悠、樋無、お前ら今日一夏のこと徹底的に見てやつてくれな
いか?」

「一夏の訓練を見るのは私の役目だぞ!」
「一夏さんの訓練を見るのは私でしてよ!」

と、一夏ハーレムに言われた

「俺だつて意味がなくて言つたわけじゃない、いつも一緒に訓練し
てるが基本悠と樋無は俺を見てる、簞とセシリ亞は一夏を見てる、
これじゃあいつも同じ相手で癖がつくだろ?だから今日は相手を変
えるつてわけだ。それにお前ら2人に勝てるのか?」

最後の勝てるのか?発言で2人が「うう」と言い始めた

「私クラス代表なのだけど?」

「学園最強が何を言つか、後輩のために頑張ってくれ樋無」

「私今日から生徒会のこと忙しいのよ？人でも足らないし」

扇子をバサツ！と広げて不足という文字を見せてくれる

ふむ・・・・・つまり

「わかった、手伝つからお願ひできなか？」

「オーケー、お姉さんが一夏くんを鍛えてあげるわ」

今度は祝という文字で見せてくる

「悠はどうだ？」

「ん~、私はいいや。レイちゃんと一緒にいられればそれでいいや

予想外だった、正直『デートとか言われると思つてた

「大人だね悠は」

「たーちゃんだつて大人だよ。とりあえず一夏のこと面倒見てあげる

頼んだ、と言つて話は終わった

そして放課後

「待つてたわよ一夏」

アリーナに入ると一夏を待つていた鈴に出てくる
しかも不機嫌オーラ全開で

「それで一夏、アンタ反省した?」

「なんでだ?」

言葉だけで見れば一夏も怒つて見えるかも知れないが一夏は本氣で
なんとかわかつてないな

「なんでって!私を怒らせて申し訳なかつたなあ」とか仲直りした
いなあ」とあるでしょ!..

「いやなんで怒つてるかもわからないし……なあ零時」

「俺にふるなバカヤロー」

とばつちつくりだるりが!

「良いから謝りなさいよ!..

おおう、それは強引すぎといつか理不尽ではないか?
してないのに「アンタ痴漢したでしょ!..」ぐらうに理不尽だ

「だからなんでだよ！約束覚えてただろ！」

「意味が違うのよ意味が！」

意味が？沖縄料理のミミガーカー？

「レイちゃんきっと一夏と同じ」と考へてる

ORZ

「あつたまたー！」うしまじょー！来週のクラス対抗戦で勝った方が負けた方になんでも一つ言ひことを聞かせられるつていうのはどうー！」

「いいぜ！俺が勝つたら意味を教えろよな！」

そして一夏が勝つて意味をして一夏は鈴と付き合つんですね！ええわかりますとも！

「わかつたわよー覚悟してなさいよねー！」

「お前こそしてりよな、バカ！」

「バカとは何よバカとはーこの朴念仁ー間抜け！アホ！「女つたらしー！」黙つてなさい零時！「はい…」バカはアンタよバアカ！」

お前らガキか？

「つむさー貧乳

ドガアーンー！

この時音が鳴ったのは鈴が腕をヒラ化させて壁を殴ったよつの跡を作ったために音が鳴った

おいおいマジかよ……壁まで結構あんだぜ？勝てんのかよ一夏……

「す、すまん、今のは謝る」

たすがにヤバイと思ったのか素直に謝る一夏

「許さない！絶対に許さないからね……！」

そうじつて走つてアリーナから出て行つてしまつた

「しまつたな……」

「そりだな……なんにしても鈴には冷静になつたときもつ一度謝らないとな」

「ああ……やうだな」

パンーと音が鳴りながらを向くと櫛無が手を叩いていた

「今は彼女に勝つことだけを考えましょ」

「一夏が言つたことはもう言ひ返せないの……だから今は過去じやなくて未来を見て」

「それでいても……」

俺がさつさ鈴が破壊した壁を見る

「やつですね…おそらく接近戦パワータイプではないかと」

セシリ亞が壁を見て鈴のエラのタイプを予測する

「じゃあ今日は私じゃなくて篠ちゃんの出番ね

自分ではなく篠の出番だという権無

ちなみに最初は篠ノ之さんと言っていたがいつのまにかちゃん付けでセシリ亞もちゃん付けになっていた

「なんでだ?」といつ俺……俺はバカじゃないんだからな!

「単純に私が剣術が使えるからだわ!」

腕組みをして理解している篠

「なんでだ?」

……一夏と俺は理解できていよいよだ

「一夏は雪丘式型だけだからだよ。それでどうしてかといふと、パワータイプの接近戦になったときに雪丘でうまく攻撃をそらす練習をするためってことだよ」「みだら

俺と一夏が何度もなんでだ?と言わなくて済むようになりますやすべ

解析をしてくれた悠

「なるほど、まともに攻撃を防ぐんじゃなくて捌けるようにするつてことか。じゃあ楯無とセシリアは俺の訓練に付き合ってくれよ」

「じゃあ今日は私対2人の模擬戦をしましょ。セシリアちゃんもそれでいい?」

「構いませんわ」

「じゃあかかるつきなさい」

余裕つて顔でいる楯無

「その余裕面がいつまで続くかな楯無ーー!」

キャラ容姿紹介（未完成）

安部 あべ
零時 れいじ

どこにでもいる平凡な少年

きっと世界中が顔を見てふつうと答えるだろう

平均と半分の称号を持つ男

実は半分が使いづらくてどうしようと困っている主

悠の積極的なアタックに困っていない（だって男の子だもん）がいろいろと事情があつて悠の気持ちには答えていない？

悠を怖がつたり避けている言動があつたりするが別に本当にそう思つていなかかもしれない？

ツンデレじゃないんだから！　どうして今これが来たか主にもわからぬ

相沢 悠

マブラヴT.Eのクリスカを幼く笑顔が似合ひ子（『テレテレの子』）&髪を長くしたら主の頭にいる悠に会えるよ w

積極的に零時にアタックするがなぜ零時が気持ちに答えないか理解しているため、アタックも限度は理解している つもり

相沢 巧
イケメン
巧はイケメン

・・・・・申し訳ありません
これはまだ未完成です
更新したらお知らせいたします

生徒会室

「のほほんさんがいるとは驚きだ……」

「えへへー、すごいだしょー

今実家に帰つててこないけどお姉ちゃんもいるんだよ~」

にんまり笑顔でダボダボの袖を振り回しながら言つ
いつものほほんとしていたので生徒会にいるとは思えないな

「仕事できるのか~?」

あれ? つことは実はのほほんさん強いのか?」

「生徒会長は最強でなければいけないけど、他のメンバーは定員数
になるまで好きに入れていいの」

なるほど…………ってことは生徒会長次第で最強の生徒会ができる
かもしないと…………恐ろしいな
下手したら国にケンカできるかもしないってことか

「やつだー! ちよつび定員が空いてるから「遠慮しておけ」零時も「
やらない」一緒に「やらん」……そんなにお姉さんのが嫌い
?」

長い机(アニメでよくある学校にある長くてたためる机)を挟んで
座っていた橋無がグイッと机に手をつこてこからに近寄つてくる、
そうすると自然と目線がある一部に……

はつー見えるー見えてますよ谷間が樋無さんー

「どー見てるのかな零時?」

零時ねえ… 最初レイちゃんって呼ぼうとして悠に怒られてたっけ
束さんも呼んでるレイちゃんなのになんで樋無はダメなのだろか?

「急に遅いこと書くてもだめだよ。それにしても今日まちゅうと暑
いね」

そうこうして胸元をつまんでパタパタとし始める

「……………ピンク」

「あせ、えつち。はいティッシュ、鼻血出してるよ」

「おー、サンキュー」

そのあと悠が来て抱きつかれた際にもつ一回鼻血がでた

そしてクラス対抗戦までの一週間は樋無との約束で生徒会の手伝
いをして過ごした

クラス対抗戦当日

『それでは両者規定の位置に移動してください』

アリーナのアナウンスに促されて一夏と鈴が向かい合ひ

「いよいよか……」

篠がビットのモニターを見ながら言つ
ここには1組教師陣といつもメンバーがいた

「お前、どうしていいのか？」

悠と櫛無に向かつて尋ねる

「私の試合は1年生のあとだし問題ないわよ」

「それに私とたーちゃんだって一夏の関係者なんだから大丈夫だよ」

「と、言つてますがどうなんですか？」

今度はそれを千冬先生に聞く

「構わん」

「一言ですか……弟が心配なんですね
このプログラコンが！」

「何か言つたか？」

ギロリと怖い目で見られる

「いえなにも」

『それでは両者試合を開始してください』

ビーーとブザーが鳴つて、途中で両者が動き出した
一夏はもちらん雪片式型
対して鈴は青竜刀を改良したようなを出し戦闘を始めた

「よし！初撃は防いだな！」

ぐつと手を握つて自分のことのよつに喜ぶ俺
しかしそのあとの猛烈な鈴の攻撃で防戦一方になつてしまつ
それを脱するためか距離を置こうとする一夏

そして離れようとしていた一夏がいきなり何かにぶつかつたよつに
地面へと落ちて行つた
交通事故にあつたみたいだ

「ちょ！なにあれ」

「衝撃砲ね」

抱きつきながら解説をしてくる樋無

「衝撃砲……確かに空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す でしたわね」

「砲身と砲弾が見えないのが特徴みたいだね、第三世代つてこうかな」

セシリ亞の細かい説明に補足を入れてきた悠

「見えないのによくかわせるな一夏『失礼しますー』おわつー」

突然展開したタケミに抱かれている

『行きますよ零時』

それだけ言つてビットから出てアリーナの中へと入ろうとしている

「おいおいー何やつてんだ！今試合中『試合中止』じゃなくなります』『はい？』

アイギスが強制展開されすぐに『テイスプレイ』が出てくる

『これは？』

そこに映つていたのは黒い『IS
見たこともない』で、しかも全身装甲だ

『ISの学園に接近中のステルス機です、今は私の目ですから見えますが、おそらく学園は気づいていないでしょ。信じるかはわかりませんが千冬の居た部屋の端末にはこのことを知らせておきました』

そんなやり取りをしているうちにアリーナへついてしまった

そして観客席にはすでに防壁が閉まってあることにも気づいた

ドオオオオ――――ン――――!

『タイミングはぴったりのようですね』

アリーナのシールドを突破してアリーナ中央に降り立つ黒いHS

『「なつ、なんだ?! 何が起きてるんだ?」』

『「一夏! 試合は中止よ。すぐピットに戻つて!」』

何が何だか慌てる一夏と冷静に一夏に指示をだす鈴
さすが代表候補生だな

『アリーナから出るのは無理です、侵入してきたHSにより不可能
になっています

ああですが一夏の零落白夜を使えば逃げることはできますね』

挑発するように言つタケミ

こいつホントにA-H-Oか?

『「逃げる? そんなことするわけないだろ、アリーナってことは見
に来てたみんなが避難できないってことだろ? なら櫛無さんとか先
生方のみんなを助けてもらつてる間俺たちが食い止めるんだ!』

『一夏ならそう言つとわかつていました。聞いていましたね千冬そ
ちら任せました』

『「機械の言つ」とを聞くのはどうかと思うが良いだらう。山田へん、アリーナへ向かつた先生方を救助の方へ向かわせてくれ』

『後半ちょっと指示が聞こえたがタケミの言つとを聞いてくれたみたいだ

あれ？ そういう機械系ならアイギスの電子攻撃で何とかなるのでは？

『零時にはあの黒いエリを取り込んでもらいます』

「ちょ！取り込むつて！あれＩＳだろ？ＩＳつて国家、企業の属してるんだろ？！俺犯罪者にはなりたくないぞ！！それに電子攻撃で先生のサポートしてた方が俺は性に合ってるんだが？！」

『まだ確信はありませんがあの工場はどこにも属していないでしょう。取り込んでも問題ないでしょう。だからこそサポートではなく今回はあるの工場を取り込んでいただきまーす』

「どーから（バシュン！）おわー！」

侵入してきた工場の攻撃を寸前でかわす

『まずはあの工場を止めるのが先決のよつです』

そういうて俺にカーボンブレード、突撃銃、盾を渡してくれる
ちなみに盾の後に装備を付けるようにしてあるから今は盾にカーボンブレードをセットしてある

「コレお前の装備だろ？お前の装備ないじゃないか」

『これは私の後付装備です、初期装備は今まで使う必要がなかつただけです』

両肩、腕が光り武器を開いている

手には雪片に刃の部分が真剣になつていて機械と刀融合している刃

逆の手には試製99型電磁投射砲

両肩には可動兵装担架があり突撃砲が装備してある

『試製99型電磁投射砲はレールガンですが……威力が高すぎるの
でしまいました』

そういうて電磁投射砲の代わりに短刀をだす

「武器の種類あつていいなあ……」

俺の心から出た言葉だった

『一夏はアリーナの端で待機してください、鈴と私は前衛であるエ
スの注意を引きます、零時はあのエスの無効化が終わるまでサポー
トです

タケミが指示を飛ばし各機動き始める、かと思いつきや

『「なんで俺が待機なんだよ」』

『「ちよつと何よあのエス? ! あのエスも全身装甲? ? 』』

反抗する一夏ともう一機の全身装甲が出てきて、しかもそのエスが
指示を飛ばしてくるから戸惑う鈴

『「織斑、凰! 今はそのエスの指示に従え! これは命令だ」』

アリーナ全体に流れる千冬さんの命令
しかしタケミは信用されてるな……来たときに防壁が閉まつてたと
こからもわかることなのだがな

『とこいじなのによろしくお願ひします。私が鈴に合わせるので

『鈴はお好きに戦つてください』

『「言つたわね！ついてこれなくとも知らないわよー。』』

『鈴しそじっかりやつてくださいね』

2人が所属不明機IISに立ち向かって行く

あれが三世代機の力なのか？相手の不明機も速いが、鈴とタケミのコンビネーションによってその速さも生かしきれてない鈴の衝撃砲を避けたところにタケミが待ち構えていて、その隙に鈴も接近をして青竜刀でダメージを与えていた

『「アンタ名前は？」』

『武御雷です』

『「いやHISじゃなくてアンタの名前よ。』』

鈴がタケミのこととはこのことを知らないのを忘れていた

『私は……タケミですか』

『「そう、よろしくタケミ」』

この会話中も戦い続ける2人

今の俺では2人の半分ぐらいの強さでしかないだろう
平均と半分か……でも俺は東さんにIISのことを教えてもらつた。
それこそ世界と比べて平均以上半分以上知つてゐると思つ。今はそ
れだけで十分俺の地震につながるつてもんだ

しかしだな・・・・・・

「俺のサポートなんかいらねーじゃねーかお前りー。」

『「俺なんて待機だぞ! なんで俺だけ待機なんだよー。』』

「お前はエネルギー残量少ないからこいつとこいつ時の零落白天のための温存をかねての待機だからいいじゃねーか」

『「そりだつたのか… 気づかなかつた…。なあでもそれよりもあのIS、なんか変じやないか?」』

「変? 変つてどーじがだよ?」

『「なんか機械じみてないか?」』

機械じみてる?

ちよつと侵入してみるか…

『「何言つてんのよー夏、エリはもともと機械じやない」』

『「そりだつたのよー夏、エリはもともと機械じやない」』

『

『私の劣化版ですか……どうなのですか零時』

「確かにそうみたいだな……人が乗つてないのは確かだ」

『では遠慮なしで行きましょー。一夏は全力の零落白天の準備を、

私たちのはあの二人の動きを封じます』

「封じるって言つたつてどうするんだよ。」

『地面に落とせば動きも制限されるでしょう。その時が一夏の出番です。よひこですね?』

『「心』

一夏は準備

そして俺たちは二人を落とすために上からの攻撃に切り替え攻撃を開始する

「ちよこまかと避けやがって! 蹴りでもへらわせてやりたいぜ

『良いですねそれ。ではー。』

ポロッとでた愚痴できつかけを得たのか上空に上がり不明機の真上から急降下をして墜落としを決めて地面に落とした

しかし勢いで右足がくるぶしのちよこと上から壊れてしまった

『今です一夏』

『「うおおおおおおお…へりええ…」』

地面上に落ちていたI-Sの頭を切つて破壊する
そして立て続けに両腕も破壊して一夏のI-Sが解除された

「終わつたみたいだな」

壊れた不明I-Sに近寄つていう

『いえ、終わつていません。それこのI-Sも機能停止はしています
せん。』アガ生きている限り生き続けるでしょ。……私のやつは』

なくなつた右足を見ながら言つタケミ

『「あわわー・タケミアンタ足……・絶対防禦せびつしたのよー….
ー…」』

鈴が慌ててタケミに近づこう

『落ち着いてください私は大丈夫です。それよりも零時、今のうち
にI-Sを取り込んでください、』アガは胸のところにあるやつですか』

「ああ、わかった

不明I-Sの前に立つてアガを発見する
後ろから鈴が慌てている声がまだするが無視だ

「す～～は～～、す～～は～～。よしー。」

深呼吸をした後、気合を入れてコアに手を触れる

「これはどうじだ？ 真っ暗な空間…… わつきまであるヒヒの前にいてコアに触れたことまでははつきり覚えている

するとここはコアの内部？ コアそのもの？ ことなのか？

あなただけ？

声の聞こえた後ろを振り向くと無表情の黒髪の子供がいた

黒いワンピースを着ているから女の子なのだろう

女の子の田線に合わせてから言つ

「俺は安部零時、君は？」

わたし? わかんない

首を振つて応えてくれる

それにしてもこの子はなんなのだらう

でもおにいちゃんがさつきわたしがこえをかけたのにへんじしてくれなかつたよ

さつき? さつきってもしかして無人機か調べるときに侵入したときつてことか?

もしコアに侵入したときだとしたら、コアにこの女の子がいることになる

あの時俺は人を探してから見つけられなかつたのかもしれない

……
ということは実はコアには人格のようなものがあるかも知れないってことか?

じゃあタケミも実はAIではなくコアの人格なのだろうか?
束さんならAIも作れそうだし、コアに人格を作つたりすることもできるかもしれない

その時服に違和感を覚え見えてみると女の子が袖をギュッと握つていた

「わいかおしてる

「齋えさせちやつたか?」

ぶんぶんと頭を振つて応えてくれる

くらい、こわいの

なぜだらけ……この子を助けなければいけない気がする

「 パパにいたくない?」

?

彼女にとつてパパの空間こそがすべてだつたのだろう、俺がいたくない?と聞いても何が何だかわかつていな様子だ

「 ん~と、お兄ちゃんを信じてくれる一緒に来てくれる?」

うん

「 本当についての?」

うん、いっしょにくる

「 よし、じゃあ行こうか」

立ち上がって女の子の手を握る

うん

その時だけは笑ってくれた女の子

俺はこの子を取り込むんじやなくて助けるんだ

「女の子？あの時コアに触れたお前は気絶して保健室に運ばれてからずっとここが女の子なんて見ていないぞ」

「一日…ああ、やうこやコアに触れて女の子に会つて……それで今
[...]って感じか

「ああそうだ、ここは保健室だ。そつか…一日寝つきついたから
田が慣れていないのか」

「千冬さん…ですか？」

「起きたよつだな」

まだ田を開けていないから見ていないがこの声は

「ひひ」

微妙に女の子ひつひつたとき顔が怖くなりましたよ千冬さん？

やつと田が慣れてきて田を開けるよつになつた

どうやら俺はベットで寝ていて千冬さんはそばにあるイスに座つて
いる

「いや取り込もうとしてコアに触れたあとに会つたんです。夢とか
じゃないと思います、きっとあの女の子は不明E.Uのコアにある人
格の形が女の子として現れていたんです、まあ俺の想像でしかない
んですけどね。千冬さん？」

何やら話の途中から考え後事始めてしまつた千冬さん

「あの～千冬さん？聞こていらっしゃいますか？……いたずらしま
すよ？」

反応がない、ただの屍のようだ

「少し考え方をしていただけだ

そのまま考え方中ならば触れたものを……

「それよつ今何時ですか？」

「ちよつといつあたりだな」

手に付けていいる腕時計を見ながら答えてくれる

「タケミから聞いたのだがE.Uの取り込みは無事終わつていいやう
だ

そういってイスから立ち上がって部屋のドアへと向かう

「そういえば相沢妹と樋無が心配していたぞ。じゃあな

千冬さんが部屋から出ていく、眠気が襲われそのまま眠りについてしまった

放課後 アリーナ

「もつ大丈夫なの?」

心配そぞ尋ねてくる悠

「大丈夫だつて、別に怪我したわけじゃないんだから。悠こそ心配かけて悪かつたな」

「ホントだよ、たーちゃんと一緒に心配したんだからー。」

「それでそのたーちゃんはどうしたんだよ?」

「今日は生徒会のお仕事だつて」

「忙しそうだな、あの事件があつたばつかだし」

「そりだね、でもあのHS取り込んでどうしたの?今日試してみるの?」

「いやなんか今朝『取り込んだHSを調べますので私が呼びかけるまで、私とのHSは使えません』って、『ああ武器は使用許可しておきますのでお好きに使ってくださいって』って言つた後連絡が取れない」

「そつかあ～じゃあいつも通り訓練あるのみだね。あつ!そつこえ

ば昨日から鈴ちゃんが加わったの

鈴か……やつこえはタケミのことは説明したのだろうか

「それはタケミが自分としてたよ」

「んじゃ僕にせざやるかー！」

「うん！私を倒せたら夕飯のおかずあげやつよ」

「お前に勝てて褒美がそれかよ、まあいいや。いくぞー！」

カーボンブレードを展開して瞬間加速で間合いをつめて切り付けようとするが、悠は装甲を腕に付けて太くしてきた

「え？！そんな使い方ありかよー！」

その太い腕で殴り掛かつてくる
それを見てサイドステップで避けて、ブレードから突撃砲に変えて
からバックして撃ちながら逃げる

「ダメダメ～まだACFAやつてる方がいい動きしてるよ～。IS
は自由に動けるんだからもつと三次元移動しなきゃだよ～」

そういうながら今度は装甲ではなくブーストを装備した悠が接近してくる

近づいてくる前に突撃砲の逆の手にブレードを展開させておぐ

「それも私相手じゃダメだよ」

接近してきた悠が瞬間加速でやつてくる

それは予想していたからブレードで太刀打ちしようとする

しかし寸前で重装甲に変わりそのまま武器を展開せずに殴つてきた

当然俺はブレードで太刀打ちしたが一本の力でどうにもならず殴り攻撃をくらつて吹っ飛んだ

その吹っ飛んだ俺を

俺吹っ飛ぶ 軽装甲 接近 重装甲 殴る 俺吹っ飛ぶ 軽装甲

接近

でなす術もなくシールドエネルギーをすべて持つて行かれた

「完敗かよ……自信なくすぜ」

アリーナの観客席で一夏たちがまだ訓練しているからその姿を見ながら話す

「アイギスはもともと戦闘で勝つための仕様になつてないから仕方ないよ」

「でもあの装備の切り替え早いのな」

「あれはH-Sの能力じゃなくて私の実力だもん、あれちゃんと名前があつて高速切り替え（ラピッド・スイッチ）って言つんだよ」

腰に手をあてた自慢げに言つ

しかしそれに見合つ努力はしているのが今の俺には分かる

俺にはあんなことできない

「稼働時間も違いすぎるし俺センスないし…勝てねーよなあ……」

「ダメだよレイちゃん!弱気になつたらレイちゃんじゃないよ

「お前は俺をどんな風に見てるんだか……でもここまでぼろ負けだとな~」

「じゃあ戦い方を変えようよ。アイギスにあつた戦い方をすればいいんだよ」

「アイギスに?たとえば?..」

急に田線をそらす悠
考えてなかつたな

「一夏は雪片式型を信じてそれを活かすために戦つてる
セシリアちゃんはジットをうまく活かすための距離で戦つてる
みんな自分に合うスタイルで戦つてる。じゃあレイちゃんはどんな
スタイルで戦いたい?」

「どんなスタイルで?」

「急いで決める必要はないよ」

「いや決まってるよ。俺はみんなのことをサポートできるよつこな
りたい」

「レイちゃんは変わらないね……誰かのためになら自分が犠牲にな

「……なんだか、そんなレイちゃんだから好きになつたんだよ。」

思わぬ告白にびっくりする
いつも聞いているから気にしないがなー

「顔赤いのに？」

גַּתְּתָאָרֶבֶּן

「ふふふ、じゃあ明日からはアイギスに合う戦い方と一緒に探そうか?」

「ああ、それで頼む」

そして2週間がたつた時

「今日はお姉さんが2週間ぶりに相手をしてあげる。なんだか戦い方を変えたつて悠が言つてたけどそんな付け焼刃でお姉さんに勝てるかしら?」

「勝てなくたっていいんだよ、樋無で通用すれば問題ないんだよ」

「欲がないわね。お姉さんに勝つたらいいことしてあげるわよ?」

「よし！ 勝つてやる！」

「レイちゃん、買ひかえつけた生徒会長だよ。」

怒りと怒りをもたらすがやせこく諭してくる

「あら？ 怒ると思つてたのに意外に冷静ね」

「ふふん、この2週間レイちゃんとずっと訓練一緒にやつてたもの、
た一つかんとの差は歴然だね」

「ほわね～、まいいわ。それじゃあ始めましょ！か」

「心」

六月頭

「ここまで訓練やらでやつと学校にいたが今日は

「あつー弾ーお前何しやがるー。」

「こくら零兄でもゲームはゆずれないぜー。」

五反田家へ一夏とともにお邪魔していた

「俺もこじるや零時、こじるることを悠に教えるぞ?」

「やめてください巧様!」の2か月理性が持つただけでもほめてくれよーつか櫛無まで加わるから大変だったんだ!つかつかーお前俺がどうして悠の返事に答えないかわかってるだろ?ー

俺にもちゃんと返事をしない理由はある
ヘタレと言つた一夏にもそれは言つてある

「あれだろ?相沢兄妹がいじめられてたところを助けたのが零時だつて奴だろ?それで悠が零時を好きになつたってやつ

「そいつ、悠は勘違いしてるんだよ。たまたま俺が助けただけなんだ、だからきっと助けたのが俺じゃなくてもそいつに惚れてたよ」

「まあ兄の俺から見ても悠はあの時に惚れたな・・・・・・・
それともに俺たち兄弟はお前のためなら...」

「あ？ 最後なんていつてたんだ？ 惣れたなつて言つてたあとなんか
言つてなかつたか？」

「お前が知る必要はない、しかしそれだけで悠がお前に惚れている
とは思えないがな」

やけに真剣な声で言われ軽くビビッてしまつ

バタン！

ドアを足蹴りしていく女の子がいる

「お兄ー。わっしきからお皿ができるたつて言つてんじやんー。わっしと食
べに」

天使きた天使！

「かわいいなー！ 君が弾の妹の蘭ちゃんかー！ よしー。ちょっと俺蘭ちゃ
んと「おこ零時、やめとけ」はい」

俺が想像しているモノとは別の感情が頭に入つてくる
まあ相沢兄妹能力だな、これもまた銀髪黒ウサギの時にネタがわか
るだらう

「なるほど……」 夏にほ、「待つた零兄それは言つてやらないでくれ
おっおっ！」

兄つて血のまじりの妹に甘いのだからか？

「零時の好みつて2か月一緒にいてもいまいちわからないんだよな。
久しぶり蘭、お邪魔してるぞ」

「え？あの、その、いつ一夏さん？！」

「おう！暇ができたからちよつと家の様子見るついでに来たんだ」

「わ、そうですか」

と、走つて一階に下りて行つた

「「」の恋愛原子核め！」

この日は男4人で騒げて正直楽しかった
そして一回実家帰つて親に会うから先に一夏には「」学園へと帰つ
てもらい

門限ぎりぎりの時間に「」学園の部屋へと帰つてきた、のだが部屋
の前にいるのは

「あれは篠か？」

「一夏ー来月の、学年別トーナメントで私が勝つたらーつ、付き合つてもらつー」

わ～お、学園の寮でそんな大声で告白とはやりますな雰囲
思わず家からもつてきたゲームが入ってる鞄落としがまつたぜ

「れ、零時ー帰ってきたのか?！」

すまない雛……さつと俺が部屋にいないと思つて今がチャンスだと
思ったのだろうな……聞く気はなかつたと手を合わせて

「すまん」

「わ、私もこひでしたのが悪いのだらう。では、私は部屋へ戻る」

部屋つて言つても隣だけだな

どうせなら一夏をそっちで呼んで告白すればよかつたの……むしろ優勝しなくともこひような告白にすればよかつたのに

朝教室に入つて行くところもまして教室が騒がしかつた

「なんだ?何の話してるんだ?」

「「「なんでもないよ!」」」

クラス全員に返答された

ちなみにこの後悠が来て「学年別トーナメントで勝つと一夏かレイちゃんに付き合ひたまつて噂が流れてるよ」と俺だけに教えてくれた

一夏には面白そうだから黙つてしまつ

そして違う日の登校中

「そういうあの人不明事件から一ヶ月だね、まだタケミは応答しないの?..」

「ん~、たま~に話していくから壊れてるわけじゃないんだけど...なんか、助けた工事の教育で忙しいって言つてた」

「ふ~ん、レイちゃんはやっぱ助けるつていうよね.....どうして?

「あの女の子が小さこいの...友達になる前の悠に雰囲気が似てた

からつてのもあるな……」

「私に？」

「そう、何も知らない子供つて感じかな」

「そつか……そつなんだ。よく覚えてたね」

「何言つてんだよ……あの時の巧はナイフだぜ？俺殺されるかと思つたよ」

友達にある前の巧とケンカ（一方的な暴力だったが）したことがある
あれは確かに悠を助けたあとに殺されかけたんだ……でもそのあと悠
が誤解を解いた

あとから聞いたのだが当時の悠は無口でしゃべらない子だったらしい
とまあそんな悠が必死に俺のことをかばつ悠を見て巧は殴るのをや
めてくれた

そのあとは……長いからまた今度にしよつ

「ふふ、結構覚えてるんだね。もう私たちひと組つたときのことなん
か忘れてると思った」

「こいつあつたとかは忘れたが出来事を忘れたことはないぞ」

「そつか。じゃあ、また放課後ね」

いつの間にかついていた教室の前で悠と別れる

教室に入りHRが始まるのを待つ

そしてやつてきた山田先生は言った

「今日はなんと転校生を紹介しますー。しかも一名ですよー。」

「　ええええええー。」

「ひつひつひつ」のクラスはノリがいいのだらつか

「どうぞ入ってきてください」

教室のドアが開き

二人の転校生が入ってくる

「失礼します」

片方はズボンをはいている男

「……」

片方は眼帯をした女の子

この教室のメンバーが転校生が入つてき際に静かになった
そして金髪の男が挨拶をした後クラスメイトが騒いでいたみたいだ
が俺は頭に入つてこない

そして俺が頭に入つてこない理由を作つている本人が喋りだす

「ラウラ・ボー・デヴィッヒだ」

自己紹介が終わつた後思わず立ち上がってラウラ・ボー・デヴィッヒ
の前に立つていた

「ラウラ・ボー・デヴィッヒって言つたな……お前第何せ（バーン！）
イッて！」

頭を叩かれた、叩いた本人は見なくともわかる
それに今俺はこのラウラ・ボー・デヴィッヒという銀髪の女の子から
目を離せないでいる

「落ち着け馬鹿者……それにここで聞くことではない、放課後にで
も聞け、ではHRを終わる各人はすぐに着替えて第一グランドに集
合しろ、織斑と阿部はデュノワの面倒を見てやれ同じ男子だろう」

千冬さんが強引に話を進めてボー・デヴィッヒと話をさせてくれなか

つた

そのボーイデヴィッシュはすでに教室から出て行ってしまっている

「おーい零時ーしつかりしろー置いていくぞー！」

一夏に揺さぶられて意識が戻つてくる

「……ああわかった」

そういうてアーリーナの更衣室へ走つていく

更衣室

「なあ、どうしたんだよ零時…ボーイデビッシュ? ボーイデヴィッシュ? つてやつ見てからおかしいぞ?」

おかしい…確かにそうかもな…

仕方ないだろ? ……銀髪を見てしまつとビーハンにも疑つてしまつのだから…

「悪い…ちょっと整理がつかなくて…、つとここんな時間だ。早く着替えないとな、デコノワも早くしないと怒られる… つてもう着替えてたか」

「おー早いなシャルル!」

「え? そ、 そつかなハハハ」

「大変だなお前も、俺たちのデータ取りに来たんだろう? 実は女だつたりしてな~」

転入したばかりなので「冗談を入れてフレンドリーにならう」と会話を
する

「何言つてんだよ零時 つて時間ヤバイヤバイ！」

一夏に言われて時間を見ると1分前だった

「デュノワ顔青いが大丈夫か？」

「だ、大丈夫大丈夫アハハ」

ちょっと乾いた笑い方だが初日だ。まだ緊張しているんだろうな

グラウンド

「遅い！」

と鬼教官からの指導は免れなかつた

グランド

今日は一日E.S授業で一組と合同実演らしく鈴もいて、千冬さんと一緒に来いと鈴とセシリ亞が呼ばれ

対戦をすること、そして相手が山田先生だった

最初一夏の上にふってきた山田先生を見たときは大丈夫か?と思つたが、鈴とセシリ亞対山田先生戦を見た限りじゃあ下手すると悠と良い戦いができるかもしれない

今回は手加減だらうし専用機でもないからむしろ悠並かもかもしれない、けどさすがに楯無以上ではないだらう

まあ結果は山田先生の勝ちで終わっていた

「これで職員の実力はわかつただろう、以後敬意を払つて接するよう」。専用機持ちをリーダーとしてグループを作つて実習を行う。いいな?では分かれう

一組のほとんどのメンバーは一夏とデュノワに集まり、なぜか一組のメンバーが数人俺のところに集まつた

「ん?一夏とデュノワのところに行かないのか?」

正直巧といふと女の子はみんな巧へと流れしていくから今回のこれは正直に言えばうれしい

まあ小学校から悠が俺に好意を寄せていることが知れ渡つていたのもあるかもしだれないが……たまにそれで俺が悠を誑かしてる?といふか俺と代われ!みたいなのがあつたが巧が排除していた…なんでも「我が妹の恋路は兄が守る!」だそうだ、素晴らしいなシ

スコン

まあそれで女の子から巧様から離れて一つて言つのがあつたけどね

……

「鈴ちゃんを見ると織斑くんはさよつと…鈍いからですね」

まあ確かに鈍いな

「トヨノワくんは女の子って感じだから私のタイプじゃないですね
これはやつこつ選び方なのか?」

「織斑くんは守ってくれるタイプで、トヨノワくんは守つてあげた
いタイプ。安部先輩は年上つてこともあって大人ですしつも一緒に
いてくれるつて感じなんですよ」

先輩か…一組にいると忘れるが俺年上なんだよな
悠がいるがクラスが違つみみたいな感覚で忘れてた

「安部先輩といえば悠お姉様と樋無お姉さまがつっこくくる」

そういうのもこののね……

「INの馬鹿者共が一出席番号順に各グループに入れ…せつせとしろ
ー!」

千冬さんの氣迫に軍隊のよつの動いて一瞬のうちに分かれるのが終
わる

「最初からそうしないか……」

額を指で押さえながら「はあ」とため息をついている千鶴さん教師つて大変なんだなとしみじみ思つた

ちらつと視界に入る隣のグループの銀髪の方へ視線を向けると

「ねえねえ、朝阿部君になんか言われてたけど知り合いなの？」

「専用機持ちつてすごいね~」

とか転校生に聞く質問で話しかけていた

そして1人の女子がボーデヴィッシュヒを触ろうとしていた
状況からして「髪きれいだね」みたいな感じだった

そして俺は見ていてわかった

ボーデヴィッシュヒの腕が触ろうとしている彼女の顔を叩こうとしていることを…

「やめろボーデヴィッシュヒ

アイギスを展開して顔にあたる寸前のボーデヴィッシュヒの腕を捕まえて止める

眼帯をしていない目で睨まれている、その眼は昔の巧にそっくりだつた

「勝手にHJDを展開するなっ

「なっ」のところで出席簿アタックをくらつ

痛くはなかつたがエネルギーが減つている……絶対防衛が発動したのか？

「まあいい、事情は見ていた。阿部は自分のグループに戻れ」

「ここは素直に千冬さんに任せて戻る

きっと俺の想像は間違つていないと思つ、でも悠と巧とはちょっと違う能力なのかもしれない

「「」めん皆、おまたせ」

グループに戻り頭を下げて謝り

顔をあげると顔を赤くしたグループのメンバー

授業が始まつても赤いのは治らず、一夏のところでお姫様抱っこで運ぶのを見たのか俺のグループでもやりだした

苦笑いするしかなかつた

そして午前の授業が終わり

昼一緒に食あうぜと一夏に誘われたが断つた、そのあとに悠もきたが断つた・・・のだが

「わかつてるよ、朝からずつと見てたから」

お見通しらしく俺がこれから向かう場所についてきた

そこは通学路の途中にあるけよつとした池があるところといつはいた

「ラウラ・ボーデヴィッヒ」

名前を呼ぶと「ひらりを見る

「また貴様か……なぜ私に構う」

「聞きたいことがあるからだ。お前人工子宫生まれだな？」

「なぜ貴様がそれを知っている」

さつきの授業で睨まれているのと違う睨まれ方をする
明らかに殺氣がある

「私がそうだから」

俺の後ろに立っていた悠が前に出てきて囁つ

「あなたの名前はビヤーチュノワ？それともシェスチナ？」

「…………」

悠の質問には答えない

だが答えるでもらう必要はない

「違うよこの子……私は違う所の生まれ。しかもESP能力者じゃない……でも後天的に能力を得てるみたい、ヴォーダン・オージエ？……能力は「もういい悠……無理してみなくていい」……うん、ありがとう」

いつからか泣いていて今にも倒れそうな悠をおんぶする

「ありがとうねレイちゃん」

「ああ、あとは任せる」

そつこつてボーデヴィッシュと向き合つ

「い、今はなんだ……なぜ貴様たちがそれを知つてゐる……！」

最初何が起つたかわからず驚いていたが気持ちを切り替えたのかさつきまで睨んできていた状態に戻つた

「だから言つただろ？ 違つところの生まれつて…… 悠は……この子は人工子宮で生まれた子だ、君と同じで……でも君はこの子の兄弟じゃないみたいだな」

「なぜわかったのだ！ そしてなぜ知つているんだ！ 機密事項なのだぞ！」

「…………」いつも機密事項だから言えない……じゃダメか？

「ふざけでこるのかー！」

そうこつて銃を出してくる
一瞬で血の気が引いたよー

「なんでもの出しあがるーあぶねーじゃねーかー

「黙れー私の質問に答えないと撃つぞー」

撃つといわれたら答えるしかないな・・・うん
良いよな？悠

背中にいる悠が「クンと頭を下げて答える

「わかった！ 答えるからその銃を下げるくれー！ そんなものあつたんじゃない
じゃ離せない、悠をおんぶしながら逃げやしないって」

しばらくたつた後に銃を下げてくれた
まあ握ったまんまだが……

「ありがとう。聞いた話……と言つか俺自身にあつたことじゃない
しかばん詳しきは知らないが簡単に言つと昔ロシアに研究施設があつ
たんだ、そこで事故があつて爆発が起きたんだ。そしてそこで研究
していたのは人工ESP発現体、そして悠はその実験で生まれた子」
生まれた…と言つより作られた…悠達はそのことが嫌だ…と呟つ
ていたが、俺は巧と悠に助けてこられたからどんな理由があれいて
くれること自体がうれしい

「ESP？超能力のことか？」

「そうだな、リーディングとプロジェクトショントてわかるか？ 悠は
リーディングの能力があるんだ
簡単に言つと他者の思考をイメージとして、感情を色として読み取
るESP能力の一種だ。」

このイメージを受け取つたのを色をESP能力者が翻訳して言葉に
している、そしてそれはESP能力者の経験に大きく依存する
つまりさまざまな色を見て経験することにより、より他者の感情を

読めるとこ「」

巧はプロジェクト能力で、自分の思考を「イメージ」として他の思考に投影するESP能力の一種を持っている

本来ならば2つの能力を持つた1人が必要だったらしいが双子で生まれてきて能力も別々になつたらしい

そして爆発の起きた施設から逃げて悠たちは日本にきて孤児院に捨てられた
そこで俺にあつた

あの時殺されると思ったの巧のプロジェクト能力で俺に死ぬと
いうイメージを送つてきていたかららしい

今ではクラスメイトをオタクにする程度の力になつてゐるが……

ちなみに巧にはデメリットがないが悠にはある
相手の感情を読む、ということは自分に向けられてゐるすべての感情を見てしまうこともある

悠は容姿が良いだけに女子からよく思われていい時もあつた
だからそのせいで倒れたこともあつた

今回もボーデヴィッヒのことを見てぎりぎり堪え切れだぐらいなの
だろう、疲れるぐらいで済んでよかつたと思う
だから「見るのは兄弟を探すためか俺と巧、本当に信じてもいい相
手以外に使うな」と言つた
ON/OFFの切り替えのために訓練をしたこともあつた

「それでボーデヴィッヒの事を言葉で操りながらリーディングをして知つた……と言つわけさ」

「なぜわかつたのかはわかつた……しかしながら確認をしにきた？」

「……俺約束したんだ。悠には兄貴がいてな、そいつと悠に『家族が見つかんないならなら手伝つてやる』ってな……」

実際の家族ではないが研究施設には悠達と同じ子がたくさんいたらしい

結構仲良くもしていたらしく途中まで一緒にいたのだが当時は子供……いなくなつていつた子も多く、日本に来るときには巧と悠だけだつたらしい

巧に半殺しにされてからは一緒に遊ぶ（一方的に俺が遊ぼうと追いかけてた）ようになり

そして事情：能力を話してくれた日に、公園で3人でいたら俺の親が迎えに来たとき2人が寂しい顔をしていた

それを見た俺は「探せばいい」つて「寂しいなら探せばいい」つて「家族が見つかんないならなら手伝つてやる、約束だ」と言つて約束した

「昔はこいつも銀髪でな、施設のほかの子も銀髪つて聞いてたから歳の近い銀髪を見ると確認したくなつちまうんだよ」

「・・・・・・・・

無言で銃をしまった

やつと生きた心地がするぜ

「私のことを口外しなければ危害は加えない」

そつこつて校舎の方へと止める前に行つてしまつた

「ふう……終わつたな」

「残念、終わつてないんだ」

肩から悠が話していく

話しているうちに体力が回復してきたみたいだ

「千冬先生、いるんでしょ？」

木の陰から午前と同じ格好のジャージ姿で現れる
気づかなかつた

「気づいていたのか……」

「さつきの話聞いてたでしょ？私の能力で見えたの、午前の授業が
終わつたあとからずっとレイちゃんのこと見張つてましたよね？」

「うわ……俺のせいですか……でも知つて話しても良いつことは聞かせ
たつてことだよな

「聞いてどうでしたか？私のこと軽蔑しますか？」

なんといわれても大丈夫なように震えている悠のことをやさしく抱
え直してやる

「何を言つてゐる、お前たちは私の生徒だ。そして私は教師だ」

「それって卒業した、ひびつなもんでしょう。」

「むう……余計なことと言つた零時。」

怒られてしまつた
まあ当然か

「アハハ、でも先生の気持ちわかりました。ありがとうございます」

「ふん、と書いてそのままを向いてしまつ千冬さん

「ちなんにもう授業は始まつているぞ」

急にじつじを向くと鬼教官がいましたw

「つをー・マジだー！」

「お前は相沢妹を保健室に連れて行つてから授業に行け、私は相沢妹のことをクラスに伝えてから行く」

そういうて校舎の入り口で道が違うので分かれようとしたとき

「千冬先生ー！」

背中にいた悠が千冬さんを呼ぶ

「私の」と……悠つて呼んでください

「じゅあな、悠」

そうじって校舎へと入って行ってしまった

「よかつたな？」

「うふー！これも全部レイちゃんのおかげだね

そのまま机嫌の悠を保健室に届け次の授業へと向かつと

「遅いぞ安部！」

再降臨！鬼教官ちひるちゃん！

バシーン！！

「指導あつがといひました

「ムハーハーハーハーハー…やつてきました男メンバーだけ…ずっと一夏ハーレムズに囮まれてやつと解放された！男同士で話したいことが話せなかつた！しかし部屋に帰つてきた今なら大丈夫…さあはなそうではないか！」

ちよつとテンションがおかしい俺

「あ、あれ？だいぶテンションが違つね？」

午前のテンションとの違いに違和感を感じているトコノワ

「今日が珍しかつただけだよ、いつもは『』のちよつと落ち着いた感じ。つていうか一夏ハーレムズつてなんだ」

「なあ『』……君はなり今日一田一夏と過『』しただけでわかつたのではないか？」

「あ、あはは……つふ、ちよつと同情したよ」

苦笑い全開のデュノワ

「それと僕のことはシャルルでいいよ」

「ああそういうやうやんとあこせつしてなかつたな、すまんな俺は安部 零時、零時つて呼んでくれ」

「つふ、ちよつとねべくね零時」

握手をしながら笑顔で言われる……こいつ……男の娘？！

「お前とことん女顔だな、もしかして女顔だからエスカレート？」
「そんなこと言つたら俺と零時だって女顔つてことになるんじゃないか？」

「（ ・・・ ）ナンダトー？ 平均の俺が女顔だと…」

「こんな時だけ平均に誇り持つなよー。」

俺と一夏がギヤー、ギヤー言つていると

「クスクス、2人とも面白いね」

なんて言われてしまつた

「まあいい、とりあえずこの2人部屋で3人でクラスことになつた……ベットは2つ！ ローテかじやんけんか……ちなみに今回負けたやつ布団も持つて来いよ」「み

「負けつて言つてる時点でじゅんけんは決定なんだ……」

シャルルくん……そこには気にしたらダメだ

「よし！ オーケー！」

「僕もいつでもいいよ」

「ニベアー。」

「ジヤー。」

「けんー。」

「ポンー。」

「へつー」「ぐー

「布団持つて来いよな零時」ぱー

「じめんね零時」ぱー

俺が行けばいいんだろー!行けば!

布団を取りに行く途中

今日話した銀髪の少女ボーデヴィッシュを見つけた

「よつボーデヴィッシュ、ちやんとルームメイトと仲良くしてるか?」

食堂の方から来たから夕飯を食つてきたところなのかも知れない

「また貴様か……貴様には関係ない

それでも毎夕食までには制服から私服になるんだがな

「貴様じゃなくて、安部 零時、零時でいいぞ。それと関係ないって言われても今日のこと話をした相手だ、気にならないわけがないだろ?」

「……いない

「ん? いない? 何が?」

聞こえなかつた、ではなく意味が分からなかつたんだからそんな怖い顔で睨むなよ

「……ルームメイトはいない」

それでも素直に答えてくれる、意外にいい子？

「いなかの？…………お前男と同棲？ついつか男がルームメイトで大丈夫か？」

「軍の同棲など珍しくもない」

軍？あああ、ボーデヴィイッヒも専用機持ちつてことは國家、企業に属してつてあれか

「軍か…まあいいや、それで俺たち今2人部屋を3人で使うことになつてんだ、もしよかつたらそつちに移つちやダメか？」

「好きにしろ」

「よしーじゃあまずは千冬さんのところからだなー！」

ボーデヴィイッヒの腕をつかんで千冬さんのところまでダッシュ行く途中みんなから変な目で見られていたが気にしない
大方俺には叩かれそうになつた子を助けた、英雄！ヒーロー！って感じか
ボーデヴィイッヒには叩こうとしたことでの、いやな奴つて感じで見られてる

「お前あんな」^ルかるからみんなから嫌われてるや〜。」

走りながら聞くと

「ふんー。」

鼻で言われた? !

まあ走りてもかやさんといふてへぬあたり根ねやれこやつかもな

千々さん(寮長室)の部屋

「ハハハ

わやことハシクはしまじょひー。

「誰だ」

「あつしド』んす姉御」

あつー今部屋からため息が聞こえてきた
あつと今額に手を当ててやれやれって絶対やつてゐるー。

「入れ……」

「ハハハー。」

了解が出たのでドアを開けて入る

「失礼します教官」

「ボーデヴィッヒもいるのか、何の用だ」

「ちつー寝巻じやないか……つと睨まれてる

「実はボーデヴィッヒの部屋にルームメイトがいなって聞いたんで3人の部屋の俺たちの一人をそつちに移れないか許可をもらいにきました！」

またため息つかれた

「本人がいるということはボーデヴィッヒには確認できているのだろひ……零時、お前ならば許す

許可キタ （。 。 ） ！ ！

「つてなんで俺だけ？」

「悠の誘惑を我慢するだけの理性があるから」

実際に納得です！

「悠には自分で言えよ、私は許可しただけだ、私に被害の内容に頼むぞ？」

「イエスマム！んじや荷物運ぶから手伝ってくれよボーデヴィッヒ

「いやいち聞くな、それとラウラと呼べ」

「おーけー、じやあ行くぞラウラ

またラウカの手を掴んでダッシュ

2人で部屋を出していく

出て行った部屋に残る千冬さんが

「あのボーテヴィッヒがあんな風になるとはな

なんて言つてるとは知らない

そして部屋に行つて事件は起きた

バチーン！

「私は認めない！貴様があの人の弟なんて私は認めない！」

一夏を叩いた後、俺が渡した俺の荷物を持ってせつと行つて

「何をしている零時！行くぞ！」

「おー、おー！一夏、また明日説明するから、また明日なー！」

「ラウラはまだのベッドがいい?」

2人で運んだ荷物はとりあえず置いといて部屋の取り決めについて話す

「どうでもいい

「なら俺が出口に近い方にわざわざひつよ

置いておいた荷物をベッドに乗せて整理を始める

「ラウラはゲームってやつた「なぜ聞かない」……聞くつてやつた
一夏をぶつたことか?聞いたら教えてくれるのか?」

無言で何も言わないラウラ

「それに俺、弟みたいな一夏をぶつたれたんだから怒ってるんだからな」

「弟……なぜアイツの事をそんな風に言つんだ、アイツは教官の…」

「なあラウラ……お前さつき認めないつて言つてただの?どうして
か少しでいいから教えてくれないか?あの一夏だし……ぶつたお前
にも一理あるかもしねりだろ?」

そのあと少しずつだがラウラ自身の事、千冬さんに指導してもう二
今の地位を手に入れたこと

一夏がつかまつて千冬さんの経験に傷がこじ
ゆつくりとそして強く話してくれた

「やうか……正直に言つと俺は千冬さんと間違つてこると思わない
し、一夏が悪いとも思わない」

グワッ！と襟元を掴まれ壁に押し付けられる
そんな体のどこにそんな力があるんだよ

「なぜだ！なぜなんだ！織斑一夏のせいでの教官が！」

「違う。お前が理解できていないんだよラウフ」

ガン！ともづ一度壁に押し付けられる

「何を理解していなといいうのだ！私は『お前家族つてもんがわかつてないんだよ』家族……だと」

「そり、家族だ。家族つてすゞいんだぞ？助け合つて生きてるんだ。
別にラウラに今すぐわかれつてことじやないんだよ、ただわかつて
ほしい、誰も悪くないあえて言つなら一夏を捕まえたやつってどこ
かな」

「私にはわからない、織斑一夏が捕まらなければよかつたのだ」

「おいおい一般人にそんなこと無理だろ？それは軍に育てられた
こそできるかもしれないことだ。できるわけないぞ。でも一夏が悪
くないわけでもないし、ましてや千冬さんだって悪いかもしない」

「なんだと……」

ガン！またやられた……痛い

「だつてそりゃだろ？EUEの王者だぜ？世界一位だぞ？各國がどんな手段でも欲しいもんだろ？だから一夏が狙われる可能性も考えられただよ」

「ならば生まれてこなければよかつたのだ！」

バチーン！

「黙れ！！！！お前がそれを言うのか！！普通に生まれてきたくてもできなかつた奴がいるんだぞ！！！なんでお前がそんなこと言えるんだよ！！！」

ついカツとなつてぶつてしまつた

手のひらが痛い……だから暴力つて嫌なんだ

相手も自分も痛いんだから

「お前がそんなこと言つたら……悠達の存在が否定されてるよつて思えるんだよ……。頭冷やしてくる……先寝ていいだ」

そうこうでラウラの手を放して部屋を出していく

俺は知らない

「安部 零時を調べてくれ」と「ラウラが言つていろ」とを…

寮の外

「はあ～……やつひまつた」

「門限は過去世こるのだがな」

ぶつた手を見つめため息をつこうると千鶴さんがやつてきた

「 もうそんな時間だつたんですね、返づけさせました。うわ！飯
食つ忘れだ、といつことで戻ります」

寮に戻るのとあると

「待て」

首根っこを持たれてグエッ！となる

「 アイジがああなつたのは私の責任でもある」

アイジとせわひとうわのじとなんだらうな

「 もうですね、千鶴さんが甘やかしたせいですね。でもああなつた
のせうわのせいだしつかけが千鶴さんでも結局はうわ自身のせ
いかと思こまくよ。」

「やつが……アイツ」と面倒見てやつてくれ

「さつきあなたの弟ぶたれてましたが？」

「それでもだ、それに一夏ことではいい機会だらつ」

今一瞬ぶたれたつて聞いてムカツつてなつていたのを見逃さない

「ラウラを超えるべき壁にあるつひとですか？」

「お互いの壁……だらつな。だからお前に頼む、年上なんだろ
う？」

(――)「やつと僵つてくるが」んな時だけ年上扱いしないでほ
しい
クラスでも年上扱いで先輩と言つてくるがアレはけじめっぽいもの
で遠慮はしていいから助かる

「まったく……手のかかる弟を持つと大変ですね」

「やうだな……」

そのあとじぎゅうして部屋に戻つて行つた

「つを一起きてたのか?!」

「……」

部屋の扉を開けて田の前のところに立っていたラウラがいた

「聞きたいことがある」

「わざわざ明日ではなく今日なんだりつか？」

「どうして織斑一夏や相沢悠は家族ではないのに助ける」

「家族のような仲間だから。悠に至っては家族同然だな」

即答一だつてなんとなく聞かれそうだなーとは思った
だつて巧にも聞かれたことがあるのだから、ラウラは前の巧に似す
ぎてる

「むしろ血は繋がっていないくとも家族になれると思つてこる。じゅ
なきや悠達のことも手伝つてないかもな」

「わづか」

やつこつてベッドに入ってしまった

それだけか……あー悠に連絡すんの忘れた……明日でいいか

「なあ篠……もつ悠は怒らせないよ！」しないとな

「あ、あああの状態になられては私も手が負えないな」

「むしろHな展開していくも怖氣そうな気がいたしますわ」

「あの人は零時の彼女さんなのかな・・・？」

「おいそこ」の4人！怖がってないで助けろ！もとい助けて！

「なんで言わなかつたのか聞いてるんだよレイちゃん……しかもラウラちゃんど！！！！しかも好感度上がつてるし！何があつたか話してみなよ！――！」

「ひい――！」

昨日言わなかつたせいで笑顔で怒つてくる悠
しかもたまに「聞いてんのか？ええ！――！」反省してんかつて聞いてんだよ！――！」

みたいにケンカ腰でくる、いつもの悠じやなくて余計怖かつた

そして千鶴さんが来るまで教室で正座させられていた

ちなみに朝のHな過ぎて一時間田が30分過ぎたぐらいで入ってきた

足が痛い……そしてクラスには暗黙の了解として安部零時と行動するときは相沢悠に連絡取るべし！といつのができたらいい

放課後、アリーナ

いつものメンバー + シャルルで訓練に来ていた
悠は楯無のことを手伝つといって2人は今日来ない

「なあ零時……昨日のアレ結局どうことだつたんだ？」

「昨日の事つて何よ一夏、零時のこと？」

「昨日つて言いますと零時さんの同室事件以外になにがありました
でしょうか？」

おい鈴とセシリア～お前ら言いたい放題だな！

「お前工IS展開中に聞くなよ……アレはお前が聞いた言葉そのまん
まの意味だよ……かつてにラウラから勝手に聞いたが一夏…お前自
身が一番よくわかつてるだろ？」

「まあ……な」

その時のことを思ひ出しつづるのか落ち込む一夏

「だから強くなるため」「いつやって訓練してんだろ?それに俺と違つてお前は優秀だからな、田に見えて強くなってるのがわかるよ、さすが千冬さんの弟だな」

「そうだな……千冬姉の名誉のためにも頑張るよ、それに零時のために……零兄のために」「……」

一夏に零兄と言われたのはうれしい、昨日カラカラに書いた“血は繋がつていなくとも家族になれる”を一夏が証明してくれた気がする
「何言つてんだ弟の癖に……しかし出来のこに弟つて書つのも悔しいな」

「やうか? イソヒトしたら強くなつてゐ氣がしないからこまこいちなんだけどな……」

「「それよりも昨日のアレとは何よー。」」

「元気がいいな鈴とセシリアは……ちなみに篝は今打鉄を取つてきて
いるところだ
とちょうど来たな

「遅れた、何の話だ?」

「昨日実はボーデヴィッシュさんが零時の荷物を運ぶのを手伝いに來たとき一夏のことをぶつたんだよ~」

あ・・・・・・一夏ハーレムの前でそれ言つたら

「「「もつと詳しへ……」「」」

『シャルルあとはよろしく、一夏説明はシャルルに任せて訓練始めよう』

個人間秘匿通信で一夏へと通信する

『ホーリー』

そういうアリーナのスペースの空いているところに移動する

「さつき強くなつてゐるかわからないつて言つたよな？俺と一対一やらないか？」

「そういうや零時と一対一でやつたことないな、むしろ一対一自体しないか」

実はみんなで訓練するものだからいつもペアでやるから一対一自体やらないのだ

「うまいとでも思つかへ？」

「もちろんだ！本気で行くぞ！」

やる気満々の一夏

「なら電波攻撃も遠慮なくさせてもらひからな、時間経てば俺に制御とられんぞ？」

二二二(一)

「それは零時が生き残れればの話だろー。」

雪片式型を開いた一夏が切りかからうと迫つてくる

対して俺は悠と試行錯誤し、楯無によつて試されたスタイルでいく

「つて盾?!」

一夏のびっくりする声が聞こえる
まあ普通に盾だけならいいのだが

「アイギスとタケミのことを考えれば完全防御型の両方盾装備の方がアイギスにはあつてるんだよ」

タケミは例の“”とくたまに復活してまた反応がなくなる状態のままだ
盾があつても攻撃をやめるつもりはないじくそのまま切りかかつてくる

それを右盾でガードして左盾で一夏を押し返してから距離をとる

「逃がすか!」

そういうつて一夏が近づいてくる
スペックからつて違うのだから簡単に距離はつまる
しかも幕に鍛えられたせいか剣筋がよくなつている
それも盾で不正でバックする

「また逃げんのかー?ぐそつー。」

「へつへつへー！バカ正直に相手する必要ないんだな、ほれあと半分
んで侵入できちまうぞ」

やけになつた一夏が何回も斬りかかつてくる

八
キ
!

「ちょ！ 盾壊しやがつたな！」

転りかがりはより扇は力きなヒビが入る
その隙を見逃さないそうにさらにスピードを上げてくる

アエイケ交じりで斬りかかるてぐるものだから雇て防げない時がある、唯一の救いは零落白夜で斬りかかってきていないこと

まるでボクシングでタコ殴りされてる状態だ
防ぐことに夢中で電波攻撃ができるいない

結局そのまま負けてしまつた

「はあ……負けたし」

『やつと終わつて試合をやつているから待つて見れば……はあ……

お久しぶりにタケミが展開し姿を現す

「お前えええ！久しぶりに出てきたかと思ったら！俺だつて頑

張ったのに一だらしないつてひどくないか！？

『実際一夏の成長は著しいものです、さすがは織斑家つことなのでしょう。しかし私がだらしないといったのは一夏に負けたことではありません、私は前に言いました、あなたは強くなると……実際アイギスにあつたスタイルを考えるところまでではあります』

なら盾での防戦一方の戦い方が間違っていたのだろうか？

「違つちやん」

振り返ると打鉄・改を展開している悠が後ろにいた

「アレ？生徒会の手伝いはビビついたんだ？」

「タケミ呼ばれて来たの」

ちょっと不機嫌そうと言つ、いったいなんて言つてよんだんだ？

うわ…やるなタケミ

楯無にも怒られそうだな

「話戻すけどさつとアイギスの防戦一方の戦い方はアイギスにあつてると想つよ」

「じゃなんで俺はあきれられたんだよ？間違つてないんだろ？」

“アイギスには”だよそこに展開するレイちゃんが使うことが入つていらないんだよ。周りのみんながISのスタイル＝乗り手の特性つてなつてたから気づかなかつたんですよ

『悠はわかつっていたのですね』

なぬ！ならなぜ教えてくれなかつた？！

「アイギスの特性を生かした戦い方を覚えるのも必要だつたし、何よりレイちゃん自身に気づいてほしかつたの」

な、なるほど……

悠にいつも甘えていたのがよくわかつたよ

「それで……どうして私のことを呼んだの？」

『取り込んだISの教育が終わつたのでその相手をしてもらいたいのです、今なら半分ぐらいいエネルギーを削れると思ひますよ』

「へえ～、いいよ」

そのあとタケミのそばにISが展開していた

「つーこれはー

「チハルミナー！トル！良いね！良いよ！タケミナイス！かつこいい
よー！」

「なんだおかしくないか？だつて俺あの黒いIS取り込んだんだぞ？

「なあなんで姿形変わつてんだ？タケミが変えたのか？」

『そうです、アイギスの膨大な拡張領域で変換したのです。変換してこの間にこの子に知識と経験をさせついたのです』

ふむ……わからん

『とつあえずその子の名前を』

「そりゃあ見た田でもちゅるルミナートルじゃんか、短くしてチュルミナってことだな」

『了解しました、では終にあとまあせします。指示を出せば従うので頼みます』

「わかったわよ、ついておいで」

そういって悠とチュルミナがアリーナの窓に向かって行った

「また増えたんだな、あのチュルミナのここもエイツてのがあるのか?つか見るからに零時よりはつよそ「あああ?なんだよ一夏ああ?文句あんのか?」イエナード

まあ……本当の事なんだが……

『ありますよ、おそらく不明EISの時点で積んであったのでしょうか。それを私が改造して今はあの黒いEISであつてそういうEISとか言えませんね。それより一夏は零時の強さをどう想いますか?正直に言つて構いません』

一夏が「いつをひりつて何度も見てくる

「……言つて構わない」

「じゃあ言つけど、いつものメンバーではやっぱ一番弱いかな…でも弱いって感じたことないんだよ…むしろ訓練機の筹建の方が戦つて弱いって思うかな、これは筹建だけじゃなくてみんなにもかな? 実際勝ち負けで言えば弱いんだけど戦つてみると強いんだよ、みんなに負けてるのに。でも今回は…そりま思はなかつたかも」

そんなに負けてるとか弱いとか言わなくてもいいじゃないか…俺泣いちゃうぞ（ノヽシクシク

『どうしてかわかりますか? これは博士が私を作ったのかにも繋がりますよ』

タケミを作った理由?

だって俺は強くないし……あれ? 勝つたことないんじゃね?

いやきっと数回あるつて……

「あああ…俺わかったかも! 束さん意外と零時のこと過保護なんだな」

「ちょー一夏わかっちゃつた?!

「マジか…俺わかんねー」

「なら俺が教えてやるよ、零時つて基本平均的になんだつてできるだろ? それつてEISでも同じで平均的になんだつてできてたんだよ、でもそれが防戦一方の戦いになつて全部そつなくこなしてたのが一つだけに絞つたから今回は強いつて思わなかつたのかも」

『正解です一夏』

結局俺も平均能力のせいなのね

『零時にまじれからは”圧倒しているのに勝てない相手”を目指してもらいます』

「つまり嫌な奴を目指せと？」

「相手の弱点を絶対持つているって考えうよ、自分の事そんな風に言つなよ」

それもこれもお前らがさつきから弱いとか負けるとか言つかりだよー。
『とりあえず明日から始めます』

そうして今日はそれで解散

ちなみに悠はチャルミに普通に勝つた、エネルギーは半分は減つていなかつた

部屋

ちゃんとラウラの部屋の方ですよ、一夏の部屋に行つたとか間違えてなんていないんだから！

「よつツラ、もう飯行つたか？」

部屋に入つてすぐ、「部屋にもともとあつたディスプレイパソコンの前に座つていたラウラを見て声をかける

「レーショնを食べるから行く必要はない」

「それは非常食にしどけ、それに俺は部屋で飯を食つ」とは許可しないぞ。ほれ、行くぞ！」

ラウラの首根っこを掴んで学食まで連行していく
そして学食の前には

「やつと来た！零時！あなたタケミの持ち主でしょー・しつかり管理してよー・今日は仕事大変だつたんだからー！」

疲労と書いてある扇子を持つて俺に近づいて問い合わせてくる樋無

「ラウラだあー、一緒に飯食べるよな？」

ラウラに近寄つて微笑みをかける悠

悠は俺の事助ける氣ないな
しかし問題だぞ悠！

「そのだな櫛無……当たつているんだが……その胸が…」

正直に言おつ……今まで抱きついたりされたがそれはつぶれる（何
がとは言わないでおこう）ほど強く
抱きつかれてきた、腕に当たつていた時もそつだつた……しかし！
今回はソフトタッチ！ソフトなのだ！そして真正面んから！おそらく
く本人も気づかずに触れていたのだろう。その証拠に急いで離れボ
ツ！っと音が聞こえそうなほど赤くなつた櫛無
恐るべしソフト……恐るべしソフト……

「キッ！」

恐るべし悠の目力……そして俺のせいではない
おかげで俺の興奮が冷めてしまつたではないか！

「何？たまつてんの？」

直球で聞くな直球で！

仕方ないだろ？女の子と一緒に部屋なんだから

「ふうん、襲つたらつぶすよ」

うん……氣のせいじゃないこここの温度が1～2度下がつた
そしてレイプ田やめて！（（（（；。）））ガクガクブルブル
はいそれとそこで、ピンク髪で「コッキーは私が守る」って言つて
の恍惚のヤンデレポーズを取らなにように！

(え？原作？主は第三話まで放送してた時に第一話を見てすぐに買
いに行きましたよ？もちろんちゃんと読みましたよ？それを見て悠
をああしたら「レイちゃんは私だけ見てればいいの…」とか言い出
して樋無とか学園そのものにケンカを売る子になりそうでした(笑)

話を戻そうw

「それとも私がs y「お願いそれ以上言わないでください、俺が謝
るから許してください悠さん」わかったよ……でもどうしても我慢
できなかつたら私がs y「いいです」もつ……遠慮しなくたつて「
してない良いから銀行こうぜ」はい

樋無がまだ赤くなつて停止しているが気にしない

「話が読めないが……それも悠の力のせいなのか？」

食券を買つて定食のところに並んで待つていうとラウラが聞いてきた

「せこつて言つてまあそつだな

「お前は見られて怖くはないのか？なぜあの時のように疲れていな
いのだ？」

なんといつぺんに聞くなよ

「えつと…俺は別によくないが良いぞ。夜のことを見られて次の日
それの感想を言われた時は泣いたがな

夜?といながら頭に浮かぶマークを浮かべるリカ

「アレは仕方ないじゃん。あとアレはレイちゃん以外だつたからだよ、私レイちゃん以外はあんまり見ないの……怖いから見れないんだ」

笑つてはいるが明らかにひきつっているような苦笑いだ

「やうこりものなのかな?」

「やうこりもんだ、やへと食つぞ~」

「一夏と零時は今日もこれから特訓するんだよね?」

放課後になり教室を出るとシャルルが訪ねてくる

「ああ、もちろんだ」

「日々の日課が大事だからな、というか今日は筹以外の一夏ハーレムがないな……つとそれより俺先行ってるな、少しでも長く特訓して一夏をボツコボコに倒すためにw」

「本人の前で言つなよ?！」

そういうて第三アリーナへと駆けていく

後ろからシャルルが「タケミつて?」と聞いているが気にしない、昨日見ていたみたいだが名前と姿が一致していないのかも知れないし、そこらへんは一夏に任せよう

アリーナに入り更衣室で着替えて外へ出ると

鈴とセシリア、そしてラウラの3人がすでにいた

そしてその3人は模擬戦をしていた

2対1の模擬戦を……そして途中から来た俺にもわかる……2の方の鈴とセシリアが負けていることに

でも2人は山田先生の時の連携不足で負けているわけじゃない

純粹にラウラは強い

何より鈴の攻撃がいとも簡単に防がれている

エネルギー・シールド？違う、あれは確かAICだ

束さんに教えてもらつといつよかつた

でもAICならば鈴と相性が悪いのもわかる

つてことを思つてゐるうちに至近距離でセシリ亞がミサイルを撃つて2人がこつちに離脱してきた

IIS同士の戦闘なので俺もアイギスを展開しておく

『しばらく見ていましょう、ラウラのIISの情報取りをしまじょう』

個人間秘匿通信でタケミが連絡を入れてきた

なんか仲間を売るみたいな行為で嫌だがIIS相手なら常識だろ?な

とりあえず

「ラウラ強いな~」

つてポロッて口から出ると

「「アンタどっちの味方よ(アナタどちらの味方なんですか)!!」

と、2人から怒られてしまつた
しかもかなりご立腹だ……

セシリ亞が撃つたミサイルでできた煙が晴れてくる

「「この程度か?どけ零時、邪魔だ」

模擬戦をしていたのだから今邪魔なのは俺だろう

なので素直に退く

しかし退いたのはまずかったのかもしれない……それに気づいたのは後になつてだが……

俺が退いた瞬間

瞬間加速で移動して鈴にを蹴り飛ばし、セシリアには砲撃をくらわした

そのよろけた瞬間にラウラのヒラから伸びたワイヤーで首を絞められてしまう

「あ、おいーちょっとやつすぎだぞー。」

そんな俺の止める声が届かないのか首を絞めている状態で暴行を開始する

アレはヤバイ！ HSが消えたら命に係わる！

「手伝えタケミ・チヨルミー。」

2人を展開させ2人の前に巻きついているワイヤーを斬ろうとカーボンブレードを展開して斬りかかるとすると

「何のつもりだ」

そう言いながらAHCで俺の腕を止めてくれる

「やりすぎだ！ 悪いが強制的に割り込ませてもいいつ

「ふん！ 貴様は心はできていても体がついてこない。ゆえに私には

勝てんぞ」

気持ちはできていても強くないって言いたいのか・・・むかつく

でも今の俺は勝ちに執着していない、むしろ救出目的だ

「タケミは2人を救出、チヨルミは俺とラウラをやるぞ!」

個人間秘匿通信で2人に伝える

チヨルミはタケミのよつに喋らない代わりに頭をコクンと振ったようだ

『私が手伝わなくともいいのですか?』

「バカ言え、お前いたらお前だけでラウラ倒しちまつだ!』

『さうですね……では今回結果がどうなりますか?』
その代り鈴とセシリアは責任を持つて私が守ります』

……さつきの鈴とセシリア状態になつても手は貸さないってか
まあいつか、さつきのセシリアのミサイルの音でギャラリーも増えてるし早めに倒そう

AICOで動けなくなつていた腕が動くようになる
原因はラウラの後ろから迫るタケミとチヨルミだらつ

その際ワイヤーを離して離脱するラウラ

解放された2人が地面に倒れる

ISがまだ解除されていないのでダメージを結構くらつたぐらいで済んだつてところか

『鈴、セシリ亞 IIS を解除していください、2人は退却です』

2人のもとへ着いたタケミが2人に言つ
しかし

「何言つてんのよー私はまだ戦えるわよー！」

「私もこのままでは終わらせんわー！」

と、言い張る2人

『それ以上は危険です、もしまだやるとしたら私を倒してからにしてください。IISも現状維持が精一杯です、移動すら危ないです』

「「「ううう」」

おとなしくIISを解除してタケミに掴まって移動を開始
その移動中をラウラが砲撃を当てようとする

「チュルミー！」

名前を呼んで理解したのか4丁の突撃砲を展開してラウラに弾幕を
浴びせる
しかしそれを気にしないといった感じでタケミに撃とうとするのを
射線に俺が入つて盾を割り込ませる
放たれた砲撃が当たる瞬間に盾だけ射線に残して自分は瞬間加速で
ラウラに接近する

それをワイヤーで攻撃してくる、それを避けようとはせずにただ接近

する

ワイヤーが当たる前にワイヤーの先端がチャエルミが撃つた弾に当た
り弾かれる

接近してカーボンブレードで斬りかかるつとするがAICで足止め
しかしAICで止められるとわかつてはいたので斬りかかるときは片
手で攻撃して空いた手には突撃砲を展開済しておいた、なので突撃
砲で攻撃したのだがラウラの手前で弾がAICで止められる、この
時ブレードを持っていた腕が自由になるのでおそらく腕についていた
AICをシールドのようにして止めたのだろう

そして俺の役目はこれでいい

IISは360。見渡せるがそのに障害物があればその後ろは見えない
この場合障害物は俺、そして俺には後ろにいるチャエルミが見えている
瞬間加速を使って俺を飛び越えてAICのシールドを越えてラウラ
を攻撃する
しかしそれも後ろに下がつて避けられてしまう

その時『AICの弱点は操縦者が集中していないと物体を止められ
ない』とIISにディスプレイが移り、そこにはチャエルミからの通信
メモでありそれと作戦が書いてあつた、それを見て

『「オーケー、お前に会わせる』』

と返事をして行動に移る

それと同時に装備一覧が増える
チャエルミからの武器の使用許可だ

アイギスの中にあるIIS^{チャエルミ}がアイギスの拡張領域をチャエルミ経由で入
れた武器だ

くつ！結構入つてやがる！するいじやないか！とまあ気にせずに入

識を戦闘に戻す

先ほどは俺が前で後ろに Cherni だったが逆の Cherni 、俺の順でラウラに近づく
ワイヤーは Cherni が弾き、 AIC で止められたならば
後ろにいる俺が一覧から近接武器と加速装置を展開した状態でラウラに接近する

展開した武器は

近接武器の射突（剣ではなくパイルバンカー）それと文字道理の加速装置、悠が軽装甲時に使うようなブーストだ。アレは打鉄・改そのものに対応したものだが、こつちは汎用性のあるもので俺でもすぐに対応できるものだった

さつきの Cherni と同じく最初は普通に瞬間加速を使って接近

「それはさつきと同じだな！」

とラウラに言われてしまったがそれと同時期に加速装置を発動させて一段階の加速をする

そして接近できたので射突で攻撃！しようとしたが今度は俺が AIC で動けなくなる

しかし俺に来るということは Cherni にあつた AIC が解け
俺と同じ射突＆加速装置でラウラに接近、そしてラウラに当たった射突は連射には向かないが数そのものがあれば別、射突が当たったことにより AIC が解けた俺もラウラに射突を当てる
交互に射突を 1~2 回あてたところでラウラから離れる

俺らもやつすぎたらいけないしな

「くつーなぜ止めを刺さない！」

主に腹に当たせいか腹を押さえながら言つてくる

「止めて……これはあくまで模擬戦つてことだからね、それにこれ以上やると管制室にいる千冬さんに怒られそうだし。それとお前は一夏と戦いたいんだろ？ 今俺がそんなことしたら学年別トーナメント出れないぞ？」

ムツーとした顔をするウララ、この子笑えばかわいいだろ？……それと先ほど戦っているときにタケミに『千冬が来ています、やりすぎと異常があれば介入してくるでしょう』と教えてくれたのだが、別に言わねなくてもやり過ぎなかつたんだから！

『「ふん！ ボーテヴィッシュも今日はそれくらいにしておけ。凰とオルゴットは保健室に行くな！」』

以上！ と言つてアリーナの放送が切れた
鈴たちが「えええ～」って言つてるがさつきのは見ていて正直心臓に悪かった

「わーと……ウララーお前部屋に帰つたらお仕置まだかんなー理由はどりあれアレはやりすきだ！」

俺がラウラお仕置き宣言をした後ラウラはアリーナから出ていきそれと入れ替わりにいつものメンバーがやつてきたので、鈴とセシリ亞を女子メンバーに任せた

「俺らも一緒に行った方がよかつたんじゃないか？」

つて一夏が言うが

「でも外傷なしの内出血止まりだらうが……なら俺ら男がいない方がいいだろ」

まあISあつたし本人はすぐに元気になるだらうが……トーナメントにはIS直んじゃないかもしねないな

「そうだね、それに一夏がいると2人とも意地張つちゃうからかもだしね？」

俺に確認を求めるなシャルル……それと首をかしげて言うな、俺はお前がホントに男なのか確認したくなる時がある
母さんがシャルルがする仕草そっくりなんだよな……
なんでだ?みたいな顔するな一夏……2人がかわいそうになつてくれるじゃないか……

「そ、それよりも零時、アイギスとタケミ、チエルミの事教えてよ」

アイギスは良いとしてタケミたちの事一夏から聞かなかつたのかな?

「いいぞ、それともお前のリヴァイヴにてデータ送つとして『ダメです』出たな！俺をいじめる元凶め！」

いつものメンバーが集まつた際に待機状態になつたタケミとチヨルミがまた出でてくる

『今はまだ詳しく述べませんが、アイギスは電子戦特化のエリートだけ言えます。あとは僕自分で探つてください、そのための入学なのでしょう？』

何やらトゲのある言い方をするタケミ

『こずれはわかりますがまだ世界にアイギスの能力を知られるわけにはいかないです。せめてもう少し零時には強くなつてもらいたいのです、ですので今は……今の”貴女”には教えることができません。』

話の途中から顔が青ざめていくシャルル

『安心してください、零時は知れません。そして零時ならば受け止めてくれます、むしろ解決しようとしたままでするでしょう』

解決？何が何だかわからないがタケミが褒めてくれて居る気がする…

『では今日も訓練を始めましょう。今日はトーナメントの対策として考えられる2対2の訓練をしましょう』

「2対2かあ……俺誰と組もう？一夏とシャルルで組むだろ？ん~ラウラに頼もうかな？」

「お前わざわざあんな戦いした奴の味方になるのかよ」

一夏がムスッ…とした顔で叫びが

「アリスがお前ラウラに勝てんのか？まあ俺もチエルミいたから
あそこまで追い詰めることできたけど」

「それは……でもそれは関係ないだろ？」

「アリスがお前ラウラに勝てんのか？まあ俺もチエルミいたから
あそこまで追い詰めることできたけど」

「ふふふ、良いじゃない一夏。僕たちの兄貴分がほつとけないんだ
つてさ」

シャルルにも言わたのが効いたのか

「わかつたよ……」

『では始めましょつか』

「飯行ハラハラ」ハラハラ

「一人で行け」

アリーナから戻つて部屋に入つてすぐ「飯に誘つと冷たくあしゃらわ
れた

「……飯行ハラハラ」

ベットに座つていたラウラの手を握つて立たせようとする

「やめろ……」

手を振つて離された勢いでバチーンと顔を叩かれてしまつ

「イテ……」

「す……まん……」

叩かれた左の頬を押さえて「こ」と聞こえるか聞こえないかの声で謝
つてくる

「許せんー」と言つて飯行ハラハラ

再度手を握つて連れて行こうとする

今度は振りほどかない代わりにすこい力で立とうとしてくれない

「なぜお前は私に構うのだ……」

「あ、なんでだろうな？ほつとけないからじやないか？まあ飯行こ
うぜ、あー、その前に」

ポケットに入れたあるものを取り出す

「コレ書いてくれよ」

それはトーナメント申込みの紙ですでに俺の名前は書いてある
今日アリーナを出るときに一年の女子の波がやってきてに組んでく
れ！とお願いされたが、一夏はシャルルと組むと言い

「クラスの女子にはもうラウカウと組むって言つやけりゃったから組んで
くれるとうれしいだが……どうだ？」

俺はラウカウと組むと言つた

おとなしく引いて行つた女子に疑問だったが、「もし組めたとしても
悠お姉様に勝てるわけもないかあ」と聞こえたのは気にしたら負け
だと思つてゐる……

「ふんー良じだらう。その代りお仕置きはなしにしき」

「おー良じぞ、んじゃとりあえず飯行こうぜ」

今度は大人しくついてきてくれるよつて一緒に飯を食つた

「一夏～、今日からラウラを一緒に入れていいか？」

「俺叩かれるの嫌だし……それに鈴とセシリアがいるんだぞ?」

鈴たちはHのダメージレベルがBマイナスで体にも異常はなく昨日一日安静にしていれば良かつたと聞いた

「ラウラこは言つたことを謝らせる、あとは鈴たち次第だ」

「まあ良いけど……じゃあ俺も簪呼んで来ようかな」

簪?ああ櫛無の妹か

「あの子のヒハはどうなつてんだ?」

「白式の稼働データと整備課の2年生とかに手伝つてもうつて形になつてきてるかな、いい機会だし戦つてみるものありかもな」

ほつほつついでにその子のハートも形になつてきてるなこりゃ…この恋愛原子核め!

「白式だけだと近接データしか取れないそれ良いんじゃない?」

「そうだなーじゃあ俺簪呼んでくるー」

教室を元気よく飛び出していく一夏

「今日は大人數になりそつだね零時」

こいつの間にかシャルル + 篠 + セシリアが後ろにいた

「まあ良いじゃんか。軽く戦争が起こせそうな感じだがな。俺はラウラ誘うつむセシリア」

「何を言つている零時！-アイツは一夏を叩いたし鈴とセシリアを痛めつけたのだぞ！」

セシリアではなく篠が先に反応する

「それは謝らせる、それはラウラが悪い。でも痛めつけたってのはお前らが普段一夏にするのと変わらないだろ？」

そこので困つた顔をするな篠……と言つか自覚はあつたんだな

「それに今回は俺がたまたま近くに居てやつすぎたかもしれない行為を止めた、だから今回は悪口を言つたと謝らせる。どうだ？俺どつか間違えてるか？」

「間違つてない……」

納得してないつて顔に書いてある篠

「まあわかつていても受け入れられない」ともあるよな……難しいな

なんて説明していいかわからん……と考え込んでしまつ

「私は構いませんわよ、負けたのは私たち……勝つためにも情報は必要ですので」

練習の時 I-S のデータを盗むつてか?
と言つたか負けず嫌いなのか? 今のはてつきり鈴が言つセリフだと思つてた

「えらいぞセシリ亞ー!」

そういうて頭をなでてやる

「ふ、ふん! 私はただトーナメントでベンジしたいだけですわ」

腰に手を当ててアヤツヒツヒツヒル

「セシリ亞がそういうのなら私にもつ向も言わない」

微妙に拗ねてこいつよくな籌

セシリ亞と同じように頭をなでてやる

「サンキュー篇」

「クスクス、何だかお兄ちゃんに甘える妹たちみたいだね」

と笑いながら言つシャルル

「「シャルル!...!...」」

2人に同時に怒られてやんの
妹か……妹いたらシスコンにでもなつてたかもな

「そつそれよりボーデヴィッヒさん追わなくていいの零時? 教室か

「待つよ。」

「マジか？！」んじゅも言つてへへむー。鈴木も言つてこでくれー！後でなー

そつ言つて教室から出でラウラの後姿を追

「待つてくれラウラ～」

「なんだ。それと廊下で人の名前を大声で呼ぶな

「すまん、じゃあ一緒に特訓しようぜー！」

額に手を当てる

ちょー困った奴だ…みたいな顔もしないでよ？！

「よしー行こうートーナメントまでに連携プレイとか必要だろ？！」

「わたし」「レッツ・ゴー」おひおいー「結局行くまで俺が粘るんだから行くぞ」「まったく……」

話さうとしていたラウラの手を握り途中で連行し始める
そして俺に連れられるように後ろにラウラが居たため走つていると
きにラウラが笑っていたことを俺は知らなかつた

アリーナ

「零時ー！」

ドカッ！

「ぐへつ……」

「あんたねえ！なんでこいつ連れてくるのよーー！」

アリーナに入つた瞬間にどび蹴りをされて転がる
とび蹴りをしてきたのは鈴でラウラを指しながら言つている
しかもいつもメンバー + 更識妹もいのに止めてくれない

「聞いてんのーー！」

とか良いながらゲシゲシと転がつてゐる俺のことを蹴つてくれる

「痛い！痛いですよ鈴さん！」

うつ伏せになつて背中をゲシゲシと蹴られる

「何でか言いなさいよーー！」

「クラスメイトでルームメイトで友達なので呼びましたーー！」

言い終わつたと同時に蹴りがなくなつて

上を見ると蹴つていた鈴の足をラウラが止めていた

「昨日のことは謝る、すまなかつた」

そう言つて頭を下げるラウラ……正直驚いてる、俺も鈴もいつもの
メンバーも驚いている

「しかしそいつは私の友人なんだ……やめてやつてくれないか？」

友人……確かにラウラがそう言つてくれた
それだけでちょっとひつひつと笑みをこなして立っている俺がいる

「わ、わかったわよ」

そう言つて足を退けてくれた
退かしてくれたので立とうとするトマトのラウラに襟をつかまれて立たされてしまう

「あつがとうラウラ」

篇とセシリアみたいに頭をなでてやる

「ん

嫌ではないようすで素直になでられている

「んじゅセシリアヒ一夏にモ謝つてへるヒニヒよ

「ムツ…奴には謝らん」

そう言つて一夏を見る
撫でていた手を止めて

「まあそれはわからんでもないか……じゃあトーナメントでケリを
つかむつてこいつのせぢだ？一夏もそれでぢだ？」

2人を見て言つ

「俺はそれで構わないぞ」

「私もだ」

2人ともそれで良いと言つてくれた

「んじゃ それまで一緒にでも構わないよな？」

と、言つてみんなから「はい？」とか「え？」みたいな顔をされた

「対戦までお互い離れるってのが普通じゃないのかな？」

と樋無が言い始める

「レイちゃんの事だからお兄に洗脳されてる時があつて……多分お兄がライバル同士はお互いを高め合つものだ！って言つてたのを聞いたことがあるから多分そのせいで言つてるんじゃないかな？」

俺が巧に洗脳されてるだと？！バカな！？

くつ！これが常識だと思つてた……だつて読んだ漫画だつてそんな風だったんだぞ！――

「それだってお兄に借りたんじゃない？」

○――

せつかく立つたのに膝から崩れ落ちる

「なん……だと……」

微妙にみんなから笑われている気がする……かも

「でもでも、昨日の戦闘を一夏は見てたけどボーテヴィッシュさんは一夏の戦闘を見てないよね？だから公平のためにも一緒に特訓つて言つのもありじゃないかな？」

シャルルはそう言つてくれる

しかしこう思つと勝ちたいなら一緒に特訓なんてしたくないよなでもやつぱみんなでだろ？友達なんだから仲良くなれりゃ？

「いのなつたらもう聞くしかないよ。だってお兄に半殺しにされたつて「俺と友達にならうぜ！」って言つてきた変態なんだから」

「変態？！ちよー！悠さんアンタそんな風に思つてたんですね？！俺ちよつとショックだよーーそれにもうあんな田にはあいたくないわいー！」

「大丈夫、レイちゃんは私が「ハイ待つた！！！」……もう、そんな激しくシッ！」まないでよ」

「アウトーー今年一番のアウトーーそこまで言つと思わなかつたよ！つかお前らも顔赤くすんな！」

主に女子とシャルルが顔を赤くしていた

一夏・ラウラ・楯無はそうでもない。むしろわかっていて大丈夫なのは楯無ぐらいだ

「うー後は更謹の挨拶だな」

「あー? お姉さんも挨拶した方がいいかしら~。」

……姉が反応してしまった

「更識妹だ」

そう言って初めて会う彼女の前に立つ

「君が更識 簪?」

「…………わ、」

今聞いたときビックりしましたよ? ! 僕って怖いのか?

「よひしへ、俺は安部」「知ってる……織斑くんからいつも聞いてる
おこー夏お前なんて言つた?」

そっぽを向く一夏……覚えてるよー。

「まあいいや、更識妹のヒサツで完成しないんだろう? 今日はこのメンバーのお試しも兼ねてでデータ持つて行つていいや。みんな助け合ひができるメンバーだから言えれば助けてくれるぞ」

「国家に所属しているヒサツである、だからそれは無理」

拒絶? ! お兄さんびっくりだよ? !

「じゃあお前の姉貴を頼れ、アイツ更識の当主? なんだろう? それくらいうとかしてくれんな」

「……

今度は迷っているのか？」この子は無表情に近いから何考へてるかわ
かりずらしいな……一夏ぐらいわかりやすいとは言わないが……

「姉を頼るのが嫌か？俺には兄弟がないから兄弟にできのいいのが
いるとつて奴の感情はわからんが、俺にも近くにできのいいのが
2人もいたからその気持ちはわかるぞ」

そこで悠を指さすと更識妹も微妙になるほど的な顔をする

「それ以前に奴（樋無）は家族だ。頼つて何が悪い？」「ううのは
開き直った方の勝ちだ。それに一夏なんて千冬さんにシスコンにな
るほど頼つてんだからお前が少しひらに頼つてもおかしくないぞ」

後ろから俺をダシに使つな！みたいなことが聞こえるが気にしない

「で、でもそれでもやっぱ迷惑……」

「迷惑か……なら交換だ！お前の願いを樋無が聞く、そしたらお返
しで樋無があ前にお願いをするんだ」

「でも……姉さんは自分でなんでもできる人」

ふむ……樋無と言う壁は大きいか……俺もアソツが何考へてるかよ
くわからん時があるな……最初は俺のデータ欲しいのかと思ってたら
悠が違うって言つてたし……

樋無を見ると悲しそうな顔をしていた、なんだかんだでいつも笑顔
などころ見ているせいか……不謹慎だがその悲しげな顔がとても綺
麗だった。しかし同時に樋無には似合わない思つた

しかしへいしたもんか……

「大丈夫！私たーちゃんとルームメイトなんだけど『ちよつと悠一。それは内緒つて…』タケミ、たーちゃんお願ひ」

『了解』

楯無の事を拘束するタケミ
俺のISなんだよねタケミちゃん？！

「それでね、いつも簪ちゃんのこと抱きしめたいって私に言つてるの。だからたーちゃんの事抱きしめてあげてくれない？これは妹の簪ちゃんにしかできないことなんだよ」

「ほん…どうに…」

「うん、本当に。確かにたーちゃんは優秀だけジシスコンなんだよ、だから妹の簪ちゃんのためなら頑張ってくれるよ」

そのことを聞いて俯いてしまつ
まあ突然だし混乱してゐるよな

「その…………その時になつたのをひします」

まあどうあえずは一步前進だよな

アリーナ

「私怒ってるんだからね悠」

「で、でもそのおかげでさっき櫛無ちゃんに抱きつけたじゃん」

「それでもー! だって内緒だつて言つたじやない」

「やうだつたけど~」

こんな口ケンカしてるが今はHSで櫛無と悠の模擬戦を全員で鑑賞している

なぜかと言つと悠が更識妹に内緒だつたことを言つてしまいケンカ（殴り合い的な意味）するわけにも行かず、タケミの『HSで勝負すれば良いのでは?』の提案に櫛無が賛成して模擬戦と言う名目で悠達の戦闘を鑑賞中

なんなんだこいつら……会話と戦闘風景があつてなさすぎてアホらしい
でもそれは話しながらでもできる」と……力の差を見せつけられて
いる

「なあ皆・・・・・」

戦闘の前に2人から軽く本気でやるから管制室に居ると言われたのであの2人以外はアリーナ会場にはいない

全員田線はモニターにくぎ付けだ

そしてみんなに聞きたいことがある

「ここに居るメンバー全員でかかつてあの一人のコンビに勝てると思つか？」

今全員が「ふう…」って言つた気がするぞおい

「勝てると思わんな、悠は万能タイプで相手によつて弱点で戦つてくる、生徒会長は工Sの能力をうまく引き出している。我々では経験も実力も足りない……無理だな」

2人の解析と自分たちの欠点を教えてくれる筈

「でもタケミとチヨルミがいたら勝てるんじゃね？」

「それは規格外でしょ？数に入れないのでよ」

一夏の質問に鈴が素早く答える

「しかし各自がそれぞれの役割をしつかりできていれば連携しだいでは勝てるのでは？」

「あの2人も連携ができるている、実際今の2人の戦い方は相手を熟知しているからこそできる戦い方をしている。ゆえにあの2人の連携を超えるには経験が足りんな」

セシリ亞の連携プレーならば勝てるんじゃ?」という質問を経験が足りないと答えるラウラ

「でも…勝てる方法は…ある、織斑くんから聞いただけだけどそれが本當なら勝てる」

「そう言って簪が俺を見てくる…………なんだ? タケミとチホルミがなきや俺はお荷物でしかないぞ?」

「そりか! 人数を活かした戦法だね」

簪が言ったことを理解したのかシャルルが「うんうん」言つてゐ一夏にわかるか? と視線を送るとさあ? と返された

「なるほど、我々が勝てるとすればアイギスの能力での攻撃か」

筆も理解したのか……、言葉には言つてないが俺と一夏以外のメンバーは「なるほど」みたいな顔をしている。ただラウラはアイギスの能力言つてないが……まあ軍人だし俺の事調べて他かもなでもアイギスの能力つて電子攻撃の事だよな?

「そうそう、僕たちは経験がなくて連携がなくて勝てないかもしないけど勝ちだけにこだわれば勝てるかも知れないってことだよね?」

「そう言って更識妹に尋ねるシャルル
それをうなずいて肯定する更識妹

「安部さんが…電子攻撃で…2人を攻めている間に…私たちが盾に

なつてれば……勝てるかも知れない」

盾つて……それつて

「勝ちだけにこだわればつむせつことかよ。……そんな犠牲あり
なんて認めないぞ」

一夏もうふうふうとうなずいて賛成していく

「しかし世の中やつこいつ」ともある。……実際考えられん」ともある
ラウラがそうこう。ラウラが言つと言葉が重いな。
実際このメンバーに悠とラウラのことを話せばありえないと思つや
つもいるだらう

『話はそれくらいに……学園トップクラスの戦闘ですからしつかり
見ておいてください』

そつタケミに言われて話は中断され全員が真剣にまた試合を見始めた

悠と楯無の模擬戦のあとは各自ペアになつての練習になつた
2人の勝敗?なかなか終わらないので止めました
でもエネルギーで言えば楯無が勝つていた

ペアの決まつていなかつた篇と更識妹は決まつてない同士で組んだ、
きつとこのままトーナメントでも組むだらう

今は軽くだがアイギスの説明をタケミがラウラに行つてゐるといふだ
その間俺は

「ジャン・ケン・ポン!」

言葉だけ見るとひとりがちゃんと相手はいるよ?!

タケミが『チヨルミと遊んでいてください』なんて言つから実行し
てるだけだ

「また負けた……まあお前いいだしな……対等に勝てるぐらいの奴
の方がいいんだが……」

じやんけんのほかに何かないか迷つていてるヒラウラへの説明が終わ
つたようだ

『ふむ……やはり零時と学ばせた方が覚えが良いみたいですね』

今じやんけんだけでそう言われるのか……

『せんせうひ語についても覚えさせる時かもしませんね』

『ほつーチェルミも隠れんのか？！

『それよりもラウラが私の腕を見たがっているので軽く模擬戦をしたいと思います』

タケミと模擬戦をするラウラを更識妹以外のみんなが…みんながかわいそうに…』みたいな顔をする

「頑張れラウラー！俺はペアとして応援するぞー！」

ラウラの肩に手を置いて応援する

そして軽く？やつた後にラウラは

「私は何をしていたんだ？」

と、記憶になくなっていた……トライアマになつたな

そして六月最終日まで何事もなく訓練をした
メンバーはラウラと更識妹、……あとで簪と言つてくれるように頼ま

れた

その際「簪ちゃんに手出したり……わかつてゐよな？」と國家代表の方に釘を刺された

モード今田ターナメント

今は男三人で更衣室で待機中、ベンチに座つて雑談中だ
これから対戦の抽選結果がモニターに映し出される

「お！決まつたみたいだな」

一 夏が一番にモニターに近づいて結果を見に行く
一 夏についていくシャルルに

「俺とリウラペアの結果を見てきてくれないか?」

と座りながら頬むと

うおおおと叫んだ——夏に驚いて俺とシャルルまで驚いてしまう

「…」夏?」

シャルルが急いで行つたので俺もついていくと

「俺たちの初戦……零時たちだ！」

と興奮している一夏が言つ

「ほ、ほんとだーようしぐね零時」

「そんなかわいく言つたって手加減しないんだからなー！」

と心中だけで言つもつが声に出して言つてしまつた

「げふんゲフンーまあこちらこそ頼むぞ2人とも」

「おう！」

サムズアップしていく一夏

「えじや俺は部屋出でへよ、じゃあ対戦で会おうなー。」

やつ血つて部屋から出でこく

出て行つて向かうのは更衣室……女子更衣室
ちやんと向かう前にラウラに話そうと連絡はいれてあるよーー。
向かつている廊下で銀髪の子を見つける

結構人がいる中で見つけることができるのは彼女が目立つからだろ？

「待たせたか？」

「構わない……行くぞ」

「うつす

アリーナにある会議室を借りて作戦タイム

基本俺は何の策も浮かばないのでラウラが考えたのを俺にできるで
きないを答えるだけだった

ちなみにタケミは前日に千冬さんに「今回のトーナメントはタケミ
に頼るな、もちろんチエルミもだぞ」と言われているのでお休み中
だ。本人は『チエルミに言語を教えるいい機会ですね』と言っていた

そしていくつかの試合が行われ俺たちの順番になった

アリーナ

「わいわいやお偉いさん方来てるんだな……まあIISだしそりだよな」

『「それもあるだろ？がおそらく男がいるところことが重要なのだろ？な」』

『「いや俺がポロリて口からでた言葉にもちゃんと反応するよ？」なつたよなラウラウって

『「あはは、試合前だって言つのに緊張感ないね零時は」』

笑つていうシャルル

実際あとは合図さえあれば戦闘が始まつてもおかしくはない状態なのだ

『俺だつて緊張はしてるが見知った顔の2人が相手だぞ？そんなに緊張してらんないつての』

『「実は俺も……楽しみつて所だけど……ボーデヴィッシューお前だけここは勝つてやるー」』

『「ふん！かかってこい雑魚が！……！」』

言い終えて2人が構えたといひで

ビ――――――――

試合の合図だ！

すぐさま動き始めたのは一夏

すぐに瞬間加速でラウラに接近する
それをいとも簡単にAICOで止める

『「開始直後の先制攻撃か、わかりやすいな」』

『「そりゃどうも」』

ラウラが肩にある大型レールカノンを起動して一夏をロックする
ロックしたことで俺にも警笛も文字が浮かぶ

『「やせないよー。』』

一夏の後ろから現れるシャルル

まあそれは俺とチエルミがやつたことがあるだけに俺にもしていく
んじやね？みたいな予想がある
実際この2人は俺が実践してるのみてラウラには有効だと知つて
いるのだろう

「そんなことをせるか！」

一夏の頭上から現れるシャルルを瞬間加速+加速装置で加速をして
体当たりをする

このとき自分がダメージを受けないようにシャルルと俺の間に盾を
一重に展開してから体当たりをする
この時壁に当たるまで突進を続けて一夏とラウラから離れる

「ウラバサ一夏ならウラガ勝つのは俺にもわかる

壁に当たったときに絶対防御が発動したせいかシールドが削れてい

『「まさか壁に当たるまで来ると思わなかつたよ、でも離されて困るのは僕たちじゃないよ」』

そんなことわかつて

「俺じゃシャルルに勝てないって言いたいのか？」

『「やうだね、タケミカラレばつかじやない」といを見せてみてよー』』

シャルルにしては挑発じみた言葉と同時に瞬間加速で俺に接近していく

手に持つていたのはショットガン

至近距離で撃たれたらたまつたもんじやない！

盾を構えて防御姿勢を取り、盾に隠れるようにブレードを展開しておぐ

しかしシャルルは接近しようとしてバック

その手にはすでにショットガンではなくグレネード

あんなもの盾で防いでも盾」とダメージが通つてしまつ

しかし通つてしまつのがわかつていてももう防ぐしか道はない
動いて回避しても高速切替で切り替えられたグレネードを避け
る時間もない

だからここは反撃ができる体制でグレーネードの攻撃をへりつた

すぐさま煙幕から脱出

状況を確認するとエネルギーはあと250
もともと少ないアイギスにとつては痛い

シャルルの位置を確認しようとするトラウラと一夏の方に向かつて
いるのが見えたため加速装置を展開して追いつこうとする
するどどしだのかラウラと戦闘していた一夏がシャルルに入れ替
わりに俺に接近してきた

『「零時の相手は俺だ！」』

白式の唯一の武器の雪片式型を振るつてくる一夏
最初にラウラに宣言していただけに今の行動がわけがわからず反応
が遅れてしまった

寸前で持つていた盾を一夏に投げつけて、それを一夏が対処（斬つ
て破壊）している間に上空に距離を取る

しかし白式の方がスピードが速いせいか追いつかれる
ブレードを構えて近距離戦を仕替えよう試みる

すると足首に何か巻きつき引っ張られ
一夏が斬りつけてくる前に俺がいた場所にグレネードの弾が通りす
ぎる

『「もつと周りをみろ零時！これは個人戦じゃないんだぞー目の前の敵だけに集中するな！」』

個人間秘匿通信で叱つてくるラウラ

足に巻きつけたのはラウラのワイヤーでそれを弾はシャルルのだつたようだ

「助かったラウラ」

そのままワイヤーで引き寄せなれるようにラウラのもとに近づき

2人と対面するような形で試合が一時固まる

「これじゃ試合開始前と同じだな」

『「ああ、しかしこれは時間がたてばたつほどどちらが有利だ』』

そうだ、時間があれば戦闘中でもいくらかましにアイギスの能力も使えるよくなってきた

実際今もシャルルに対して電子攻撃中だ、それにチエルミの時にISの機能とコアは別であると感覚的に理解してきた、これを活かして部分的に乗つ取ることもできる

全体をいつぺんに乗つ取るより武器すべてを乗つ取つて使えなくなる方が断然早い

今はシャルルの武器を少しづつ使えなくしている

この今瞬間にシャルルが手にしていたグレネードの使用許可機能を乗つ取つて使用不許可にした

このことによりグレネードが使えなくなつた、むしろ今のが最後の武器だ

『「零時!そつちばかりに集中するな!』』

止まってしまったことで能力だけに集中してしまったせいで一夏が俺に接近していたことに気づかなかつた

しまつた！一夏の奴零落白夜使ってやがる…今のアイギスなら一発くじつただけで負ける！

『「うおおーーかひつたあああーー」』

『「うおお……もうひとつあああ……」』

や、う、あ、い……これは絶対にくらう。

そう思っていたが一夏が俺の一歩手前で止まる

A-H-O-Cか？！一夏から距離を取りラウラの方を見ると

『「僕を忘れないでね！！」』

ラウラの懷に入っているシャルルが見える

武器は全部封じたはずだった……しかし盾がバージされて出てきた
ものは封じていなかつた

盾に隠れていたモノを見逃していたことによつ追いつめられた

射突？！俺が持つてゐる射突よりもデカい？！

ガツン！！

発射された杭を受けてラウラが壁まで飛ばされる

『「ぐはっ……」』

「ラウラ……」

飛ばされたラウラを追撃するシャルルを追いかけるために加速装置で追いかける

『「俺を忘れんな！」』

AICのなくなった一夏のことを見失してしまって零落白夜をへりつてエネルギーがなくなった

「くそー。」

大会ルールでシールド一で負けになつてゐるためとまだ戦闘が行われているときのためにまだHSは展開している状態だ

『「お、おい零時ーなんか様子がおかしいぞー。』』

一夏に言われて2人の方を見ると
ラウラのHSがビリビリと電気を放電してHSの形を変え、装甲などが溶けたようにグニャグニヤになりラウラを取り込もうとしている
「ラウラー。」

明らかに異常事態であるからラウラを助けなきや
ではなく勝手に体が動いてラウラを助けようとしていた

『HSからラウラを引きはがしてへだせー。』

「言わねなくてもーー。」

ラウラのHSに手を伸ばすと

「くそー。」

「うぐー。」

体に電流が走りエリが強制解除された

『私のエネルギーを分けておきました、もう一度展開してください』

アイギスを展開して

ドロードロのエリの中にもう一度手を入れる

今度は電気が来ない代わりにどんどんエネルギーがなくなつていいく手探しで探っていくと腕のような感触があり引っ張る

「うううー。」

掴んだ感触は右腕だった

そのままウツラウツラを出せやつなので引っ張り出す

が、あとちょっとのところでドロードロのエリだったものがウツラウツラを離さなこようにしてくる

『侵入してエリの機能を一時的にマヒさせてください』

言われたままにエリに侵入して

特にどうやらかわからずチャフのような妨害系のイメージをしてエリ内で最も今起動していた機能に呑きつけた

がそれがうまくいかない

もう一度試にイメージして呑きつけようとすると

私がやる、お前は現実に戻り我が主を守ってくれ

そうしたかつたわけじゃないが現実に戻ってきて、試に引っ張ると
さつきと違い簡単にラウラを助けることができた
その際に眼帯が取れてしまうが気にせず
ISから離れる

「ラウラー・ラウラー返事してくれ！」

引っ張りだしたラウラの反応を見るために声をかけていると
ISから出したと言うことは無人になり待機状態になると思いきや
ドロドロだったものがだんだんと形ができてきて最終的には黒い物
体でISに乗つている俺たちよりも少しテカく、姿は女人人がIS
を開展している姿だった

ええっと・・・・・飼っていた犬が亡くなり元気のない瑠璃です
少し更新が遅くなるかもです

4.1(前書き)

- 4.1投稿しようとしたら4.0の内容で投稿してしまって消えてしまつたw
- しかも内容覚えていない……
- 4.2ができたんで4.1は…………繰り下り行きます…………

ですので内容薄い＆短いです

あのT-S誰かに似てる……それは後ででもいいか…
今はアイギスから発せられる警戒音が半端ない

『居る俺・シャルル・一夏が武器を構えて警戒態勢をとる
すると止まっていた黒いT-Sが動き出す
それもものす』『スピードで一夏へと接近し手にしていた刀のよう
なので一夏を攻撃しようとする

『武器に反応して来るよつですー武器をしまつてくださいー。』

一夏の前に出て黒いT-Sの攻撃をカーボンブレードで受け止めすべ
く展開を解除するタケミシゴウアルソア・レーゲン
そして一夏を掴んで黒いT-Sとの距離をとる

俺は出でたタケミの声によつとを聞いて武器をしまつ

『「許せなー」—AIS絶対許せなー。』』

タケミの後ろから武器をしまわずにむしり突つ込んで行きやうな一夏
それをじとも簡単に止めてくるタケミ

今度は一夏がラウラのT-Sに対しで許さないのか……
似てるな一夏とラウラって……特に千冬さん好きとか?

一夏の雪片に反応したのか再度タケミと一夏の方へと接近していく
黒いEIS

『まつたく……しょうがないですね』

またブレードで対応 ブレード解除 そのまま回転して一夏を蹴り飛ばす 黒いEISから離れる 黒いEIS止まる

ん？蹴り飛ばす？

「うわー！タケミ向してんだよー。」

『従わないで強硬手段です、それにチヘルミに受け止めさせましたから』

飛ばされた一夏を見るとチヘルミに受け止められて壁手前で止まっていた

一夏が自分で立とうとするのと同時に雪片ボル型が具現維持限界、つまりエネルギー切れ寸前つてところだ

『頭は冷えましたか？』

『ゲホッ！ゲホッ！……冷めたよ……アイツ絶対ぶちのめしてやる』

『反省してねーwww』

思わず笑ってしまった
でもわかつたことがある

「お前本気なんだな一夏？」

「当たり前だ！」

即答ですか……

「HエネルギーだつてHIS展開してんのがやつとなのHビーフサツヒテ戦うんだよ」

「殴つて戦う」

アホか？…いやむつも殴つてきたりするけど……

「Hエネルギーがないなら持つて来ればいいんだよ。僕のHエネルギーをあげるよー夏……その代り絶対勝つてね」

「おー、サンキュー・シャルル」

感謝してんなら一秒でもシャルル見て言えっての……

シャルルがエネルギーを送り始め

レーダーにHISの反応が出てきたのでわざわざ見ると教師部隊があの黒いHISの征圧に来たことがわかる

そしてシャルルのHISが解除され、雪片状態を出す一夏そのまま黒いHISとの戦闘を始める一夏

落ち着きのない子に育てたつもりはありませんよ…つてそんなことより

「弟分のために俺も働くか……シャルル、ラウラ頼むわ、多分気絶して死ぬだけだと思つ」

外れたをラウラの手に握らせてシャルルに預ける

「零時もエネルギーやばいんじやない? もともと少ないんでしょ?」

シャルルが心配してくれる

が

生身でアリーナにいるお前の方が危ないってのな

『それならば問題ありません、チエルミから持つていけばいいのです。取り込んだISですからエネルギーを共有することも可能です。新たなディスプレイが出てきてエネルギー共有の許可／不許可の文字が出てくる
もちろん許可を選択する

無くなりかけていたエネルギーが回復

「つひもとより多いし?...?..」

「00?...ちよ、俺泣きそうなんだけど.....

『・・・・・。では始めましょ!』

両手に電磁投射砲と可動兵装担架システムに突撃砲のチエルミ

大剣と盾を持ち、可動兵装担架システムにハルバートと突撃砲のタ

俺はチョルミ経由でラインメタル（連射の効く中距離支援砲みたいなもの）を出す

「ラウラ頼んだぞシャルル」

「うん、任せて」

そう言ってアーリーナから出て行ったシャルル

空に上がり教師陣たちの前に立ちはだかる

『10人を分けて我々を相手にする部隊とあの黒いエスの対処に向かわせるみたいですね』

なぜわかるのか気にしたら負けだと思います……

『まあそんなことさせませんが』

『いひいう戦闘時はやはりあの言葉から始めないとですね』

そつかあれか……

「OPEN COMBAT（オープン・コンバット「開戦」）！！」

10対3が始まりしょっぱなにチエルミの電磁投射砲をもろにくらつた2人が脱落

それは当たり前だ

驚異的な速射性がもたらす飽和攻撃力と、極高初速による貫通力により一発で絶対防衛が発動したのだから

そしてチエルミがそのあと相手にした教師の数は3人

その混乱に乗じてタケミが接近をして大剣を片手で振り回し一人の教師に攻撃する

それを止めようと近くにいた別の先生が助けに入ろうとするがタケミが持っていた盾を投げられとっさに受け取つてしまい盾を貫いて大剣で攻撃される、盾の代わりに可動兵装担架システムからハルバートを取り

可動兵装担架システムには突撃砲を展開
大剣とハルバートで連撃を加えつつ兵装担架を動かし突撃砲を撃つタケミが結局相手にし始めたのは5人

今戦闘できるのは8人でチエルミとタケミが相手をしている

俺は距離を取つて離れ

その間に俺は全IDSに侵入して操作系統を乗つ取るつとする

『「安部君を狙つてください！彼を野放しにすればこちらの負けです！」』

山田先生め……余計なことを…

が、しかし今回は正直楽だ

今先生方が装備しているのはリヴァーアイヴ
量産型は侵入しやすい

例えるなら全部同じ迷路だから覚えていれば簡単に侵入できる

前にアイギスの練習として打鉄とリヴァーアイヴの両方を1～2分で乗
つ取れとタケミにやらされた

その際『いづれ敵対することがあるかもしれない』で覚えておいて
ください』と言われて覚えていて今も覚えているよかつた

その時は俺が止まって集中して1～2分でできた、今は戦闘中だから4～5分ってところか？

いやその前にハイパー・センサーを機能させなくしたらどうなる？武
器を使用不可にするより簡単なんぢやないか？武器は数があるから
な…ってことは1～2分でいいんぢやないか？

ISはハイパー・センサーがなきや人間の目ぢや戦闘が困難になるは
ず……よし！

山田先生の指示により2人の先生が俺に向かってくる

『今の零時なら2人くらい相手できますね？決して先ほどみたいに
ラウラに助けてもらつたような状況にならないでくださいね』

とりあえず自分で何とかしろってことだろ？！

タケミが相手にしていた5人のうちの2人がこっちに来た
向かって来た先生は山田先生と体育の先生の柏木…柏木先生だ！名
前がわからないだけだ！

やはり山田先生は銃器の扱いがうまいのか向かってくる途中で止まりマシンガンを呼び出している

柏木先生はブレードを持ってそのまま接近してくる

こちらはラインメイタルで近づかせないよう撃ちつつ後退&柏木先生のハイパー・リンクに侵入をする

この時山田先生の射線上に柏木先生が来るよう移動して壁にする

30秒！あと少しだ！

しかし柏木先生が予想以上に接近戦タイプなのかかなり接近されました

ラインメイタルを使いながら何とか片手に突撃砲をだし牽制する、ラインメイタルをしまい代わりにブレードを出し接近戦に持ち込んでも大丈夫なように構える

そこで柏木先生が瞬間加速で接近

ブレードで軽く受け流し突撃砲を零距離で当たるように本人に銃口を当てようとする

が、瞬間加速で後退していく

と同時に山田先生が後退していく逆の方向からグレネードを撃つてきた

俺には避けることができずくらつてしまつ

その代り柏木先生のハイパー・リンクは乗っ取れた

今先生は真っ暗の画面しか見えない
IS同士で視線共有はできるがそれもできないようにした

『「くつ……恐ろしいなその力……君ははわかっているの? その力
は対IS用能力どのISよりも強力なのよ。1分12秒……泣けて
くるわね」』

柏木先生はそう言つと

『「まあ短いけど楽しめたから素直に私は下がるわ。また今度私と
純粹に対戦しよう」』

そう言つてゆつくり地面に下りていく

ISがあるとはいえて見ていて危なつかしいので状態をもとに戻した

下りて行つてい先生がこちらを見て笑つていた

戻してもあの先生はきつと戻つてこないような気がしたから戻した
のだ

『「私はそう簡単にこきませんよー。」』

何やう山田先生がやる氣マックスだ

距離を離せば一方的にやられる

俺なんかより銃の扱いがうまいだろ？相手に距離を開ける必要はない

いと思いブレードを構え接近する

が

『2人ともそこまでです』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7745t/>

I S -AVERAGE or HALF-

2011年11月21日16時19分発行